

ゴブリンマスクを被っ
てみれば、文明開化の
音がする！

ゴブリンライター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、エオルゼアのゴ布林族「アルデニクス」は、大きな大きな「ヤーンの 大穴」を覗き込んでみると、うっかりすっかり落っこちて、気付けば見知らぬ異世界にいた！

そこで出会ったのは、やっぱりというかなんというか、同じゴ布林族！

それから始まる異世界ゴ布林ストーリー！ ゴ布林冒険者アルデニクスの明日はどつちだ!?

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

目次

行きて帰りしゴブリン

ゴブリン異世界へ	1
名付けと芸術と爆発と魔法と、そしてゴブリン	21
ファースト・ゴブリン・コンタクト	1 / 39
ファースト・ゴブリン・コンタクト	2 / 62
秩序の中の混沌（ゴブリン）	94
喋るサカナと喋るゴブリン	118
人間のようなゴブリン	153
ゴブリン・アイデンティティ	184
ゴブリンのような人間	216

ゴブリン異世界へ

若きゴブリン族の冒険者アルデニクスは、ガスマスクに防護服、背中には大きな荷物を背負った、一般的なゴブリン族の青年だ。

今日も今日とて興味深いものや面白そうなものを求めて、北へ南へ東へ西へ……本日もやって来ましたのは、ギラバニア辺境地帯にある「ヤーンの大穴」——巷で噂の冒険者が、世界の命運を懸けて戦った、大きな大きな大穴だそうな。

今じやなんの変哲もない大穴だけれど、ほんのちよつと前までは、奇妙に変色したエーテルに包まれていた。その不思議な不思議な大穴の奥底で、「光の戦士」と呼ばれる冒険者が、「オメガ」という名の古代兵器と、切った張ったの大激闘！

見事勝利を収めたは、ココロを持った光の戦士。ココロを持たざるオメガの方は、小さく細かく成り果てて、*“始まり”*と共に旅立った。そんなこんなお話だ。

アルデニクスはととて興味深げに、大穴のなか覗き込んだ。1マラムもありそうな大穴が、ゴオオオオオという音を立てて口を開いている。あまりにもあまりにも深すぎて、底は真つ暗で見ることではできない。まるで「七獄」の底まで、続いているかのよう。それでも恐れ知らずのアルデニクスは、もつともーつと身を乗り出して、大穴の底覗

こうとした。噂じゃ大穴の奥底は、「七獄」ではなく「次元の狭間」という、これまた摩訶不思議なところに続いているらしい。

そこがどんなところか知らないけれど、ゴブリン一倍好奇心旺盛なアルデニクスは、そこがどんなところか知りたかった。

だからもつともつともーつと身を乗り出して、大穴を覗こうとした。そしたらこしたら突然突風が吹き荒れて、アルデニクスの背中をブウウウつと押した。

普段ならなんてことない突風だけでも、とてとて身を乗り出していたアルデニクスは、うっかりすっぴかりバランスを崩してしまった。

ゴブゴブ踏ん張って我慢したけれど、トドメとばかりにフワツと吹いて、あくれ〜つとアルデニクスは大穴の中に落っこちた。

それからこれから、アルデニクスをエオルゼアで見たものはいない。

*

*

ヤーンの大穴に落っこちたアルデニクスは、気付けば見知らぬ森にいた。「黒衣森」でも「夜の森」でもない、不思議な不思議な大森林——まあ、長いゴブ生そんなこともあるさゴブ、とあんまり気にしないアルデニクス。いつでもどこでも樂觀的なのは、どの

ゴブリンでも変わらない様子。

そんなこんなで不思議な森を彷徨い歩いて幾星霜、運良く同族であるゴブリン族と出会ったとき。どうにもこうにも話を聞けば、古ぼけたボロボロの遺跡なかで、身を寄せ合って暮らしているらしい。

それならこれならよくある話だけれども、しかしてしかしておかしな様子。なんとビックリこのゴブリンたち、「ゴブリンマスク」を被ってない。一体全体どうしたことが？ アルデニクスは尋ねました。

「シユココオ……シユココオ……」

どうした　　こうした　　オマエたち

どうして　　こうして　　マスクを被らぬ？

それじゃあ　　これじゃあ　　とてとて苦しい　　息はゼイゼイ　　汗はダラダラ　　これこれみつともないゴブリン

ゴブリン族にとつてマスクは、とてとて重要なものである。彼らは一生涯マスクですごし、無理に外そうとすれば、たちまちドカンと爆発する。

どうしてこうして、そこまで頑なのかは知らないけれど、ある学者の話によれば、ゴブリンたちには外の空気は猛毒だとか、なんだとか。嘘か真か色々あつて、どれがホントかゴブリンにも分からない。

兎にも角にも、ゴブリン族、とてとてマスクは欠かせない。それを外して暮らすなど、全く考えられないことである。

「ウツセー！ 不気味なゴブリンめツ！ マスクなんてモン、シラネーヨ」

ところがどっこい、びつくらこいた。アルデニクスが出会ったゴブリンたち、とてとて汚いゴブリン語で、そう罵るようになってきた。

なんとも野蛮な言い草です。みれば彼らの服装も、とてとてみすぼらしく不衛生。まるで原始ゴブリンのよう。文化的で文明的な、栄えあるゴブリン族とは、とてとてとーつても思えない。

それでもアルデニクスは落ち着き払って、なだめるように答えます。

「これはビツクリ なんとビツクリ

こんなに そんなに イカしたマスク 被らなければ分からない 「美男美女」が分からない」

ゴブリン族には独特な美的感覚があり、ヒトのそれとはそこそこ違う。生まれて死ぬまでマスクを被り、それでも彼らにや「i x」（美男）と「o x」（美女）の概念がある。もしかするとひよつとすると、彼らは「マスク」で「美男美女」を見分けてるのかも知れない。

「へエアツ!? 「美男美女」ってなんだゴブ?

それはヒトのメスよりイイものかゴブ？」

アルデニクスの言葉に興味を示したゴ布林たち。知性の欠片もなさそうな彼らだけれど、そこはここはゴ布林族。知的好奇心に忠実で——もしかすると「性欲」に忠実だったのかもしれないけど——アルデニクスの話に耳を傾けた。

「シュココオ……シュココオ……」

もちろん そちろん そうだゴブ

ヒトの娘は プヨプヨ フヨフヨ 柔らかく うっかり押すと潰れそう

ゴ布林族の女の子 カリカリ トロトロ イイ感じ！

たとえて そらえて 言うなれば まるでプーンと臭うチーズのよう！」

「へええええ、そうだったのか、そうなのか！ どうでこうりで、ヒトのメスは壊れやすい。ちよつと乱暴に扱えば、すぐさま泣いておかしくなる。そうだったのか、そうだったのか！」

アルデニクスは知らなかったが、このゴ布林たちは「ハイデリン」のゴ布林ではなく、「四方世界」というまた別の世界のゴ布林だった。

なのでアルデニクスの常識が通用するわけがないのだけれど、この世界のゴ布林は知能が低いわりに学習能力はやたらと高かったため、何やら常識外れなアルデニクスの言葉も、すんなりきっちり受け入れてしまったとき。

新たな「美男美女」という概念の伝来に、ゴ布林族は沸き立ちました。

「それならこれならオレたちも、今日から「マスク」を被るゴブ！」「美男美女」になるんだゴブ！

だからだからお願いゴブ。どんなこんな「マスク」が良いか、教えて話して欲しいゴブ！」

「シュココオ……シュココオ……」

それなら これなら 教えよう

我らが 彼らが ゴ布林族 マスクを被って幾星霜 色々色々試したけれど 小さな違ってみんなイイ！

思い思いのゴ布林マスク 作って集めて被るといいゴブ！」

アルデニクスの言葉に、ゴ布林たちは「オオオオ」つと喝采をあげた。しかし、中には冷静なゴ布林もいるようで、オドオド、ワアワア不安そうに訊いてくる。

「ただどだけどオレたちは、マスクの作り方知りません

思い思いと言うけれど、知らなければ作れない、作れないなら奪うしかない」

あれまそれま由々しき事態！ だけでもけれどもアルデニクス、すかさず素早く言いました。

「シュココオ……シュココオ……」

心配するな 心配ない オマエたち知らなくても アルデニクスが知っている 作り方を知っている いろんなことを知っている

今日からこれからオマエたち 「奪う」じゃなくて「創る」ゴブ！

奪うゴ布林 野蛮人 みんなに嫌われ 迫害者 みんなにみんなにイジメられる
創るゴ布林 文明人 みんなに好かれて 歓迎者 みんなにみんなに喜ばれる！

ゴ布林たちはアルデニクスの言葉に、より一層「オオオオ!!」と沸き立ちました。そうか、そうか、そうだったのか！ オレたちみんなに嫌われていたのは、襲って奪って犯していたからなのか！ そうかそうか知らなかった。ワイワイ、ガヤガヤ、ホグホグ、ゴブゴブ。

ゴ布林たちはこれまで本能で生き、本能だけが全てでした。本能で犯し、本能で襲っていたのです。どうしてこうしてそうなったのかと言えば、そう産み落とされたからとしか言えませんが、兎にも角にもそういう生物だったのです。

しかし、そんな本能に忠実なゴ布林族でしたが、どういう訳か学習能力も旺盛でした。それ故アルデニクスという異物の登場により、本来あるはずのない「知性」にも、うっかりすつかり目覚めてしまったのです。

「今日からこれから オマエたち マスクを被ったイカしたゴ布林！

今日からこれから オイラたち マスクを被ったステキなゴ布林！

ゴブリンマスクを被ってみれば 文明開化の音がするゴブ！」

アルデニクスに合わせて、他のゴブリンたちも唱和する。

「ゴブリンマスクを被って見れば、文明開化の音がするゴブ！」

ゴブリンマスクを被ってみれば、文明開化の音がするゴブ！」

文明開化の音がする、文明開化の音がする！

割れんばかりの大合唱、森の中に響いていく。

文明開化の音がする、文明開化の音がする！

二「文明開化の音がするゴブ！ 文明開化の音がするゴブ！ 文明開化の音がするゴブ！ 文明開化の音がするゴブ！ 文明開化の音がするゴブ！ 文明開化の音がするゴブ！」

斯くして……「四方世界」のどこかの森で、ゴブリン族の文明開化が、人知れず始まったのでした。

*

*

アルデニクスが異世界のゴブリンと出会って、それなりの季節が流れた。正確な日数は良く分からない。ゴブリン族はそういったことを気にしない。アルデニクスも気にしない。

「シュココオ……シュココオ……」

気付けば気付けば、そこそこの時間、流れたゴブ

ゴブたちみんな、イカしたゴ布林、なったゴブ

これもそれも、アルデニクスのおかげゴブ！」

さながら原始ゴブリンのようだったゴ布林たちは、今ではアルデニクスの指導の下、思い思いの「ゴ布林マスク」を作っていた。まだまだ拙く下手つびなマスクだったけれども、自分たちの手で創り上げた、生まれて初めてのステキな「贈りもの」だった。

「シュココオ……シュココオ……」

そんなこと言われると、とてとてとーっても照れるゴブ

アルデニクス、ちよちよいちよちよいと、手伝っただけ

ロツクニクスたち、とてとてとーっても頑張った！」

マスクを被ったゴ布林たちは、アルデニクスがもたらした風習に従い、これまたそれまた思い思いの「名」を名乗っていた。「固有名詞」という概念がなかったゴ布林に、初めて「名前」というものもたらされた瞬間である。

ゴ布林族の命名規則に則って、あるゴ布林は「i-x」（美男）を、あるゴ布林は「o-x」（美女）を名乗っていく。名付けはゴ布林たちにとって初めてのことであ

り、誰も彼もが夢中になった。

「昔々のそのまた昔 あるある賢人 こう言ったゴブ

『名は心を形作り 心は体を形付ける 命名は精神を作り上げることであり 命名は肉体を決定づけることである』

ようするにこうするにこういうこと 名前はとてとて大事です” よくよく考えて決めるゴブ!”

アルデニクスの言葉に、ゴブリン族に稲妻が走った。なにそれなにこれスゴくない? 「名前」ってちよースゴくない? なんかとつてもスゴくない? それぞれ名乗れワレの「名」を! やれやれ名乗れキミの「名」を!

実際はそんなにスゴくもない話だったが、原始ゴブリンにとっては、天啓とも言える閃きだった。我先に我先にと名乗りをあげるゴブリンたち。

食事が好きなゴブリン、木陰がお気に入りゴブリン、岩のように固くなりたいゴブリン、俊敏なゴブリン、ノロマなゴブリン、女好きなゴブリン、男好きなゴブリンなど、みんなみんな思い思いの「名」を名乗っていく。

そしたらこしたらどういふことか、まさかまさかの事態が起こる。ゴブリンたちが「名前」を名乗ると、なんとなんとゴブリンたちに、「個性」と「性別」が生まれたのである。

イートミニクスは食事好き、ツリードナロクスは木陰で休む、ロックニクスは岩よりも固いかもしれない、ソニックソックスはとつても素早い、ノローピニクスはのんびり屋、オクスニクスは女好き、ニクスオクスは男好き、みんな違ってみんなイイ！

「i x」を名乗ったゴブリンは、オスオス雄らしいオスゴブリン。「o x」を名乗ったゴブリンは、メスメス雌らしいメスゴブリン。二つの違いもそれまたイイ！

オスとメスでキャツハウフ、美男と美女でウツフキャハハ。くんずほぐれつ色々して、産めよ増やせよゴブリン族。ヒトのムスメを襲わずとも、増やせるもんだゴブリン族！

そんなこんなで「個性」と「性別」を得たゴブリン族。あれこれこれこれ能力別に、「個性」にあつた仕事を決めた、「性別」にあつた役割を決めた。

「狩りが得意なゴブリンは みんなのために 狩りをする」

料理が得意なゴブリンは みんなのために 料理する

採るのが得意なゴブリンは みんなのために モノを採る

作るの得意なゴブリンは みんなのために モノ作る

育てる得意なゴブリンは みんなのために 子育てする

みんなみんなやることあつて みんなみんな意味がある

みんなで力合わせれば みんな幸せ ちようハッピー！

そういったわけで色々あって、「四方世界」のどこかの森の、奇妙な奇妙なゴブリンたちは、見事な見事な発展を遂げていく。

「狩りとか採集する時は 槍とか弓とか便利ゴブ 斧とかハンマー便利ゴブ

どんどんじゃんじゃん作るゴブ どんじゃんどんじゃん使うゴブ」

まずはアルデニクスはそこら辺に転がっている木や石や蔓で、そこそこ立派な石器を作ってみせた。それはとつても原始的な道具だったけれども、そこは知識の民ゴブリン族のアルデニクス、デキはそれなりだったとき。

モノを作るの得意なゴブリンたち、それを見よう見まねで真似てみる。始めはお世辞にも上手くはなかったが、次第にそれなりのモノでできた。

「最初は簡単単純でも そのうちこのうち 複雑にできる

剣や銃も言わずもがな ドリルやノコギリ作れるようになる ビームやミサイル撃てるようになる！」

アルデニクスの言ったことは、たいそう物騒な目標だったけれども、ゴブリンたちにはビームとかミサイルとか “なんじゃそりや” だったので、取り敢えず「オオオオ」とか言つて盛り上がつておいた。

そうやって作られた「道具」を使い、ゴブリンたちは原始的な狩猟生活を始めた。これまで略奪や強奪でしか食料を入手出来なかったゴブリンたちにとって、これは画期的

な手法だった。

「手に入れたブツは「火」で調理すると とてとて美味しいゴブ！」

煮ても焼いてもよろしいゴブ！ 蒸しても炙っても美味しいゴブ！

火はとてとてイイものだゴブ とてとてとーっても便利ゴブ！」

そう言つてアルデニクスは、手に入れた肉を持つて、「火の魔法」を使つて見せた。メラメラボウボウ炎が燃える。それに肉を近づけて、ジュージュージュー焼いてみた。

こんがり焼けたお肉の匂いが、たちまち辺りに広がつていく。ゴ布林たちは歓声をあげた。こんなにそんなに美味そうな匂い、嗅いだことはありやしない！

「スゴいぞ スゴいぞ アルデニクス！」

しかしして、しかしして どうしたらいい？ 「火」を生み出すには どうしたらいい？」

「それは とてとて簡単だゴブ」

この「火の魔法」 ごくごく初歩的な魔法ゴブ

囁き 唱えて 念じれば 誰でも彼でも 使えるゴブ」

実際にはそう簡単にはいかなかったが、そこはベテラン冒険者のアルデニクス。どうにかこうにか指導をして、何人かのゴ布林が「魔法」を操れるようになった。

彼らの使う魔法は、「原始魔法」という至極単純な魔法で、威力も範囲もそれなりでし

かなかったが、生活を向上するには十分すぎるくらいに効果があった。

「火は とてとて素晴らしいモノだゴブ

暖かくて 明るくて 優しくて 良いモノだゴブ

ときたま アツアツ メラメラ だけど ちゃんとときちゃんと扱えば こんなにステキなモノはない」

アルデニクスの言うとおり、ゴ布林たちは時に失敗して火傷をしたり、火事を起こしたりしたが、その度に学習し、「火」を思うがまま扱えるようになった。「火」は色々なことに使えた。調理だけでなく、暗闇を照らしたり、寒さを和らげたり、モノを焼いたり加工したり、モンスターから身を守ることにうってつけだった。

こうして「火」を手にしたゴ布林たちは ますます活動範囲を広げていくことになる。

遠くの湖まで探検してみたり、切り立つ崖まで行ってみたり、ある洞窟の奥まで冒険してみたり、こっそり、ヒトの集落に忍び込んでモノを盗んで、みたり……それが見つかった若者ゴ布林は、後でこっぴどく怒られた。

「ヒトのもの盗むと怒られる とてとてスゴく怒られる

それこれ ヒトの「法律」で ゴブたちも破ると怒られる なんてか知らんが怒られる とてとてとーっても怒られる だからダメダメダメ絶対！」

それは、アルデニクスがかってもつと若かりし頃に経験した、重要な教訓の一つであつた。

つい出来心でちよいとやらかすと、あれよあれよと「モルディオン監獄」へ。そこでとてとて恐ろしい看守から、こつてりごつてり怒られた。今じゃそこそこ大人しくなつたアルデニクスも、昔は結構やんちゃだつたのだ。

「ゴブたちいっぱいいるけれど　ヒトもいっぱいいるんだゴブ

とてとてとーつてもいるんだゴブ　ゴブたちよりもいるんだゴブ

だから仲良く暮らすには　「尊重」し合う大事ゴブ　「相互理解」が大事ゴブ」

アルデニクスの説法は、まだまだゴブリンたちには難しすぎて、よくよく理解できなかったけれど、*「取り敢えずヒトを襲うはダメなのか」*と、なんとなくだが理解した。

「うんうん　わかつたゴブ　わかつたゴブ

ヤングシユリクス　もうしないゴブ

だから　あのオシオキだけは！　あの恐ろしいオシオキだけは勘弁して！」

アルデニクスの「オシオキ」は、小鬼も黙る恐ろしいモノ。曰く、*「父親譲りのオシオキ」*らしい。これによってゴブリンたちに「秩序」が生まれ、「罪」と「罰」という概念が生まれた。原始的な「法」の誕生である。

こんなことがあつた結果、「森外れの農村」では、ゴブリンの被害が格段に減つたけど、

農村のヒトたちは「ラッキーなこともあるもんだ」と、あんまり疑問にも思わなかった。もちろん、アルデニクスもゴ布林たちも、元々能天気なこともあって、別にあんまり気にしなかった。

狩猟生活を始めたゴ布林族の獲物は、森に住むシカやヤギ、リス、イノシシ、クマ、トリ、ムシ、サカナ、木の実などで、兎に角なんでもよく食べた。時には手痛い反撃を受けることもあったが、そこは「数」と「道具」、そしてなによりも「知恵」に勝るゴ布林たち、アルデニクスを中心として、幾度となく危機を乗り越える。

アルデニクスを始めとするゴ布林たちは、もはや「森の王者」と言っても過言ではなかった。今日も我が物顔で、ゴ布林たちが森をゆく。

「とはいえそはいえ 取り過ぎは いくない良くない ご法度ゴブ」

「どうしてこうして ナゼなのゴブ? ゴブはお腹いっぱい食べたいゴブ! とてとて いっぱい食べたいゴブ!」

アルデニクスの言葉に、珍しくも食いしん坊の「イトミニクス」が猛反発した。

彼は食べることが何よりも好きなゴ布林で、何でも食べちゃう悪食としても有名だったが、それ故に新たな「食材」を発見することもあり、ゴ布林たちの台所事情に、かなりの貢献をしていた。もちろん、その分食べてもいたが、そこはそれはご愛嬌である。

そんなわけだからイトミニクスの発言は、ゴ布林族の中でも一定の支持を得ていた。あるものあるだけ取って食べて、何がいけないというの？ ということだ。

「やれ取れ やれ食え 好き放題 いずれ取るもの尽きるゴブ いずれ食うもの尽きるゴブ」

ゴブの友達シルフ族 森の恵みで生きている おんなじおんなじモーグリ族 森の恵みで暮らしている

シルフもモーグリも言っていた 森を大切にするんだゴブ そうすりゃ森は恵みを与える でもでもしなきゃ いつか森から追い出される〜」

それは実に原始的な精霊信仰の類であったが、元々原始的なゴ布林たちにとって、そこそこ受け入れやすい話だった。「祈らぬ者」から祈る者へ……初歩的なゴ布林信仰の始まりである。

「なるほどなるへそ わかったゴブ」

でもでも それでもイトミニクスは お腹いっぱい食べたいゴブ 森も大切にしたいけれど お腹もいっぱいしたいゴブ」

そうだーそうだーとゴ布林族。それは困ったクマった大変だ。アルデニクスは考える。ナイスアイディア考える。

ゴ布林族は流浪の民で、旅をしながら生きている。冒険者であるアルデニクスも、

旅をしながら生きていた。その日暮らしのその又暮らし。中々良いアイディアは浮かばない。

それでもこれでもアルデニクス。伊達に世界を渡る冒険者じゃない。ゴ布林族の知識になくても、旅した土地の知識から、なんとかかんとかアイディア絞り出した。

「食べたい取りたい素敵な獲物 殺さず死なさず 捕らえるゴブ

食べたい取りたい素敵な植物 殺さず枯らさず 植えるでゴブ

そうすりやそのうち ドンドン増えて お腹もいっぱい食べれるゴブ

そうすりやそのうち いっぱい増えて 森の恵みもドンドン増えるゴブ」

こうしてアルデニクスの提案で、ゴ布林の間で原始的な農耕が始まり、野生動物の家畜化が始まった。産めよ増やせよ大地に満ちよ、我らに恵みを与え給え！ 原始的な狩猟生活からの脱却である。

*

*

静かな静かな森の中で、アルデニクスはひとり夜空を見上げていた。お空には大きな大きなお月様が “二つ” 。赤と緑の丸いお月様。見たこともないお月様。

「シュココオ……シュココオ……」

「どうやらこうやら　ここ　エオルゼアじゃないっぽいゴブ？」

かつてエオルゼアでも「二つの月」があつた時があつたけど、それはとてとて恐ろしい「過去」のもので、今じゃ一つだけのはず。今更ながらにそのことに気づいたアルデニクス。けれども「まあいいか」と、そんなにあんまし気にしない。細かいことは気にしない。

「異世界　異次元　異なるどころ　別世界　別次元　別なるどころ

とてとて滅多に行けないけど　行けないこともないらしい」

それなりに長いこと冒険者をしていれば、そんな話も聞くものさ。「闇の世界」に行つたとか、「異邦の誰かさん」がやって来たとか、無いこともない。

あるゴブリン神学者が泥酔した末に言い放つた言葉に拠れば、アルデニクスがいた世界は14番目に創造された世界らしい。それなら別世界の一つや二つ、珍しいことでもないだろう。

「それだけ「世界」があるのならば　他の世界に行くことあるさゴブ」

二つのまんまるお月様を眺めながら、アルデニクスはそう思った。

アルデニクス主導により始まった異世界ゴブリンの文明化は、驚くべき速度で急ピッチに進められている。

原始ゴブリンさながらだったゴブリンたちは、今では道具を持ち、家畜を飼育し、作

物を育て、料理を楽しんでいる。

より暮らしやすくするために、住処の「修繕」も始まった。より効率よくモノを育てるために、「用水路」も引かれ始めた。より多くを恵みを得るために、「創意工夫」もし始めた。

それでもまだまだ足りない。「理想郷」にはまだほど遠い。

ゴ布林族は「放浪の民」だ。だが、理由もなしにただ放浪しているというわけではない。彼らは求めているのだ。彼らが望む、彼らの「理想郷」の在り処を。

「シュココオ……シュココオ……」

きつとここが ゴブの「理想郷」だゴブ

ここを アルデニクスの「理想郷」にするんだゴブ

クイツクシンクスみたいに スローフィクスみたいに ここをオイラの「理想郷」にするんだゴブ!

そんな熱い想いを胸に秘め、アルデニクスはそう決意した。ゴ布林族の夜明けは近い!

名付けと芸術と爆発と魔法と、そしてゴブリン

アルデニクスの登場によって「命名」を知ったゴブリンたち。名付けに喜びを見いだしたのか、手当たりしだいに「名前」を付け始めた。世は正に「大名付け時代」である！

まずゴブリンたちは自分たちの住む「森」を、「ゴルダナル大森林」と名付けた。それ自体に意味などなかったが、そう名付けたことにより、「ゴルダナル」は「偉大なる」とか「大いなる」とか、そんな意味を持つようになった。こんなノリで、ゴブリン新語は作られていった。

ゴルダナル大森林の、北の東の遠くの方には、大きな大きなお山があつて、そのお山をゴブリンたちは、バカ正直に「ゴルダナル山脈」と名付けた。ゴルダナル大森林にあるお山だから、ゴルダナル山脈というわけだ。

大森林にはゴルダナル山脈を水源とする川が流れていて、ゴブリンたちはそれを「フィッシュチュックスリバー」と呼んでいた。最初は「ゴルダナルリバー」にしようと思っていたが、「フィッシュチュックス」がいつもいつも釣りをする「川」だから、そう呼ばれるようになったのである。

ワンパターンだった「名付け」にも、ヴァリエーションが生まれ始めた。創意工夫は文化ゴブリンの十八番なのだ。なんで18番というのかは、よく知らなかったが……。

フィッシュツクスリバーは、ゴ布林たちの住処から程なくしたところにあつて、彼らはそこから生活水を得ていた。やがて「わざわざ川まで行くのが面倒ゴブ！」ということになり、「用水路」が引かれることになる。出来上がった用水路は、その経緯もあつて「メンドウ用水路」と名付けられたが、その名とは裏腹に、多大な労力をかけて作られることになった。

「前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪

前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪」

今日も今日とて、奇妙な「唄」を歌いながら、ゴ布林たちは作業する。リズムもテンポもいまいちだったが、「歌詞」はアルデニクスが教えてくれたので、それなりの「仕事唄」になっていた。意味はあんまり分からないけど、まあいいじゃないか、いいじゃないか。ゴ布林たちはそこそこルーズなのだ。

「前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪

前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪

指数 崩壊！」

時にはちよつとヤバめな歌詞が飛び出すこともあったけど、まあええじゃないか、え

えじゃないか。ゴ布林たちはリズムに合わせ、ゴブゴブゴブゴブ体を動かす。みんな
でヨイショと力を合わせ、単調だけど、楽しい作業。「井戸」でいいじゃないかと気づい
たのは、「用水路」ができた後だった。

「クルクル回る「車輪」が回る　クルクル廻る「滑車」が廻る　クルクル周る「歯車」周
る

クルクル回して　荷物を運んで　荷物を乗せたら　荷物を降ろして　持って帰りや
あドッコイショー!

「車輪」や「歯車」「滑車」といったカラクリも開発され、ゴ布林たちの作業効率は格
段に改善された。荷車といった「キャリッジ」が発明されたのである。

荷を引いたのはゴ布林ではなく家畜たちで、家畜は「食料」としてだけでなく重要
な「労働力」にもなっていた。特に重宝されたのは、二本足の肉食トカゲ「ラプトル」で、
ゴ布林にとってこの動物は、乗ってよし引いて良しの素晴らしい家畜だった。

そんな風に色々あって、それなりの時間も掛かったけれど、「メンドウ用水路」は無事
出来上がった。

メンドウ用水路が完成したことによって、ゴ布林たちは「水の力」を利用するよう
になる。

「シュココオ……シュココオ……」

水の力 スゴいゴブ とてとてとーってもスゴいゴブ

重いモノ たくさんのモノ いっぱいのモノ 運ぶ動かす 便利ゴブ

アツアツ冷やすの便利ゴブ 家畜飼うの便利ゴブ 作物育てるの便利ゴブ 水はい

ろんなコトに使えるゴブ！」

そんなわけで、用水路が出来たことにより、「船」や「水車」なども作られた。物資の運搬は言うに及ばず、家畜や作物の世話も格段に効率よくなった。特に喜んだのがフィッシュチックスで、彼は釣ったサカナをこつそり用水路で飼うようになって、こつそりまた釣るようになった。ゴ布林による「養殖」の始まりである。

ゴ布林たちの活動範囲が広がるにつれ、「道」というモノも生まれ始めた。アソコやココやソツチやアツチ。トテトテ安全にするために、とてとてキレイに整備され、同時に「名前」も付けられた。「アンテロープロード」「バードロード」「リバーロード」「フレッシュロード」「ハニーロード」「ラプトルロード」「マウンテンロード」などなど……その道に因んだ名称で、自然とそう呼ばれるようになったのだ。

けれどもそれでも手当たりしだい、「名」を名付けたことにより、新たな問題も生じることになる。

「うーん うーん どうしよう どうしようか 困ったゴブ」

困った様子のゴ布林族が、困った様子で困っていた！ これは大変、あれま大変！

「なんだ どうした ナニゴトか？ 言ってみるみる 話してみるみる」

「それが これが 困ったのだ アルデニクス

やたたと やららと 名前を付けて 名付けてみたはイイけれど

あまりもあまりも多すぎて たくさん過ぎて覚えきれぬ 「名」が多すぎて覚えきれぬ」

ただでさえ、仲間の名前を覚えるので精一杯だというのに……そう困ったゴブリン訴える。

「それは困った くまった 大変だ

それなら これなら こうすると良い

オマエが「名」を書き留めて 残しておくの良いんだゴブ 「文字」で残して取っとく

ゴブ！」

困っていたゴブリン族、言われて飛び出て再び問いかける。

「「文字」って “アレ” か？

アルデニクス トキトキ書いている のたくったミミズのような “アレ” か？」

「シユコオ……シユコオ……

そうゴブ そうゴブ そうだゴブ のたくったミミズのような “アレ” だゴブ」

アルデニクスは「文字」のスゴさについて、さらに語ってみせる。

「文字」は とてとて便利ゴブ

誰かに伝える 誰かに教える 誰かに残す 誰かに記す

文字なら わざわざ “ソコ” に居なくても 伝えることができるゴブ 教えることができるゴブ

過去を記し 今を伝え 未来を描く！ 「文字」はとてとて便利ゴブ！

「おお！ そうなのか そうなのか！ ならオレは「文字」を使おう

文字を使って「名前」を残そう 文字を使って「過去」を記そう 文字を使って「今」を伝えよう！

こうして「文字」によって「名前」を残し、「過去」を記し、「今」を伝えるようになったゴ布林族は、名を「ヒストリクス」と改め、「ヒストリー」を綴るようになる。ゴ布林族に「歴史」が始まった瞬間であった。

ゴ布林たちはこのように、「役割」や「仕事」や「見た目」などが変わると、自らの名も改名するようになっていった。

新たな仕事唄を生み出すのに熱心な「シングソングス」。仕事唄に合わせ踊ることで快樂を感じる「ステツブドクス」。ステツブドクスのダンス合わせて、手当たりしだい音を撒き散らす「ドンジャラニクス」。アルデニクスが書く「図面」を真似て、いたる所に“絵”を描くようになった「アートシリクス」。

ゴブリン生活が安定の兆しを見せてくると、こんな不思議な行為に熱中するゴブリンも現れ初めた。いわゆる「芸術」や「美術」が花開いたのだ。

「シユココオ……シユココオ……」

イイぞ イイぞ その調子だゴブ！

みんなみんな 自分の好きなコトするゴブ！ 自分の好きなモノ創るゴブ！

歌って 踊って 鳴らして 弾いて 描いて 刻んで 彫って 写して

最初はそれなりダメダメでも そのうちこのうちイイことあるさ！ それなりことあるさゴブ！

アルデニクスはこういったゴブリン創作活動を、熱心の後押しした。「芸術」とは「文化」を促進するものであるし、「技術革新」はイマジネーションから爆誕するモノだからである！ つまりは「芸術」は「爆発」ということ！ アルデニクスは「爆発」が大好きで大得意だった。大芸術時代の爆開けである！

「芸術 美術 爆発だゴブ！ 美術 芸術 爆弾だゴブ！

一発ドカーンと打ち上げりゃ 何かが起きるさゴブリ爆弾！」

そんなわけでゴブリンたちは「爆発」というものに熱中した。「爆発」と「カラクリ」はゴ布林族の華なのである。

主に使用された「爆発」は、アルデニクス特製の「ゴブリ爆弾」で、これはゴ布林

秘伝の「ゴブリ火薬」を原料とした、とてとて特殊な「爆弾」だった。爆発力に優れ、誤爆性が極めて低い「ゴブリ火薬」は、ゴ布林たちの芸術のみならず、文明発展に爆発的に貢献した。爆発だけに。

「芸術」や「美術」といったものが、爆発のごとく発展し始めたゴ布林たちだが、当然、その飽くなき探究心は「内」ではなく「外」にも向けられるようになる。あの木の向こうを目指し、あの川の先を目指し、あの谷の底を目指し、あの山までを目指し、あそこや、こつちや、そつちや、あつちまで！ 生まれ持った探究心をフルスロットルにして、ゴ布林たちは思うがまま大地を駆けた。

そうして広がっていったゴ布林たちの版図は、とどまることを知らず、もはや一ゴ布林には把握しきれないほどに拡大していった。つまり何が起こったかというところ、「迷子」が続出したのである。

「困った くまった 大変だ！

狩りに行った連中が 三回寝ても戻って来ない！ 四回寝てようやく戻って来た！

こんなのもうコリゴリコリゴブ どうしたらいいアルデニクス？」

のちに「マツピングクス」と名乗ることになるゴ布林が、アルデニクスにくまった様子で訊いた。

「それなら これなら 「地図」作るゴブ

色々なモノ色々なトコ 書き記した「地図」作るゴブ

そうすりやみんな きちんときつちり 戻って来れる 帰って来れる

見たことない「モノ」も知れるゴブ 行ったことない「トコ」も知れるゴブ

みんなで一緒に「地図」作るゴブ!

斯くしてゴ布林たちによる、「ゴルダナル地図」の作成が始まったのである。

アルデニクスが作った皮紙の上に、アートシリクスが「絵」を描き、ヒストリクスが文字を刻む。あそこには「アレ」がある。あつちには「アレ」があつた。そつちにはこんな「モノ」があつた。それをマツピンギクスが最後にまとめ、「点」を加え「線」を引き「名」を書き足していく。

独特な吹き抜け音がある「ゴオーン洞穴」、たくさんの水が貯まる「リムローレン湖」、家畜たちの庭「ミートイートミート」、ゴ布林たちの農園「ボタルノスク農園」、「ゴルダナル採掘場」「スミシンロクス溶鉱炉」「グロレンツ工房」「サバルカス伐採地」「ハニービー養蜂場」「ドロドク青燐泉」「ラプトルの安息所」——そして最後に刻まれたのは、ゴ布林たちが住む「オンボロ遺跡」の「名」だった。

「シユココオ……シユココオ……」

ここは 我らの小さなお城 ここはゴブラの小さなお家

作って 直して 組み立てて みんなで創る理想の地 ここをゴ布林の「理想郷」

とする。

その名もこの名も「リトルシャイア」先人に倣つて「リトルシャイア！」
斯くして「リトルシャイア」と名付けられたオンボロ遺跡は、今日も今日とて発展し
ていく……。

*

*

驚異的とも言えるリトルシャイアの発展を支えたのは、異邦ゴ布林「アルデニクス」
の叡智だけではなかつた。もう一つ重大な「要因」があつたのだ。言うまでもなく「魔
法」のことである。

ゴ布林たちが使う「魔法」は、神様の「奇跡」ではない「原始魔法」。威力も範囲も
それなりで、とてもじゃないが戦いには適さなかつたが、生活を便利にするには劇的な
効果があつた。ごく初期のゴ布林文明は、この「原始魔法」が支えたのである。

火を灯す、水を清める、土を豊かにする、風を吹かせる、たつたこれだけのことで、
原始ゴ布林にとつては多大なる労力だつた。それを一挙に解決したのが「原始魔法」
というわけである。

「昔々のそのまた昔」とてとて賢い学者が言つたゴブ

雷落ちて火になった　火は燃えて土になった　土は遮り氷になった

氷は溶けて水になった　水は昇って風になった　風は曇って雷になった

生命は巡りて元素は廻る　これぞ「六大元素」なり！」

アルデニクスが語った「六属創生論」は、自然界における「六大元素」の成立過程や相関関係を、端的に述べたものだ。当然、ゴブリンたちには高度すぎて理解不能だったが、理解できなくても使用できるのが「原始魔法」のイイところ。別世界でも使えちゃうのもイイところ。伊達に原始の名が付いてるわけじゃない！

「原始魔法」とは、もともと獣や魔物が狩りや身を守るために本能的に使用していた、超常現象の総称であり、まだ知性が低い原始ゴブリンでも、なんとか使えるものだった。それなりの素養と、それなりの修練さえすれば、ほとんどのゴブリンが使用できたのである。全てはアルデニクスの指導の賜物であった。

火の原始魔法はマッチ程度の火力しかなかったが、種火にするには十分だったし、水の原始魔法はジョウロ程度の水量だったが、水やりには十分だったし、氷の原始魔法は石ころ程度の氷を生み出す程度だったが、モノを冷やすには十分だったし、風の原始魔法はそよ風を吹かせる程度だったが、換気するには十分だったし、土の魔法はバケツ一杯分の土を操る程度だったが、上手くやれば様々な形にすることができた。

そしてなにより重要だったのは、ゴブリンたちが「雷」を操れるようになったことだっ

た。雷の原始魔法は、しよせん乾電池程度のシヨボイものだったが、それだけで何もかも十分だった！ 十分すぎるほどに十分だった！

「カミナリ 電気 電子のちからく イカツチ 磁気 磁力のちからく イナヅマ ビリビリ 電磁のちからく」

電気は色んなモノ動かせる 磁力は色んなモノ動かせる

ビリビリ バリバリ 稼働させる 起動律動天動させる

雷の力 最初の力 火を生み 土を生み 氷を生む

雷の魔法 最初の魔法 水を生み 風を生み また雷を生む！ 全ての起源だ電磁

力！」

電力というエネルギーを得たゴ布林たちは、「六属創生論」に則り様々なモノに雷を変換させた。火や水や風は言うに及ばず、熱に光に音に運動に。そうゴ布林たちは電気エネルギーを運動エネルギーや熱エネルギーに変換する術を知ったのだ。

「シユココオ……シユココオ……」

我らに出来ぬ お仕事は 電気にさせるとイイんだゴブ

ゴブらに運べぬ お荷物は カレらにさせるとイイんだゴブ

色々できて 力強い いっぱいできて 心強い そんなカラクリ 便利な機工

その名もこの名も「機械」だゴブ」

ゴブリンたちはアルデニクスの演説に歓声をあげた。おおスゲーな「電気」って！めつちやスゲーな「機械」って！ そうなりや作ろう便利な「カラクリ」 創ってみせよう利便な「機工」！

とはいえ最初は極簡単な機械しか、ゴブリンたちは作れなかった。アルデニクスには知識と知恵があり、ゴブリンたちには知性があったが、圧倒的に「技術」と「経験」が足らなかったのだ。「原始魔法」の応用にも限界があった。どんなに利便性が高くても、しよせん「奇跡」でない「現象」など、神様の力には及ばないということだ。

だが、やがてゴブリンたちの文化が発展し、芸術や美術が花開いて技術と経験を身につけると、話は変わってくる。身につけた「技術」で「魔法」を再現し、より強く大きくし始めたのだ。

マツチの火は鉄をも熔かす炎となり、ジヨウロの水は太湖のごとき膨水となり、小さな氷は巨大な氷塊となり、そよ風は突風となり、操る土は山となり、乾電池は発電所になった。

魔法でダメなら技術で、技術でダメなら魔法で、どっちもダメなら二つを合わせて、ゴブリンたちがゴブリンたちの問題を解決していく。より楽に、より便利に、より楽しく、より面白く……飽くなき探究心は留まることを知らず、発展もまた止まることを知らなかった。

全てはアルデニクスの理想の為に。全てはリトルシヤイアの発展の為に。全てはゴブリンの繁栄の為に。全ては理想郷実現の為に！

禁忌も禁断もなんのその、ゴ布林たちの探究は、今日明日も終わらない。

*

*

辺境の街のさらに辺境の辺境にある「へんぴな農村」は、このところ平和な日々をすごしていた。驚くべきことに、ここ数年ゴブリンの襲撃が全くなかったのだ！

こんなことは、老人村長が子供村人だった時からありはしなかった。「冒険者」という職業が人気となり、若い連中がみんな村を出ていつてしまった、過疎化が激しい「へんぴな農村」にとって、これは吉報以外の何物でもなかった。

しかし、幸せの日々とは長くは続かないものである。へんぴな農村ではゴ布林に代わって新たな問題が浮上してきていたのだ。

昼夜を問わず鳴り響く爆発音や炸裂音、モクモクと立ち昇る煙、ゴンゴンガンガン叩く音、木々がなぎ倒される騒音、グオオオオオンつといった何らかの作業音……そして時折姿を見かけるようになった、奇っ怪な姿をした「小人」。

「小人」——そう形容する他ない奇妙なイキモノだった。「レーア」や「ドワーフ」など

ではない。気味の悪いマスクを被り、全身を防護服で身を包んだ、見たこともない生物だった。『カレら』があの騒がしい音の原因であることに、疑いの余地はない。

正体不明な『ナニか』の出現に、農村は困惑する。血気盛んな農夫は「あんな連中オレたちで追っ払っちまおう！」と主張した。幾人かの農夫もそれに追従する。彼らの意見には一理あつたが、『アレ』がなんなのか分からぬ以上、下手に刺激するのも憚られた。

農村には腕に覚えのある者が少なかったし、なにより『アレ』は奇妙で不気味で気色悪かつたが、農村に直接危害を加えたことはなかったのだ。ただ時折じつとこちらを見ているだけ……まるでこちらを「観察」しているかのように。

村人だけで解決できないとくれば、残る手段は一つしかない。夢と理想と野心に塗れた無法者——「冒険者」——に、調査を依頼するしかない。森から響くあの「騒がしい音」はなんなのか、森に棲み着いた『アレ』はなんなのか、老人村長は村人を代表して「冒険者ギルド」へと赴いた。

「——そんなわけで、冒険者さんに調査を依頼したいんじゃないが……」

「ハイ、近隣の森への調査依頼ですね。報酬はいかほどでしょうか？」

鋼鉄とも言える営業スマイルを浮かべ、淡々と受付嬢は言った。

老人村長は、村中からかき集めたなげなしの硬貨を、冒険者ギルドの受付嬢に差し出

す。

「2の4の8の10の……ハイ、調査依頼としては問題ありません。むしろ多いくらいですね」

「最近、ゴブリンの襲撃が無くてのう。おかげで多少の蓄えはあるのじゃ」

「それはそれは、喜ばしいことじゃないですか。となると、ゴ布林関係の依頼ではないのですね」

完全仕事モードだった受付嬢が、僅かに興味を抱いた様子を見せる。チラリと目配せし、老人村長を見た。

「ウチの村では、この何年かゴ布林はチラリとも見ておらん」

それは珍しいこともあるものだ、と、受付嬢は内心思った。

提出された書類を覗き見る。書いてある依頼内容は、ゴ布林ではなく「騒音」と「小人」の調査依頼だった。確かに、よくあるゴ布林退治の依頼ではない。

ゴ布林は最下級の怪物で、子供程度の知力と腕力しかないが、そのぶん数が多く、大抵の農村では常にゴ布林被害に悩まされていた。数週間や数ヶ月なら有り得ないこともないが、年単位で被害が無いことは、全くと言っていいほど例が無い。

もしかすると、「彼」が頑張っているおかげかしら——そんなことを受付嬢は考えた。自然と頬が緩み、僅かに赤く染まる。「彼」のことを思うと何時もこうだ。ゴ布林ばか

りを狙う、あの「冒険者」のことを……。

「……つと、失礼しました。書類の方も不備はないようですね。近日中には必ず冒険者さんが調査に向かいますので、暫くお待ち下さい」

受付嬢は「必ず」の部分強調して、そう言った。これは依頼主に安心感を与えるための手段だ。受付嬢の間では、そう言つて話を締めくくることが常套句だった。

不安そうな面持ちで冒険者ギルドを出る老人村長を見送ると、受付嬢はもう一度手元の依頼書を見た。

近隣の森への調査依頼。それ自体はよくある依頼であつたが、その内容に「騒音」と「小人」とあつたのが気になつた。レーアやドワーフの類ではないらしい。新種の怪物か、或いは全く別の「ナニか」か……。

受付嬢目線で見ても、コレはあまり魅力的な依頼だとは言えなかつた。「ドラゴン退治」といつた冒険心をくすぐるような内容じゃなければ、「遺跡探索」のような一攫千金が望める依頼でもない。報酬は確かに割高だが、現地への移動距離を考えると、それも相殺される。

辺境の街のさらに辺境の辺境にあるへんぴな農村は、その名のとおり恐ろしく遠いのだ。おそらく引き受けるのは、報酬や冒険よりも「信頼」が欲しい、駆け出しの冒険者になるだろう。

「はあー」

受付嬢はそうため息をつくど、カウンターに頭を伏した。

そんな実利をきちんと考えられる「駆け出し冒険者」が、この街にいるだろうか？

受付嬢の経験からすれば、それはあまり多いとは言えなかった。むしろ皆無と言っている。採算度外視で受けてくれる冒険者もいるにはいるが、「彼」はゴ布林以外には興味がないし、ゴ布林じゃないなら見向きもしてくれないだろう。

「信頼」を得るための依頼なら、他に適したものはいくらでもある。ならばこの依頼を受けるのは、暇を持て余した道楽者か、超弩級の愚か者以外にない。そんな冒険者が赴くであろう老人村長のことを思うと、受付嬢は不憫でならなかった。

「どうして、ゴ布林じゃないんだろう……」

不謹慎にもそう呟いてしまうほど、受付嬢は気落ちしていた。幸いにも切羽詰まった状況じゃなさそうなのが、唯一の救いか。それでも、依頼達成には暫く時間が掛かるだろう。相当「暫くの」時間が……。

結局、張り出された老人村長の依頼は、受付嬢が思っていたとおり徐々に掲示板の隅に追いやられ、長い間引き受ける者は現れなかった。

その間にも、着実にゴ布林たちが発展しているのを、誰も知らぬまま……。

ファースト・ゴブリン・コンタクト 1 / 2

「それじゃあ……調査対象について、詳しく教えて貰えるかしら？」

肩まで伸びた赤い髪、すらりとしたなやかな肢体、ドカッと椅子に座り、目を細めニヤリと口を歪ませながら、懽然とした態度で女剣士は言った。

それは冒険者らしい、自信に満ち溢れた物言いだった。ともすれば、自惚れとも取られかねない態度。しかし、これは自惚れなどではなかった。それは、彼女が持つ「青玉」の認識票が物語っている。

「女剣士ちゃん……そういう言い方は、慎まない……」

そんな女剣士のことを、後方に控えていた女治癒士がやんわりと嗜める。

女治癒士は女剣士と違い、その場に立って、身の丈に迫るほどの木杖を持っていた。白を基調としたローブを着て、髪はブロンド、瞳は青の、典型的な治癒術者だった。

「はっ、別にいいじゃない！ わざわざ「青玉級」である「この私」が、遠路はるばるこんな辺境も辺境のへんぴな寒村に出向いてやってるのよ？ 感謝されることとはあれど、咎められる云われはないわ。むしろなぜ村を挙げて歓迎しないのか、不思議なくらいね」

永らくやり手のいなかった「へんぴな農村の調査依頼」は、巡り巡ってこんな彼女たちが請け負うことになっていった。冒険者になって以来、破竹の勢いで「青玉級」になった女剣士と、彼女と一党を組む「鋼鉄級」の女治癒士。彼女たちがこの依頼を受けたのは、なんてことない、ただの「点数稼ぎ」のためだった。

冒険者には全部で十段階の等級があり、上から「白金」「金」「銀」「銅」「紅玉」「翠玉」「青玉」「鋼鉄」「黒曜」「白磁」がある。全ての冒険者は「白磁」から始まり、数々の冒険や依頼をこなすことで信頼と実績を得て、さらなる等級へと昇進するのだ。

より上の等級に昇進するには「冒険者ギルド」の承認が必要であり、それを通過するためには「経験点」と呼ばれるものを稼がなければならぬ。

経験点は「社会への貢献度」「獲得した報酬総額」「面談による人格査定」によって決まり、今回彼女たちは、その「経験点」稼ぎのためにこの任務を請け負ったというわけだ。誰もやり手のいない「余り物」は、実入りは少ないにしろ、経験点は高くなる傾向にある。

女剣士の等級は「青玉」。冒険者になってまだ数ヶ月程度の「新米」にしては、恐るべき昇進速度だが、彼女はこれっぽっちも満足していなかった。

私はいずれ「英雄」になって、史上十人といない「白金級」になるのよ！ 女剣士はそう考えるに足る実績を残していたし、そう信じるに足る実力も兼ね揃えていた。

「それでも依頼はちゃんと真摯にやらないと……」

「ええ、だからこうして私自ら話を聞こうって言ってるんじゃない。それともなに？」

この私に「頭を垂れてお願いしろ」とでも言いたいのかしら？　貴方は」

「そ、そんなわけじゃないけど……あの……その……」

それ以上は言葉が出ず、言い淀んでしまう女治癒士。彼女たちの会話は、いつもこんな調子だった。

「はあ……貴方っていつもそうよね。私の後ろをうるちよろして、オドオドウジウジ。なのに、こういう時だけはいつちよ前に口出ししてきて。アンタなんて、私がいなければ何も出来ない癖にッ！」

「ひうッ！」

女剣士の劍幕に、涙目でビクつく女治癒士。

女治癒士と女剣士は、同時期に冒険者になった言わば「同期」というもので、それ故に「駆け出し」の頃は、よく「即席パーティー」を組むことが多かった。

前衛タイプの女剣士と後衛タイプの女治癒士では、戦術的な相性が良いこともあり、やがて彼女たちは自然と「固定パーティー」を組むことになる。引つ込み思案だけど慎重派な女治癒士と、向こう見ずだけど積極的な女剣士では、性格的にも相性が良かったと言えるだろう。

だがそれも、お互いが「対等」であった場合の話だ。

数か月とは言え、長くパーティーを組んでいると、嫌でも色々目についてくる。些細なことで口論になり、次第に溝は深まって……両者の実力が拮抗していれば、危ういながらもバランスが取れていたかも知れないが、彼女たちの場合、僅かだが女剣士の方が上回っていた。

その僅かな違いは、徐々にだが確実な「差」となり、現実的な「評価」としても浮き彫りになっていく。「青玉」と「鋼鉄」——この僅かだが明確な「差」は、彼女たちの関係性を崩壊させるのに十分だった。

女剣士が「青玉級」になり、女治癒士が「青玉級」になれなかったその日から、彼女はまるで「主」のように振る舞うようになり、彼女はまるで「奴隷」のように扱われるようになったのだ。

女剣士は俯く女治癒士を睨みつけると、プイッと向き直り老人村長に言った。

「もう、こんなヤツ放つといて、話を進めましょう？ イヤだと言うなら私はもう帰るわ」

そう言われてしまっっては、老人村長も何も言えない。老人村長は、いまだ俯いたままの女治癒士のことを一瞥し、ややあつてから話を始めた。

「依頼書にも書いたと思うが、ワシらの依頼は「近隣の森」の調査依頼じゃ。ここ数年ゴ

プリンどもに代わり、森に「奇妙な生物」が棲み着いたらしく、そいつらが森で何をやっているのか、調査して欲しいのじゃ」

「ふうん、「奇妙な生物」ね……ソイツらは、どんな見た目なのかしら？」

「それに関しては、〃コレ〃を見て欲しい」

あらかじめ用意してあったのだろう。老人村長は待つてましたとばかりにそう言うのと、女剣士に一枚の羊皮紙を手渡した。

そこには、気味の悪いマスクを被り、全身に防護服を着て、大きな荷物を背負った謎の生物のスケッチが描かれていた。身長は只人の子供くらいだろうか？ 見方に拠れば、ドワーフやレーアにも見えなくもないが、こんな不気味な衣装を着る風習は、彼らにはない。

「コレが、その「奇妙な生物」ということ？」

「そうじゃ」

老人村長が短く肯定する。

「見たところ、あまり危険はなさそうですが……」

俯いていた女治癒士も、羊皮紙を覗き込みそう感想を述べた。

「そう、そうなのじゃ。ヤツらは奇妙な見た目をして不気味じゃが、幸いというかなんというか、今のところ具体的な実害は出ていない。じゃが……」

「不気味なことには変わりないし、気味が悪いことには変わりないということね。まあ、よくある話だわ」

「それに「騒音」の件も、ということですよね？」

「うむ、ヤツらを見かけるようになってから暫くして、森の方で色々な騒音が響くようになってのう。最初は木々を伐採するような音だけだったのじゃが、次第に爆発音や、ワシらが聞いたこともない轟音も鳴るようになり、それが昼夜を問わず続くもんだから、みな不安が募るばかりだったのじゃ……」

なるほど、と女剣士が興味深げに笑みを浮かべ、女治癒士は心配そうな顔色を浮かべた。

老人村長は一呼吸置くと、そこから「じゃが——」と話を続ける。

「このところ、そんな「騒音」も鳴りを潜めがちでな。鳴ったとしても大分音量が抑えれておるし、日が落ちてからは、滅多に鳴らなくなったのじゃ。今では定期的に鳴る「騒音」に合わせて、ワシらも生活をする始末でのう」

ちようどその時、遠くの方から「ドーン」という爆発音が三回轟いた。「これはタイミングの良いこともあるもんじゃ」と眩きながら、老人村長は冒険者たちに目配せする。「今のは「昼食の爆発音」じゃ。まあ、ワシらがそう勝手に呼んでるだけじゃが、いつの頃からか正午になると、必ずこの爆発音が鳴るようになってのう……そんなわけじゃか

ら、話の続きは昼食をすませてからにしようか」

そうやって老人村長は振り返ると「ばあさんや、そろそろ昼飯にしようや！」と叫んだ。「はいはい」という声が、家の奥の方から返ってくる。

異常も慣れれば日常になる、ということなのだろう。異常が日常と化してしまった「へんぴな農村」の村人たちは、異常を異常のまま受け入れるようになったのだ。森の様子は確かに異常だが、問題がなければ問題はないのだろう。

そんな様子を見せる老人村長に、呆気を取られる冒険者たち。

「……なんか、思っていたのと違うわね」

思わず女剣士は、そう女治癒士に耳打ちしてしまった。正直言って拍子抜けである。

運が良ければ、知性に目覚めた怪物なんか、コソコソと良からぬことを企んでいて、それを未然に防いだ「英雄」になれるかと思っていたが、この様子じゃそんなこともなさそうだ。

この「調査依頼」は、額面通りの見返りしかなさそうだし、額面通りの結果しか生み出さないだろう。女剣士からは、気落ちした様子がアリアリと見て取れた。

「いずれにせよ、何事もなさそうで良かったですね」

心底安心した様子で言う女治癒士。

「どこがよ。この分じゃ、碌な「経験点」は稼げないわ。無駄足だったかもね」

どうせならゴ布林にでも襲われてればよかったのに——女剣士がそう呟いたのを、女治癒士は聞き逃さなかった。それにほんの少しだけ、ほんの少しだけだけど、女治癒士も同意してしまったのは、仕方のないことだったのだろう。

他人の不幸は蜜の味とも言うが、冒険者にとって「他人の不幸」とは仕事の種だ。平穩で平和そうな村の依頼主より、切羽詰まった村の依頼主の方が、「美味しい」のは間違いない。

女治癒士にとつても、一刻も早く「経験点」を稼いで、彼女と「対等」になる必要があった。だから、ちよつとでもそう思ってしまったのは、致し方なかったのだ。

ゴ布林だったら良かったのに……そう思ってしまったのが、彼女たちの運命の分水嶺だったのかもしれない。

*

*

「後はもうアンタに任せるわ」

昼食をすませ、老人村長家の客室に案内された女剣士は、装備も外さず用意されていたベッドにボフッと寝そべると、そう吐き捨てるように言い放った。

「……………えっ?」

「えっ？　じゃないわよ、えっ、じゃ。この程度の「調査」だったら、アンタ一人でも十分でしょう？　それにしても、ああもうこのベッド！　カビ臭い上にクツションも固くて、最悪なんだけど！　しかも部屋に一つしかないし。アンタは今日、床で寝てよね！」
へんぴな農村には、そりやもうへんぴなどこにあるので、当然ながら旅人用の宿舎などはない。なので、女剣士たちは老人村長家に泊まることになっており、食事に関しても村長家の厄介になっていた。もちろん費用は全額老人村長もちである。

「で、でも私一人じゃ……」

寝転がって装備を外し始めた女剣士に向かつて、女治癒士がおずおずと言う。

「でもって……アンタ、腐っても「鋼鉄級」でしょう？　たとえ私の腰巾着だとしても、等級に見合った働きくらいしなさいよ。こんな依頼、アンタ程度でも屁でもないでしょうが」

たまには「一人」で何かを成し遂げてみなさいよ——視線を合わさず、女剣士はそう最後に付け足した。「一人」という部分を強調して。

もしかするとこれは、女剣士なりの優しさだったかのもしれない。要するに女剣士は、言外に「今回はアンタに譲る」と言いたかったのだ。

一党を組むのは一定のメリットがあるものの、報酬や経験点が分散されるという意味では、デメリットでもある。その分、高難度の依頼を受けていけばいいだけの話だが、今

回の場合はそれは当てはまらない。

二人で分け合うには割に合わない仕事かもしれないが、単独なら少しはマシになるだろう。彼女と彼女の「差」は、それだけでは埋められないだろうが、これを期に自信も身に着けてくれば、遅かれ早かれ女治癒士も「青玉級」になれるはずだ。

そうすれば、二人はかつての「関係」に戻れるかも……そういった思惑が、女剣士にはあつたのかもしれない。

装備を全て外し終えた女剣士はそのまま寝転がると、女治癒士に背を向けるようにして横になった。彼女の背中から何を感じ取ったのか、木杖をギュツと握りしめ、意を決した瞳を宿し、女治癒士は言った。

「わ、わかった、よ……私一人で行ってくるから……」

女剣士は何も言わず、背を向けたまま手を振った。さつさと行ってこい、ということだろう。

「それじゃあ、行ってくるね」

女剣士からの返答は、終ぞなかった。

*

*

ゴブリン族の少女「ランドロクス」は、今日もとてとお気に入りのお花畑で、お花の世話をしていた。

「チコオ……チコオ……」

大きなあれ　大きなあれ

キレイに　立派に　大きなあれ〜」

このお花畑は、ランドロクスの秘密のお花畑だ。森の中でも特に日当たりがよく、様々なお花が咲き乱れるこの花園は、彼女の宝物でもあった。

今日も彼女はゴブゴブ言いながら、自前の「水魔法」を駆使してお花に水をあげる。

お散歩中にたまたま見つけたこの花園は、最初は残念な感じだったけれど、ランドロクスの手入れもあって、今じゃ結構ステキなお花畑になっていた。これなら、かの有名なボタルノスク農園にも、引けを取らないだろう。

ランドロクスはお水をやり終えると、日向ぼっこを始めた。これは彼女の大切な日課だった。

ポカポカ陽気の下にいますと、昨日あったイヤなことがどうでも良くなってくる。別に昨日も一昨日もそのまた前の日も、イヤなことは無かったけど、無いなら無いで幸せな気分になれるので、ランドロクスはいつもそうしていた。

「チコオ……チコオ……」

パピイとマミイ「それじゃあツリードナロクスみたいになっちゃうゴブ」って言うけれど

わたちはそれでも イイんだゴブ、 わたちはそれでも構わないんだゴブ、

木陰が好きなことで有名なツリードナロクスは、事あるごとに木陰で休むぐうたらゴブリンだったが、それ故に効率的な仕事法を考案していたりして、ランドロクスの憧れでもあった。あんな風にいつものほほんと生きていきたいと、ランドロクスは思うのであった。

お花畑では小鳥がピーチク、蜜蜂がブンブン、兎がピョンピョン、ゴブリンがゴブゴブ、全くもって平和な感じ。そんな「ランドロクスのお花畑」に、招かれざる侵入者がやって来る！ それはまさかまさかの「女治癒士」だった！

「うう、どうしよう……迷っちゃったよお……どこどこお？」

半泣き状態でお花畑に侵入してきた女治癒士が、そんなことを呟いた。緊張感の欠片も無いヘタレな発言だったが、誰も聞いちやいないので何も問題はない。

森の中へと調査に来ていた女治癒士は、生来のドジっ子属性を發揮したのか、ガッツリ道に迷っていた。

生い茂る原生林は進むほど奥深くなり、女治癒士の方角感覚を狂わせ、時間感覚も奪っていた。女治癒士の拙い搜索スキルでは、遭難するのは当然の帰結だったのだ。な

んでそんなレベルなのに「単独」で探索に出たのか……なんやかんや言つて彼女も「冒険者」だったということなのだろう。

そんな最中で訪れたランドロクスのお花畑。女治癒士の瞳には、より一層キレイに映つただろう。

「うわあ、なんてステキなお花畑！ 森にこんな場所があつただなんて……あつ」

「一体全体 だれゴブか？ わたちのお花畑にやつて来たの……あつ」

彼女と彼女の眼と眼が合う。方や見たこともないマスクをした謎の生物。方や見たこともない服装をした謎の人物。まさかまさかの偶発的遭遇！

女治癒士は「彼女」を指差し、そして叫んだ。

「ああああああああああああああああ！」

「ゴブウウウウウウウウウウウウ！」

女治癒士の叫び声に、ランドロクスはビックリ仰天して飛び上がった。そのまま猛ダツシユで木陰にとんずらすると、ひよこつと顔を覗かせる。

「チコオ……チコオ……」

だれだれ あなた だれなのゴブ？ あなあな あなた だれなのゴブ？

わたちは わたちは ランドロクス 一体 あなたは 何者ゴブ？」

「えっ？ ウソ、喋つた!? え、あつ……わ、私は女治癒士です！ えつと、あつと、そ

の……すみません、ちよつと道に迷ってしまつて……」

謎生物と偶発的遭遇をしたのに、咄嗟にそう言つてみせたあたり、女治癒士もなんだかんだで結構したたかである。

「女治癒士？ とてとて変わった名前ゴブ 道に迷つた？ それはとてとて可愛そう

森はとてとて入り組んで 「地図」 がないと迷っちゃう

女治癒士さん 「地図」 持つてないゴブ？」

「えつと、あの、その……老人村長さんから譲り受けた「地図」はあるのですが……あまり、正確でなかつたようで……」

そう言つて女治癒士は、持つていた「地図」を取り出して広げてみせた。

木陰に隠れていたランドロクスは、トテチテ慎重に女治癒士に近づいて、その「地図」を見てみる。ランドロクスが持つ「ゴルダナル地図」とは違い、ほとんど点も線も名前も記載されていない、どうしようもない「地図」だった。

「チコオ……チコオ……」

あらあら まあまあ この地図さん とてとて大事なモノ 書かれていない
リトルシャイアに ボタルノスク農園 とてとて大事なトコ 描かれていない

老人村長さん とてとて 酷いヒト……ヒト？ あつ ゴブウウウツツ!!」

突然奇声をあげたランドロクス。女治癒士から猛ダツシユで飛び退いて、再び木陰に

チコオつと隠れた。何が起こったのか良く分からない女治療士。えっ？ なになに、どういうことなの？

「あ、あの……だ、大丈夫ですか？ えっと……ランドロクスさん？」

女治療士の言葉に、ランドロクスはまたもひよこつと顔を覗かせて、女治療士に問いかけた。

「チコオ……チコオ……」

あなた もしかして ひよつとして 「ニンゲン」 ゴブ？

女治療士さん あなたって 「ニンゲン」 ゴブ？」

ランドロクスの質問に、キョトンとして女治療士は答えた。

「え、ええ……そうですけど、何か……」

「ヒ、ヒエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

女治療士の言葉に、ランドロクスはあまりにもビックリして腰を抜かしてしまった。

「や やつぱり ニンゲンだったゴブウウウウ！」

やめて こないで ゆるしてゴブウウ！

ゆるして こないで あっちにいつてゴブウウ！

わたちは悪いゴ布林じゃないゴブ とてとて良い子なランドロクスゴブ！

オシオキはイヤイヤー！」

「あ、あの！ 落ち着いてください！ 別に何もしませんから！ それに、さつきあなたゴブリンって!？」

半狂乱に陥っていたランドロクスを、なだめようと近づく女治癒士。ランドロクスは腰を抜かしてしまい、逃げ出すことができない。絶体絶命のピンチが、ランドロクスを襲おうとしていた！

「えつと……その……お、落ち着いてください。私は悪い人間じゃありません」

とりあえず女治癒士は、ランドロクスに倣ってそう言ってみた。効果があつたかどうかは分からないが、ランドロクスが怯えながらも訊いてくる。

「チ、チココオ……チココオ……」

ほ 本当ゴブか？ほんとに悪い人間じゃないゴブか？

ランドロクスのマスクを取って 食べちゃったりしないゴブか？

「そ、そんなことしませんよ！ どんな怪物ですか私!? それよりも、さつき言つてた「ゴブリン」って、どういうことですか?」

「?? どういうもなにも そのままの意味よゴブ」

わたたちは 栄えあるゴブリン族のランドロクス

とてとて良い子で お花が好きな ランドロクス」

それが何か? といった感じで言う自称ゴブリン族のランドロクス。

彼女の姿は女治癒士が見る限り、件の「調査対象」と非常に酷似していた。奇妙なマスクに全身防護服、背中に大きな荷物を背負った情報どおりの見た目。マスクの色はピンクだったが、それ以外は完全に一致している。

ランドロクスには申し訳ないけど、何処からどう見ても、あの醜悪な小鬼には見ええない。

「でも、私が知ってるゴブリンは、あなたみたいのじゃ……」

女治癒士の疑問に、ランドロクスが答えた。

「チコオ……チコオ……」

あなたが言ってるゴブリン それはきつと 原始ゴブリンのこと

原始ゴブリン とてとて野蛮で 怖いゴブ

わたちたち文化ゴブリン マスクを被って 良い子になった

違いはそれだけ それ以外にない」

ランドロクスの言っていることは、女治癒士の理解を超えていた。どう考えても「アレ」と「コレ」が同じ生物だとは思えない。じゃあ何でわざわざ「ゴブリン」なんて名乗ってるのか。それもまた、女治癒士の理解を超えていた。つまりよく分からん！ ということだ。

なので、とりあえず女治癒士は、ランドロクスのことを、「ゴブリン」だと思い込んで

る可愛そうな謎生物ということで、認識しておいた。

「じゃあ、あなたが最近森に棲み着いた……えっと「ゴブリン（仮）」さん？」

ランドロクスのことをどう形容していいか分からなかった女治癒士は、とりあえずそう呼んでみた。推定ゴブリン族。いったいどんな悪夢か。もし本当にゴブリン族なら、女治癒士の貞操は絶賛大ピンチ中である。

「チコオ……チコオ……」

あなたじゃなくて あなたたちゴブ

森に住むゴブリン族 とてとていっばいいるゴブ

パピイに マミイに お兄ちゃんに お姉ちゃん 弟 妹 アルデニクス

とてとていっばい 住んでるゴブ！」

「みんな、あなたみたいな格好をしているの？」

女治癒士は、ランドロクスそっくりなゴブリンたちが何十人もいるところを、想像してみた。ワイワイ、ゴブゴブ、シュコオシュコオ。なんだかとても和やかになった。世界中のゴブリンが、彼女みたいになればいいのに……。

ランドロクスは女治癒士の質問に答える。

「モチのろんゴブ！」

とてとてイカしたマスクに とてとて便利な防護服 荷物を背負えば立派なゴブリ

ン

それさえあれば わたちもあなたも立派なゴブリン族

これらがないと あなたもわたちも栄えあるゴブリン 名乗れない」

へーそうなんです〜私もゴブリン族になれるんですねってそんな馬鹿な!? そう

心の中で、女治癒士はツッコんだ。

女治癒士は自分の中にある「常識」というものが、ガラガラと音を立てて崩れ去る音を聞いた気がした。それにしてもこの女治癒士、相手がゴブリン族だというに、結構怖じしない性格である。

ここでコホンと咳を一つ。気を取り直した女治癒士は、ここぞとばかりにランドロクスに問いかけた。

「で、では、ときおり鳴り響くという爆発音は？」

「もちろん そちろん わたちたちの爆発だゴブ〜」

わたちたちゴブリン族 爆発爆弾大好きゴブ〜

遠くでお仕事しているお仲間のためにも 毎日決まった時間に爆発させてるゴブ〜」

なるほどなるほどそうだったのですね〜。謎の生物と騒音の正体を解明し、見事任務達成した女治癒士は、とつてもご満悦な様子。相手が相手なら、口では言えない酷いことをされてたかもしれないのに、出会ったのが善良なゴブリンで、本当に良かったね。

調子に乗った女治癒士は、さらにランドロクスに質問してみた。自称ゴブリン相手だったが、まあ危険はなさそうだし、気にしなくていいでしょう。

「さつきかなり驚いてましたけど、人間は見たことはないんですか？」

「チコオ……チコオ……」

ううん そんなことはないゴブよ ときどきこつそり見たことあるある

でもでも ゴブリン族の「法」で決まってるの

“ヒトとあまり関わってはいけません” 守らないととて恐ろしいオシオキが……あつ

ランドロクスは女治癒士を見て、それから辺りを見てもう一回女治癒士を見ると、もう一度「アッー！」っと叫んだ。

「しまった こまった やっちゃった！」

とてとて “ヒト” と関わっちゃったゴブ！ がつつり “ヒト” と関わっちゃったゴブ！

ランドロクスは頭を抱えてすごく残念がった。このままではリトルシヤイア随一の良い子、ランドロクスの揺るぎなき地位が揺らいでしまう！ かくなる上はこのゴブリン爆弾で自爆して……。

「ちよちよちよッ！ 何しようとしてるんですか!? 止めてくださいー！」

どこからともなく明らかに不穏なモノを取り出して、明らかに不穏な行為を شدしたランドロクスを、慌てて羽交い締めにする女治癒士。

「イヤイヤ ヤメて お願ひゴブ！ 後生だから 見逃してゴブ〜！」

「いえいえ、流石に見過ごせませんよ！ どう見てもそれ爆弾じゃないですか！ 危ないですからどっかに仕舞ってください！」

ワーワー、キヤーキヤー、ゴブゴブ、チョコチコオ——こんな感じでゴルダナル大森林にある秘密の花園では、ゴブリン族と只人の少女たちの、初めての邂逅が果たされたのだった。

*

*

ゴルダナル大森林で、運命的な出会いを果たした女治癒士とランドロクスは、その後それなりに仲良くなっていた。

どうしてマスクを被っているの？ とととてカッコいいし、カワイイから〜。

取っちやいけないんですか？ 絶対ダメダメ！ ダメダメよ！

今は、そろそろ日も暮れて来たので、女治癒士を「へんぴな農村」へ送り帰しているところである。冒険者なのに迷子になるだなんて、どうしようもないヒトだゴブっと、

ランドロクスは思っていた。

「でも、大丈夫なんですか？ その……ヒトと関わっちゃいけないかったんじゃ？」

「チコオ……チコオ……」

確かに 確かに そうなんだけど 関わっちゃものはどうしようもないゴブ

それにお姉ちゃん いいヒトだから きつと問題ないんだゴブ」

それに、「あんまり」としか言われてないし——ランドロクスは能天気にもそう思っていた。いわゆるバレなきヤセーフの精神である。

「ハイ ヽヽヽまで来れば もう平気ゴブ

今日はとてとて楽しかったゴブヽ ヒトとお話するのは初めてだったゴブヽ」

お日様が真っ赤になって完全に沈み込む前に、女治癒士とランドロクスは、村外れの小道に辿り着いていた。これ以上先に立ち入ることは、ランドロクスには許されていない。

「今日は本当にお世話になりました。まさかあなたみたいなゴ布林に出会うなんて、思ってもみなかったです」

「わたしもお姉ちゃんみたいなのヒトに 会えるとは思ってなかったゴブヽ

お互い一緒に ハッピーゴブヽ」

「ふふふ、そうですね、一緒にですね」

その時、森の奥の遠くの方から、ドーンドーンつという爆発音が鳴り響く。ランドロクス曰く、日没の爆発らしい。仕事終わりの合図でもあるようだ。そして、ランドロクスが帰る時間でもある。

「それじゃあ私はこれで……」

「うん お姉ちゃん ばいばいゴブ〜」

そう言つて森へと帰っていくランドロクスを、女治癒士は姿が見えなくなるまで見送った。途中、ランドロクスが何度も振り返つたので、見送るには結構な時間が掛かった。

それから女治癒士は老人村長の家に帰ると、挨拶もそこそこに部屋に戻り、今日あつたことを女剣士に報告した。たとえ無法者の冒険者でも、報連相は大事なのである。

「あのね、あのね、聞いて女剣士ちゃん。今日森の中で出会つた子がね——」

そうして女治癒士は、今日あつたことを洗いざらい全て女剣士に話した。女治癒士の報告を最後まで聞いた女剣士が、口元を歪ませて言う。

「そう、喋るゴ布林族ね……」

その言葉の真意がなんなのかを、女治癒士はまだ知る由もなかった。

ファースト・ゴブリン・コンタクト 2 / 2

四方世界の人々にとつて、ゴブリンとは害虫以下の忌まわしき存在だ。ましてや女性にとつては、存在すら許し難い害悪そのもので、女剣士にしてみれば、なぜ国を挙げて駆除しないのか不思議なくらいだった。

ゴブリンなんてものは滅ぼされて当然のモノであり、絶滅して然るべき存在だ。殺して喜ばれることはあれど、悲しまれることなんてない……きつと、多くの人々が、女剣士の意見に賛同するだろう。

「だからこれは、正しいことなのよ女治癒士」

女治癒士が調査から帰り、眠りに就く頃になってから、女剣士は彼女にこう囁いた。
「私たちの手で、そのゴブリンたちを討伐してしましましょう」と。

最初、女治癒士は女剣士が何を言ってるのか、分からなかった。あの善良なゴブリンを、どうする気だつて？

「なんで、そんな、どうして?!」

女治癒士の問いに、女剣士は「ああもう！」と頭を掻きむしって答えた。

「なんでって、当然でしょう？」
相手がゴブリンなら、殺して当然じゃない。だってゴブ

リンなのよ？　むしろ放置する方が問題だわ。私たちの信用にも関わるし、冒険者としての沽券にも関わる」

「で、でも……あの子たちは、何も悪いことはしてない……」

「そんなものは関係ないわ。ゴブリンは存在するだけで悪なのよ。それに、喋れるほど知恵をつけたなら、一刻を争う事態だわ。アンタだって、冒険者の端くれなら分かるでしょう？」

怪物の中でも最底辺に存在するゴブリンでも、人語を解するほどに成長したならば、厄介極まりない存在になるのは、馬鹿でも分かることだ。見つけ次第、即処分してしまうのが、冒険者としての責務である。

「でも……あの子は……ランドロクスさんは、そんな風には見えなかった……」

「そういう風に見えるように、擬態していただけかもね。そこまでの知恵を付けていたなら、有り得る話だわ」

「そ、それは……」

そこまで思い至らなかつたのだろう。女剣士の言葉に、女治癒士は一瞬言葉に詰まってしまう。それでも女治癒士は懸命に弁明を探した。女剣士には、なぜこんなにもゴブリンの肩を持つのか不思議でならなかつた。

「も、もしかしたら、ホントはゴブリンじゃないかもしれないし……」

やっとの思いで捻り出したのは、そんな言葉だった。

女治癒士が出会ったランドロクスは、自称ゴブリンを名乗っていたが、女治癒士がよく知るゴブリンとは全然違っていた。精々背丈が同じくらいだけというだけで、全く別の種族である可能性は高い。

「たえそうだとしても、ゴブリンを名乗っている以上、ゴブリンとして扱うのが適當だわ」

間髪入れず女剣士は言う。

もし違ったとしても、それはゴブリンを名乗ったヤツが悪いのであって、私たちには関係ない話よ。ランドロクスとかいう自称ゴブリン族の自業自得だわ。女剣士がそう説き伏せる。

「でも……でも……」

それでも、女治癒士には到底納得できることではなかった。理屈では女剣士が言うことは理解できたが、気持ちの面で納得することができなかったのだ。

そんな様子の女治癒士に、女剣士は「はあ」っとため息をつく。

「……あのね、道に迷ってその自称ゴブリンに助けられたから、そんなに同情してんでしょうが、相手は怪物で、私たちは冒険者なのよ？ たえ言葉が通じるからって、分かり合えるはずないじゃない。喋れるからって、馬鹿みたいに絆されてんじゃないわ

よ。いい加減、その甘ったれた考え捨てなさいな」

女剣士の言葉は鋭かったが、核心を突いていた。女治癒士は冒険者で、ランドロクスはゴブリンだ。どんなに意気投合したとしても、その事実は変わらず、その道が交わることはない。

そう、これは一種の気の迷いだつたのだ。

「そう思うことにしなさい。アンタは知恵の回るゴブリンに騙されて、絆された。きつとそれがヤツらの生存戦略だつたのよ。それに私が気付いて、私たちが鉄槌を下す。いつもと同じ、シンブルな話よ。お分かり？」

震えながら涙を流し、女治癒士は頷いた。元々、女剣士が「そう」と決めたなら、選択肢は「それ」しかないのだ。

素直に頷いた女治癒士の頭を、女剣士は優しく撫でる。

「そう、良い子ね……安心しなさい。明日、アンタは『その場所』に案内するだけで良いわ。後の始末は私がつけてあげるから……」

女剣士の言葉に、女治癒士は優しさを感じていた。嫌なこと、辛いこと、いつもこうして彼女が代わりにやってくれる。どんなにキツイことを言われても、そんな優しさがあるから、女治癒士はいつも女剣士の後ろをトコトコとついて回っていたのだ。

女剣士の胸で泣く女治癒士には、今、彼女がどんな顔をしているのか見えていなかった

た。

*

*

翌朝——ゴ布林族の少女「ランドロクス」は、昨日も今日もとてお気に入りのお花畑で、お花の世話をしていた。

「チコオ……チコオ……」

大きくなあれ 大きくなあれ

キレイに 立派に 大きくなあれ フンフン

昨日はこのお花畑で、とてとてイイことがあったので、ランドロクスは上機嫌。今日は気分がノツたので、ちよつと多めにお水をやっちゃったけど、たまにはいいでしょ、ご愛嬌。

「前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪

前へ 後ろへ 行ったり来たり 進み 戻って そしてまた一歩進む♪」

大人たちが唄う「仕事唄」を歌っていれば、あつという間に水やりは終わった。そうなりや、これから日向ぼっこである。ランドロクスはお花畑の中央でチコオつと座ると、日課である日向ぼっこを始めた。

昨日はこうして日向ぼっこをしていると、なんとという偶然でしょう。女治癒士というお姉ちゃん、出会うことができた。今日もイイことあるといいなっと思っていると、偶然か必然か、女治癒士がまたやって来た。

「あつ 昨日のお姉ちゃん またまた来たのね こんにちははゴブ〜」
「……………ええ、その……………こんにちはは、ランドロクスさん」

こんなにもいい天気だというのに、なんだか女治癒士は浮かない様子。俯き加減で顔色も悪い。一体何があったのでしょうか。また道に迷っちゃったのかな？

「チコオ……………チコオ……………」

どうしたの こうしたの？ なんだか とてとて気分が悪そう

それに 後ろの“ヒト”のお姉ちゃん ダレダレ 一体だれなのゴブ？」

ランドロクスの問いに女治癒士は答えなかった。代わりに女剣士が口を開く。

「へえー、アンタが言ってたとおり、ホントに喋ってるじゃない。ぶつちやけ半信半疑だったけど、マジだったのね」

女剣士はランドロクスに近づくと、持っていた剣でランドロクスのあちこちを突いてみせた。

「イタ アイタ アイタタ〜」

やめて よして つつかないで〜 わたちは悪いゴブリンじゃないゴブ〜」

「あら、ホントに「ゴブリン」って言うのね。流星に嘘だと思ってたけど……ねえアンタ、念のために訊くけど、ホントに「ゴブリン」なの？」

「もちろん そちろん そうだゴブ」

「あたちは ゴルダナル大森林の文化ゴブリン」とととて 良い子で——」

「ああ、ならもうそれはいいわ」

「……ゴ、ブっ?」

何が起きたのか理解できなかったのか、ランドロクスがそう言葉を漏らす。女治療士が口を抑え息を呑む。ランドロクスがゆっくりと倒れ込んでいった。

「チ、コオ……チ、コオ……」

「な なんて? どう して?」

「チッ! 浅かったか!」

完璧に決まったと思っていた女剣士の斬撃は、しかしランドロクスの防護服によって威力が激減されていた。即死は言うに及ばず、致命傷にすら至っていない。

「思っていたより頑丈なのね」

それでも、女剣士が圧倒的に優位なのは変わりないことだ。目の前のゴブリンは、地を這う芋虫のように女剣士の魔の手から逃れようとしている。無駄なことを……女剣

士は唇を歪に開いてそう思った。

「チ、コオ……チ、コオ……」

やめて……こないで……イジメないで……」

無様な醜態を晒してそんな命乞いをするゴブリン。それを見て、女剣士は更に歓喜で顔を歪ませた。

「いいわ、いいわ、凄く良いわ！　そうよ、こういうのよ、こういうのなのよ！　私が求めていたのは、こういうのだったのよ！」

それは、今までにない未知の快樂だった。ともすれば絶頂に達してしまうほどの悅樂。圧倒的優位な状況で、圧倒的低位な存在を弄ぶ。大義名分はこちらにあり、存在不可理由はあちらにある。これが快樂でなくてなんといいのか。

「ああ、スゴクイイ!!　これで私はもつと有名になれる！　これで私はもつと昇進できる！　みんなから称賛されて、褒められて、憧れられて、私は「英雄」になるのよ！」

こんな雑魚共を殺すだけでそれが実現できるだなんて、なんて美味しい話なのかしら！
「イヤア……イヤア……酷いゴブ……怖いゴブ……どうして……こんな酷いことするの？」

「どうして？　どうしてって決まってるじゃない！　アンタが「ゴブリン」だからよ！
ゴブリンなんて死んで当然の存在なのよ！　アンタたちはそういう存在なのよ！」

「そんな……そんな……酷いゴブ……」

「わたち……あなたに何もしていない……悪いこと何もしていない」

「いいえ、アンタたちは生きてるだけで「悪」なのよ！ 存在自体が「悪」なのよ！
滅せられて当然だわ！」

「もうヤメて下さい!!」

あまりの凄惨な光景に、思わず女治癒士はそう静止した。だが、その程度で止まる女剣士ではない。

「ウルサイわね!! アンタはいつもみたいに黙って見てればいいのよッ！ 引っ込んでなさい！」

「でも！ これではあまりにも酷すぎます！ 苦しませないって、約束したじゃないですか！」

「それはコイツが「頑丈」でなかった場合の話よ！ ゴブリンの癖に防護服なんて着てるから、こんなことになんのよ！」

「でも、でも……こんなのは、あまりにも……」

女治癒士の嘆きに、一瞬、女剣士の動きが止まる。そして、目の前で倒れ伏すゴブリンを見下ろした。

ふと、なぜこんなに女治癒士がこのゴブリンをかばうのか、分かったような気がした。

この独特な「マスク」が全ての原因だ。見方によれば「可愛い」とも言えなくもないこの「マスク」が、女治療士の同情を誘っているのだ。

小賢しい真似を……女剣士がギリツと唇を噛み締める。私が彼女を目覚めさせてあげなくては……。

「いい？ アンタはこの「マスク」のせいで同情を感じているんでしようけど、この下にはあの醜悪なゴブリンの顔が収まってんのよ？ アンタもゴブリンの顔くらい見たことあんでしょ！ あのキモい顔がこの下には入ってんのよ！ 見てなさい！」

そう言う女剣士は、ランドロクスを掴み上げ、強引にマスクを剥がそうとする。

「イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

マスクに手をかけた途端、想像以上の勢いで暴れだすランドロクス。しかし、力に勝る女剣士の前では、無駄な抵抗に過ぎなかった。

徐々に、徐々に、外れそうになっていくランドロクスのマスク。それに合わせて、ピツ、ピツ、ピツ、という謎のアラーム音が何処からか聞こえてきた。それは、ランドロクスのマスクが外れそうになるほどに、大きな音を立てていく。

「ああもう、ウザったいわねこのアラーム！ どつから鳴ってんのよ！」

言うまでもなく、アラーム音はランドロクスから鳴っていた。だが、それが分かったからといって、なんだというのか？ 女剣士は構わずマスクを剥がしていく。

「……チコオ……お願い……もうヤメて……ヤメてゴブウ……」

最後の抵抗とばかりに女剣士の腕を掴むランドロクス。しかし、その程度では女剣士の心を逆なでするだけだった。耳障りなアラーム音は、未だ鳴り響いている。ピツ、ピツ、ピツ、ピーー。

「あと、もう、ちよい……よっし、外れ、たッ！」

パアツツという音を、女治癒士は聞いた。

女治癒士には、“それ”がなんの音なのか理解できなかつた。

女剣士が崩れ落ちていく。何が起きてるのか分からない。彼女は痙攣しているようだった。

ランドロクスも地面に落ちた。そのマスクの奥は、女治癒士からは暗闇に隠れていて見えない。でも確かに外れているようだった。

アラーム音は、もはや「ピイイイイイイ」という耳鳴り音になっている。その音だけが、花畑に木霊していた。

「お、女剣士ちゃ……」

女治癒士が女剣士に声をかけようとしたその時、ブオオオオオオンという爆音と共に、木々の間から“何か”が猛スピードで飛び出てきた。

“それ”をなんと呼べばいいのか、女治癒士には分からなかつた。鋼鉄でできた馬

車。しかし引き馬は見当たらない。自動で動く馬車——「自動車」とも呼ぶべきそれは、ランドロクスの側で急停止すると、中からたくさんのゴ布林たちが飛び出してきた。

真つ先にランドロクスへと駆け寄るゴ布林。女剣士を観察するゴ布林。そして女治癒士の周囲を包囲するゴ布林。皆一様に同じマスクをして、同じ防護服を着ている。

何かとんでもないことをしてしまったのだと、女治癒士はこの時になってようやく理解した。

「あつ……あつ……あつ……あつ……」

ゴ布林たちは一斉に、持っていた「筒状の何か」を女治癒士に向けた。それが何なのか女治癒士は知らなかったが、あまりの恐怖心に強張ってしまった、動くことすらできなかつた。それが幸いしたのか、ゴ布林からの発砲はなかつた。

「ジュココオ……ジュココオ……」

オマエら 一体 何してくれやがったゴブ!

そんなゴブリンの怒声が轟いた瞬間、ドドドーンという発砲音がして、女治癒士にチクリといった感覚が襲った。それから幾許もなく、女治癒士は意識を失った。

*

*

次に女治癒士が目覚めた時、そこは花畑ではなく、ある個室だった。

鉄と石でできた冷たい部屋。薄暗く、ベッドしかない簡素な部屋で、酷く無機質な感じがした。

言いようのない恐怖心に襲われる女治癒士。ここは何処で、何が起きてるのか、何も分からない。

「シユコオ……シユコオ……」

ようやく 目覚めたゴブかく

プシユーという音と共に石壁が開き、そこから一匹のゴ布林が入ってくる。

「ヒツ……」

女治癒士は身を竦ませた。ガクガクと震え、顔にはアリアリと恐怖が刻まれていた。

「シユコオ……シユコオ……」

そんなに こんなに 怯えることない

ゴブの名前はアルデニクス みなを代表して オマエと話をしにきたゴブく

アルデニクスと名乗ったゴ布林は、女治癒士の側によると、どこからともなく「椅子」を出して、そこにちよこんと座った。

女治癒士はできるだけアルデニクスから遠ざかるように、ベッドの端に逃れる。まる

で恐怖に染まる小動物のようだった。

それをアルデニクスは一瞥すると、ややあつてから話しだした。

「シユココオ……シユココオ……」

ここまでビクつかれると アルデニクスでも悲しくなってくるゝ

まあいい そういい 気にしない アルデニクス 気にしてない」

「……ここは、どこですか？」

女治癒士がようやく絞り出した言葉は、そんな言葉だった。

「シユココオ……シユココオ……」

ここは 我らが城 「リトルシャイア」 そこにある 「マッドマツディクス研究所」

オマエさんには 計六つの「罪」が 嫌疑されてるゝ」

女治癒士を捉えたアルデニクスの「レンズ」が、薄闇の中で不気味に煌めく。

「でもでも 安心するといひ オマエさんの嫌疑 もう晴れた オマエさんに「罪」はな

いゝ」

「そ、それは、どういう……」

「どうも こうも そのままの意味ゝ

〃記録ログ〃 見せてもらったが オマエさん 見てるだけだったゝ

むしろ 一生懸命 止めてるようでもあつたゝ」

そう言うのとアルデニクスは、持っていた「記録ログ」を取り出し、起動させた。ブウーンと空間に投影された映像が、当時の状況を再現する。

『もうヤメて下さい!!』

『ウルサイわね!! アンタはいつもみたいに黙って見てればいいのよッ! 引っ込んでなさい!』

『でも! これではあまりにも酷すぎます——』

そこまで再生してアルデニクスは映像を止めた。

「シユココオ……シユココオ……」

オマエさんの嫌疑は この後の「苦しませない」という教唆的な発言が主だが、

裁定の結果 無罪放免となった。弁護したランドロクスに 感謝するといひ

「あつ……ランドロクスさんは、ランドロクスさんは無事なんですか!」

アルデニクスにランドロクスのことを言われ、彼女のことを思い出す女治癒士。女治癒士の問いに、アルデニクスは淡々と答えた。

「死んだゴブ」

「……えっ?」

「だから ランドロクス 死んだゴブ」

ランドロクスは オマエさんを弁護したあと 屈辱に耐えきれず自殺したゴブ」

「えっ？ 死んだ？ ランドロクスさんが？ な、なんで？」

震える声で女治療士は問うた。

「ランドロクス マスクの下見られた これはゴ布林族にとつて 死よりも耐え難い屈辱ゴブ

だから ランドロクス オマエさんを弁護したあと ゴブリ爆弾で自爆した」

アルデニクスたちゴ布林は、それを決して止めようとはしなかった。それほどの屈辱だったのだと、カレらはよく理解していたのだ。

「ああああああ」

震える声が溢れ出す。

「わ、私たちが……む、無理にマスクを外そうとしたから……う、ランドロクスさんは、死んだ？」

「違うゴブ、 オマエさんたちじゃなくて もう一人のヒトが外したから 死んだゴブ」

オマエさんは見ているだけだったと 「記録」も「証言」も「証明」してるゴブ」

「わ、私があの時見てるだけじゃなくて、止めてれば、彼女は死ななかつた？」

「そうかもしれないし そうじゃなかつたもしれんゴブ」

でも そんなモンはタラレバの話で ランドロクスが死んだことに 変わりない」

あまりにも無慈悲なまでに、アルデニクスはそう言い切った。

「わ、私……こんなことになるだなんて、思ってもみなくて……だ、だって……あ、の……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「今更謝られていも 遅すぎるゴブ〜 それに謝るなら ランドロクスにゴブ〜
でもランドロクス 粉微塵になつて爆散しちゃったゴブ〜 もうなーんにも残つて
ないゴブ〜」

それでも女治癒士は、うわ言のように「ごめんなさい」と繰り返すばかりであった。そんな彼女に対し、アルデニクスは構わず続ける。

「それにオマエさん 謝っている場合じゃない〜」

オマエさんの裁判は終わったが〜 もう一人のヒトの裁判 終わってない〜

オマエさんはこれから その「弁護」をするんだゴブ〜」

未だ「ごめんなさい」を繰り返す女治癒士には、アルデニクスの言葉は届いていないようだった。

*

*

ゴブリンたちの裁定所、「ゴルダナル裁定所」の「円型法廷」では、怒れるゴブリンた

ち数百人がひしめき合っていた。

ガヤガヤ、ザワザワ、ゴブゴブ、シユココシユココ。今こそゴブ式裁判の時である！
「ジユココ……ジユココ……」

聞くの良い 見ると良い 同胞たちよ！ 栄光ある我らがゴ布林族たちよッ！」
ひとときわ立派な「裁判マスク」を被った裁判長ゴ布林が、法廷の中央でそう宣言した。

裁判長ゴ布林の言葉に呼応し、傍聴ゴ布林たちが声を揃える。ゴブ式裁判！ ゴブ式裁判！ ゴブ式裁判！ ゴブ式裁判！

「そう！ これより それより ゴブ式裁判の時でゴブ！」

被告人は か弱き少女Aのマスクを外せし大罪人 「女剣士」！」

裁判長ゴ布林の台詞と共に法廷の扉が開き、嚴重な装備に身を固めた警備ゴ布林に連れられて、女剣士が入廷してきた。

彼女の登場に傍聴ゴ布林たちは恐怖に包まれた。あちこちで悲鳴があがり、ヒソヒソゴブゴブギャーギャーざわめく。

連行されてきた女剣士は、なんと全身全裸だった。だらしなく膨らむ乳房を晒し、秘部はみつともなく露出されている。手足は頑強な「ゴルダナル鋼」でガッチリ拘束され、抵抗は出来ないようだ。なんて原始的な姿なのか。まるで文明的でない。信じられない

いくらい屈辱的な醜態だ。うええお下劣。

女剣士は全身切り傷だらけで、端正だったその顔は半分焼け爛れ、皮膚が剥げていた。目には全く生気がなく、その足取りはたどたどしかった。

そんな変わり果ててしまった女剣士を、女治癒士は弁護席から眺めていた。

ゴブリンのざわめきはやがて怒声となり、女治癒士には分からない言葉で、女剣士を罵っている。女治癒士はただただ怖かった。この裁判所も、ゴブリンたちも、女剣士のこと、何もかも。

「ジュココ……ジュココ……」

そして この大罪人を弁護するのは 同じくヒトの娘 「女治癒士」！

彼女は女剣士の友人であるからして この裁判に特別召集されたものである！

裁判長ゴブリンがそう宣言すると、ゴブリンたちが沸き立つ。その喧騒の中で女剣士の視線が、女治癒士を捉えた。消えていた瞳の生気が、僅かに蘇る。

「ねえ、ねえ！ あなた女治癒士でしょう!?」
「ねえ、お願ひよ！ お願ひだから、ここから助けてッ！」

そう訴える女剣士に、女治癒士はなぜか原始的な恐怖を抱いた。縋るような女剣士の視線、みつともなく涎を垂らし、目には涙が浮かんでいた。

「ねえ、ねえ、聞こえてるんでしょう!? コイツらに言っっちゃってちようだい！ 私は何

も悪くないって!!」

なにが何も悪くないものか……私たちは、もうどうしようもなく「罪」を犯しすぎた。取り返しのつかないことをしてしまった。今更後悔しても、何もかもが遅すぎるのだ。

「ねえ! お願いだからよ! お願いだから! 返事をして! ねえ、女治癒士! 聞こえてるんでしょう!? ねえ、無視しないでよ! オイ、返事をしろよ! 返事をしろ、女治癒士! イイイイ!!」

女剣士の罵声は、ゴ布林たちの喧騒にかき消され、女治癒士には届かなかった。しかし、たとえゴ布林たちがいなくても、彼女には響かなかっただろう。女治癒士は嗚咽を漏らし、弁護席に寄りかかって、泣き崩れることしかできなかった。

「ジユココオ……ジユココオ……」

ではこれより 裁定を始める!

被告人「女剣士」は 暴行罪を始めとする 四七の「罪」の嫌疑が掛けられているゴブ

ブ
詳細については “コレ” を見ると良いゴブ

裁判長ゴ布林がそう言うと、中央の空間に先程女治癒士が見た映像が再生された。

『へえー、アンタが言ってたとおり、ホントに喋ってるじゃない。ぶっちゃけ半信半疑だったけど、マジだったのね』『チッ! 浅かったか!』『やめて……こないで……イジ

メないで……』『どうして? どうしてって決まってるじゃない! アンタが「ゴ布林」だからよ! ゴ布林なんて死んで当然の存在なのよ! アンタたちはそういう存在なのよ!』『いいえ、アンタたちは生きてるだけで「悪」なのよ! 存在自体が「悪」なのよ! 滅せられて当然だわ!』『イヤイヤイヤイヤイヤアアアアアアアアアアアアアア!!』——ブツン。

映像が終わって暫くしても、法廷は静まり返ったままだった。

「な、なによ……なによなによなによなによなによ!! この一体どこが悪いって言うの!?! だってそうでしょう? オマエたちは「悪」なのよ! 醜悪で下劣で卑猥な人類の「敵」なのよ! 私が正しいのよ! 私は間違ってるんじゃない!」

そう訴える女剣士の姿は、ゴ布林たちには酷く醜く見えた。もはや哀れですらあつた。裁判長ゴ布林は続ける。

「被告人はこの後、少女Aのマスクを剥がし、その素顔を見た嫌疑が掛けられているゴブ!」

これに関して、被告人、なにか申し開き、あるゴブか?」

「だから、それがなんだっていうの? マスクの下を見たら、なんだっていうのよ!」

女剣士の発言に、傍聴ゴ布林たちはどよめいた。マスクの下見たらって、口にするもの悍ましい発言だゴブ。

「ヂココオ……ヂココオ……」

裁判長！ ご覧の通り被告人は 全くもって これっぽっちも 反省の色が見えないゴブ

ゴルダナル法典に従い 我々は 「貢献罪」の適用を求めるゴブ！」

女治癒士の弁護席とは反対方向に位置していたゴブリンが、手を挙げ立ち上がるとそう言った。傍聴ゴブリンたちが騒めく。あ、あの「貢献罪」をゴブか!?

「ヂュココオ……ヂュココオ……」

ふむふむ ではでは 弁護人——」

裁判長ゴブリンがそう言うのと、法廷中のゴブリンの目が女治癒士に集中した。女剣士の縫るような目さえも、女治癒士に注がれる。

「あ、あ、あの……わ、私、私……私は……」

あまりのプレッシャーに女治癒士の膝はガクガクと震えた。世界がグルグルと廻る。下半身に力が入らず、その場にへたりこんでしまう。彼女の股間からは、何やら透明なモノが溢れ出ていた。

ゲエー、アイツおしっこ漏らしたゴブよ！ バカッ神聖な裁判中になんてこと言ってるゴブ！ 傍聴席の方からそんな囁き声が聞こえる。

「ヂュココオ……ヂュココオ……」

弁護士人！ 弁護士人！ 弁護士人 「女治癒士」！

女剣士の凶行に対し 何か釈明 もしくは弁解などはないゴブか？」

「お願いよ、女治癒士！ ヤツらに “私は悪くない” って教えてあげて！ あれは、そう

……不幸な事故だったのよ！」

「あ、あ、あ、私は……私は……ただ、女剣士ちゃんに追いつきたくて……」

だから——ランドロクスを利用して、彼女との友情を利用して、利益を得ようとした。

「こ、こんな……こんなことになるなんて、思ってたかったです……本当です……わ、

私たち、何も知らなくて……それで……」

いや、本当は知っていた。ゴ布林族にとつてマスクがいかに大事かを、少なくとも

女治癒士はランドロクスとの会話を通して、知っていた。知っていたはずだった。知っ

ていたはずなのに、こんなことをしてしまった。

「でも……こ、こんなに、大事になるだなんて、お、思ってたなくて……だから……だから

……」

それからは女治癒士はまるで命乞いをするようにうづくまり、ただただ「ごめんなさ

い」と繰り返すばかりだった。

「ねえ、ねえ！ それだけなの!! それだけしか言うことはないの？ ねえ、お願いだか

ら、顔を上げてよ女治癒士！ まだ何か言うことがあるでしょう？ ねえ、 “ごめんな

さい「じゃなくて何か言つてよ！ ねえ！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

それから、ゴブリンにも見るに堪えない醜態が繰り広げられた。女剣士は女治癒士に罵詈雑言を投げ、女治癒士はただただ謝るばかりだった。

「アンタだつて私に協力していた癖に！ 花畑に案内したのは誰?!」 ゴブリンの話を私にしたのは誰?! 全部オマエだツ！ 全部オマエがやつたんだ！ なのになんで私がココにいて、オマエがそこにいるんだ！ オマエこそが諸悪の根源だろうが！ クソが！ このクソアマが！ 地獄に落ちろ！ 地獄に堕ちろおおお!!」

「静粛に！ 静粛に！」

見るに見かねた裁判長ゴブリンが「カンカンカン」つと「ゴブリガベル」を叩く。あまりにも叩きすぎてボコボコになりそうだったが、その頃になつてようやく罵詈雑言が止んだ。

「ジュココオ……ジュココオ……」

弁論は以上でゴブ！ これより神聖なる審判の下 判決を下すゴブ！

被告人「女剣士」は「有罪」か「否」か？ 裁定は如何に!？」

裁判長ゴブリンの問いに、法廷中のゴブリンたちが大合唱で応える。

有罪！ 有罪！ 有罪！ 有罪！ 有罪！ 有罪！

「ジユココオ……ジユココオ……」

ならば しかして その「罪」とは何ぞや? その「罰」とは何ぞや?」

貢献罪! 貢献罪! 貢献罪! 貢献罪! 貢献罪! 貢献罪!

「よおし ならばこれにて 審判は下った!

被告人「女剣士」に 「貢献罪」を下すでゴブ! 女剣士は「貢献罪」ゴブウウウ!!」

裁判長ゴブリンの裁定に、法廷中のゴ布林たちが「わあああああ」つと歓声をあげた。

「いや、いやよ、巫山戯んじやないわよ! 誰がアンタたちの言うことなんか——あう!」

判決の決まった大罪人に、もはやここに居場所はありません。可及的速やかに刑を実行するため、周りを固めていた警備ゴ布林たちは、女剣士を連行した。法廷では、なおも割れんばかりの大合唱が響いている。

貢献罪! 貢献罪! 女剣士は貢献罪! 貢献罪! 貢献罪! 女剣士は貢献罪!

足の中から頭の天辺まで、女剣士は貢献罪!

「やだ、やだ、いやだ! お願い、お願いよ! 私が悪かったから! 謝るから、謝るか

ら、許して! お願い——」

そしてドーンという音と共に、法廷の扉は閉じられた。

*

*

女治療士は、ゴブリンたちに最初にあてがわれた部屋で、ぼうつと天井を見ていた。目は腫れ、唇はカサカサになっていた。顔は完全に生気がなく、まるで生きた屍のようでもあった。

そこにまたもや同じようにプシューと扉が開き、アルデニクスが入ってくる。アルデニクスはまた何処からか椅子を取り出して、ちよこんとそこに座った。

「シユココオ……シユココオ……」

初めての「弁護」にしては あー そこそこ まずまずだったゴブ」

アルデニクスなりに励ましたつもりだったのだろうが、全くもって効果はなかった。アルデニクスは思った。そんなに衆目の前でおしっこ漏らしたのがショックだったのか……と。

「シユココオ……シユココオ……」

これで オマエさん ここでやるべきこと 終わったゴブ

今日はもうお外は真つ暗だから 明日の朝 人里まで送っていくゴブ」

それから暫く沈黙が続いた。手持ち無沙汰になって、アルデニクスが色々今後について思案し始めた頃、ぼつりぼつりと女治癒士が口を開いた。

「……女剣士ちゃんは、これから、どうなるんですか?」

アルデニクスは答える。

「シュココ……シュココ……」

女剣士さんには「貢献罪」適用されたゴブ

貢献罪 ととて重い罪でゴブ でも一番名誉な罰でゴブ

女剣士さんは 足の先から 頭の天辺まで 余すことなく ゴブリンの発展に「貢献」してもらおうゴブ

「それって……「孕み袋」になれってことですか?」

女治癒士の問いに、アルデニクスは不思議そうに答えた。

「なんだ その「孕み袋」ってのは?」

貢献罪 そんなモノと違う 貢献罪 何もかも有効利用する

服も 武器も 毛も 皮も 肉も 骨も 血も 爪の先も 細胞一つに至るまで

全部有効利用する

生きてる内は 実験 研究 死んだ後も 研究 実験

そういう罪だと みんなで決めたく そういう罰だと みんなで決めたく

女治癒士はアルデニクスの説明を聞いて、ぞつとした。貢献罪とは「孕み袋」なんかよりも悍ましい、凄惨な罪だったのだ。

生きてる限り実験に利用され、死んでからも実験に利用される。あらゆる延命処置を施し延命され。あらゆる蘇生措置を施され蘇生される。それを何度も繰り返し、もう二度と目覚めなくなったら、今度は徹底的に解剖され解体される。

血や骨は錬金術の材料となるだろう。皮は革細工に、毛は糸になるのだろうか？ 肉や内蔵は、食用に適するかどうか調べられるかもしれない。

そして何よりも恐ろしかったのは、その罪は本来、ゴブリンに対するものだということだった。そのことが、女治癒士は何よりも恐ろしかった。カレらはそれを当然のこととして、受け入れている。

純粹さは時に、残酷さを強調させる。彼らゴルダナルのゴブリン族のあり方は、まさにその言葉そのままだった。

「あ、あの……せめて……せめて……女剣士ちゃんの……あの子の「認識票」だけは、返してくれませんか？」

冒険者にとって「それ」は、最期の生きた「証」だった。記載されてるのは、名前と種族と職業ぐらいなものだったが、「認識票」にはそれ以上の意味が籠められているのだ。

だが、アルデニクスたちゴブリンに、そんな倫理は通用しない。無慈悲までの結論を、アルデニクスは女治癒士に伝えた。

「シユココオ……シユココオ……」

申し訳ないけど、それは無理ゴブ

貢献罪に処されたモノの持ち物は、全て没収されるんだゴブ。全部共有財産になるんだゴブ

オマエさん渡せるものは、細胞一つありはしない」

「……そう、ですか」

不思議と、女治癒士は残念とは思わなかった。いつそ清々しきすら感じていた。ここまで徹底的だと、笑いすら込み上げてくるようだった。それなのに、瞳からは涙が溢れていた。

「シユココオ……シユココオ……」

アルデニクス、分かってたゴブ。『ヒト』とゴブリン関わると、最悪、こうなるつて

だから、ヒトと関わっちゃいけません。そう教えてたけど、本当、残念ゴブ……」

アルデニクスは気落ちしたようにそう言った。

「今回、アルデニクスたち、ランドロクス失った

今回 オマエさん 女剣士失った

今回 お互い それで手打ちにするゴブ

今回 お互い 何もなかったゴブ そういうことにするんだゴブ

「……そう、ですか……そう……ですね」

アルデニクスの提案に、女治癒士はそう答えた。

それからそれ以上、二人は会話を交わすことはなかった。

*

*

翌朝、女治癒士は「へんぴな農村」まで戻ってきていた。

どれだけ留守にしていたかは分からない。でも、早朝に帰ってきたというのに、村人たちは何も心配されなかったところをみると、そんなに時間が経っているわけではないようだった。

あまりにも長閑な様子だから、昨日あったことが、まるで夢か幻だったかのように思えてくる。

女治癒士は老人村長邸に辿り着くと、真つ先に老人村長の下へと向かった。そして老人村長に今回の調査結果を報告した。森は「何も問題はない」。何も問題はなかつ

た」と。

「いやーそうかそうか、薄々はそうじゃないかと思っておったが、冒険者さんのお墨付きとなれば、これで一安心じゃわい」

「ただ、森に住むカレらは、平穩を望んでいるそうなので、そつとしておいてあげて下さい」

「ん？ ああ、それは構わんが……なんとも、まあ、まるで話してきたみたいと言うんじやのう」

「ええ、まあ、はい……それで、あの、もう私はこれで失礼します」

「それは随分と忙しないのう。これからワシらは朝食なんじやが、どうじや？ 冒険者さんも良ければ一緒に……」

「いえ、急いでいますので、大丈夫です」

「……そ、そうか……冒険者というのも大変なんじやのう……ん、じやがはて？ お嬢さんと一緒だったもう一人の冒険者さんは……」

「帰りました！」

「え？」

「だから、女剣士ちゃんは、もう帰りました。先に帰ったんです」

「そ、そうか……じやあ、長く引き留めるのもあれじやし、ここまでにしようか。冒険者

さん、ありがとう」

「はい、短い間ですがお世話になりました。もう二度と会うことはないでしょう」
それから女治癒士は街へ戻り、そして冒険者を辞めた。

秩序の中の混沌（ゴブリン）

悲劇とは、ほんの些細なすれ違いによって辿り着いてしまった、答えの先にあるものなのかもしれない。

たとえそうだとしても、ゴブリンたちは多くを悩まない。「過去」とは「知るべきもの」であつて、「見るべきもの」ではないからだ。見るべきなのは「今」であり、考えるべきことは「未来」のことなのだ。

だからゴブリンたちは、「これまでのこと」ではなく、「これからのこと」について考えていた……。

*

*

順風満帆に思われていたゴブリンたちの発展も、この頃になると、その速度も緩やかになっていった。

これまでの驚異的な発展は、アルデニクス主導によるエオルゼアゴブリン技術の「再発見」が主な原動力だったのに対し、主要ゴブリン技術を「再現」し終えた今となって

は、これまでのような恐るべき発展速度は望めぬものとなっていたのだ。

とはいえゴ布林たちは、そのことを「問題」としては捉えていなかった。ただ、いそいそ忙しない毎日から、ゆつくりのほほんとした日常へ、変わり始めてきただけのこと。平和を享受し、ゴ布林たちは安穩に包まれようとしていたのだ。

「ゴブリタンク」や「ゴブリウオーカー」などの便利な乗り物、ゴブリ機構に支えられた安定した都市システム、高度に効率化された生産システム——そんな中で起きた先日の「悲劇」は、ゴ布林たちに少なくない衝撃をもたらした。

想像だにしていなかった「悲劇」に動揺するゴ布林たち。しかし、失敗に学ばぬゴ布林たちはいない。「悲劇」で得た「教訓」を糧に、ゴ布林たちはさらなる発展を歩み出す。

ゴ布林マスクと防護服に新たな改良を施し、より安全な治安維持システムを構築した。そしてなにより著しく「進化」したのは、ゴ布林たちの「武器」だった。

高度な文明を持ち、しかしながら、自然との調和を「是」とするゴルダナルのゴ布林たちは、その技術力に反して、これといった「武器」を持っていなかった。

文明開化当初、まだ外敵が多かった頃は、身を守るために弓や槍、剣などの「武器」が必要だったのだが、森を我がモノとし、大森林の支配者となったゴ布林たちには、必要以上の「武器」は不要となっていたのだ。

森に住む生き物たちは、ゴ布林たちの「脅威」ではなく、共に生き、共に死んでいく「親愛なる隣人」である。過剰なまでの「武力」の保持は、森の「秩序」を崩壊させかねない危険なものだった。

混沌は秩序の中にあつてこそ意味がある。オモシロおかしい「混沌」は、きちんとした「秩序」あつてこそ楽しく栄えるのだ。そう、ゴ布林たちは知識と経験から信仰していた。

そんなわけでゴ布林たちの主要武装は、あまり傷つけることなく「脅威」を無力化できる「ゴブリ麻酔銃」がせいぜいなわけで、たとえもつとスゴいモノを「再現」できたとしても、決してしようとはしてこなかった。

しかし、ゴ布林たちは知ってしまった。「脅威」とは、森の「中」ではなく、「外」にもいるのだということ。そして、その「脅威」とは、ゴ布林が望むと望まざるとに関わらず、向こうからやってくるということ……。

「脅威」とは、時として文明発展の起爆剤となる。良いか悪いかは別として、それは確かな事実だった。ゴ布林たちは他の多くの種族と同じように、外敵からの「脅威」に備えるため、自らの技術力を結集して「武装」し始めたのだ。

これは、そんな折に起きた出来事である。

*

*

ドシーン！ ドシーン！ 平和だったゴルダナル大森林に、突如として「脅威」が現れた！

なんの前触れもなく山間部に出現した、身の丈10ゴブリンはありそうなムキムキマッチョの大男。肩と頭からはドでかい角が突起し、口元には大きな牙が生えている。逞しすぎる筋肉はモリモリで、それを誇示するかのように、サビのような赤褐色の肌が外に露出されていた。マッチョマンの両腕には、これ見よがしに大きな戦斧が握られている。

そう、言わずとされた「人食い鬼^{オウガ}」である！

強固な盾を持つ騎士を、その盾ごとぶった切ったり、数多の術を修めた魔術師を、それよりもつとスゴい術で焼き殺しちやったりする、なんかこうめちやめちや強くてスゴい、ヤバイヤツだ！

そのオーガの中でもこのマチョメンは、「オーガ長」の名を持つ兎に角色々スゴいやツで、平和に暮らすゴルダナルのゴブリンたちの平穩を脅かすために、遙々遠方からここまでやって来たのだ！

いや実際には、「魔神将」からの密命を受け、復活した「魔神王」の領土拡大を目論む

ためにゴルダナル大森林にやって来たのだが、そんなことはゴ布林たちの知るところではない。

ゴ布林たちが「ゴルダナル大森林」と呼ぶこの土地は、未開拓だった故か異常なまでに天然資源が豊富であり、「神々に愛されし地」と呼ぶに相応しいミラクル大地だった。さらに、立地的にも人類の主要都市からいい具合に離れていることもあって、「祈らぬ者」どもにとつてかなりの要所となっていたのだ！ 当然、そんなこともゴ布林たちの知るところではない！

そんな重要地点である「ゴルダナル大森林」に単身乗り込んできた「オーガ長」は、その見た目は言わずもがな、その実力、その信頼、その実績全てに於いて相当なモノであることは、そのムキムキの筋肉具合から容易に推し量ることが出来るだろう。筋肉はパワー、パワーは筋肉……つまり、どうということかというところ、ゴルダナルのゴ布林たちは絶体絶命のピンチだった！

しかし、そんな危機に瀕しているゴ布林たちは、オーガ長の姿を最新の治安システムで捕捉した時、呑気にもこう思った。なんて原始的な見た目なんだゴブ！ ああ恐ろしや！

なにせ相手は「ほぼ全裸」。ゴ布林たちにとつてはそれがなによりも重要だったし、なによりも見るべき箇所であった。防護服どころかマスクすらしていないゴブ！ な

んという原始的な格好！ そのせいか、便利でお得な「道具」であるはずの「斧」できえ、野蠻で前時代的なものに見えてくる。

突如出現した原始的な生物に対し、ゴブリンたちは対応を迫られた。どうしようか、そうしようか……なにせ相手は野蠻そうなお人。強引にお引取り願うこともできるだろうが、「過去」の教訓を基にすると、下手に手出しするわけにもいかないぞ。

「相手は単騎ゴブ！ さっさと先制してさっさと排除してしまうゴブ！」

「でもでも 手荒なマネはご法度ゴブ 相手は原始的な生き物の可能性 高いゴブ 慎重に接触して 丁重にお帰り願うゴブ」

「しかし 接触したところで 会話が通じるとも 限らないゴブ」

「下手打てば 「前回」 のようなコトになっちゃうゴブよ！」

「ゴブゴブ 確かに それだけは 避けなくてはならないゴブ」

「であるならば 躊躇わずうって出るべきゴブ！ そのために作った『アレ』ゴブ！ 是非もないゴブ！」

「だが それでは「あの時」とまるで変わらないゴブ！ 「前回」のことを忘れたゴブか！？」 あの「悲劇」を 我々が繰り返すワケにはいかないゴブ！」

「フゴフゴ もっともな意見ゴブ 相手が原始的だからとはいえ 我々も原始的になる必要はない」

「それに 原始的な見た目だからといって 中身が原始的である保証もないゴブ 「前回」の時もそうだったし 「見た目で判断してはいけません」 それは忘れちゃいけないことゴブ」

「確かに確かに でもでもしかして このまま放置するわけにもいかないゴブ 対策を練らねば」

「ウムウム 全くもってそのとおりゴブ じゃあ どうしようかゴブ？」

「うゝん うゝん どうしようかゝ そうしようかゝ」

やんややんや、ワイワイ、ゴブゴブ……斯くしてゴ布林たちの「会議」は踊り、しかして、めつきり進まなかった。暇なゴ布林たちが全員出席する「直接民主制」の会議では、もはや増えすぎたゴ布林たちの統制をとれなくなってきたのだ。

正体不明の「脅威」に対し、右往左往するしかできないゴ布林たち。そうこうしている間にも、「原始的な生物」は「リトルシャイア」へと真っ直ぐ接近してくる。何が目的なのかは皆目検討も付かないが、とてとてピンチだ！

とりあえずゴ布林たちは、有能そうなゴ布林たち何名かを代表として選考し、その他のゴ布林たちはカレらに採択を託して仕事に戻っていった。「ゴ布林賢学者議会」発足の瞬間である。

「この足取り この進み方 明確な「意思」を感じるゴブ！ 「原始的な生物」は 「意思」

を持つてるゴブ！」

「そんなもん 見れば分かるゴブ！ 「意思」を持つていれればどうだというのだ？」

「意思を持つてるなら 会話が可能なはずゴブ！ コミュニケーションが可能なはずゴブ！ それならお話して 丁寧にお願い願うゴブ！」

「しかし 会話が通じるからといって 友好的とは限らないゴブ 下手に刺激すると

「前回」のようなことになりかねないことも 無きにしもあらずゴブ！」

「然り然り だからといって ムザムザ侵入を許すのも 許されないゴブ ほっとくわけにはいかないんだゴブ」

「誰かが代表して 接触するしかないゴブ！ 成人していて 知性が高く 経験豊富で

実力があり 頼りがいのあるゴブリンがいいと思うゴブ！」

「ウムウム 全くもって同意見だゴブ ならばしかして そんなうってつけのゴブリンは 誰ゴブか？」

会議中のゴブリンの目が、あるゴブリンに集中した。成人していて、知性が高く、経験豊富で、実力があり 頼りがいのあるゴブリン。そんなゴブリンは一人しかいない。そう何を隠そう、我らがアルデニクスである！

「シユココオ……シユココオ……」

あゝ もしかして もしかして アルデニクスのことか？？」

冒険者というのは、往々にして厄介事をふられる運命にある。アルデニクスが尊敬する世界一偉大な冒険者も、世界一多忙な苦労人なのだ。ゴ布林族の冒険者であるアルデニクスもまた、その運命にあったのかもしれない。

斯くして矢面に立たされたアルデニクスは、筋肉モリモリマッチョマンの原始的な生物と、単身対峙することになるのである。

*

*

森をドシンドシンと揺るがし、ズンズン前進していた「原始的な生物」こと「オーガ長」の目の前に、アルデニクスはポツンとやってきた。その様子は、治安システムを通じて、「ゴ布林賢学者議会」にモニタリングされている。

「シユココオ……シユココオ……」

やあやあやあ 我こそはゴルダナルのゴ布林族「アルデニクス」

そこなるここなる 旅人よ 一体全体 この森になんのようでゴブかく？」

アルデニクスはとりあえず、もつとも普及しているであろう「共通語」で話しかけてみた。「前回」のヒトはこれで会話が成立したし、よしんば通じなくても、他の言語を試してみればいいだけの話である。

幸か不幸か言葉は通じたらしく、ムキムキの原始的な生物は足を止め、アルデニクスをギロリと睨みつけると、地の底から響くような声で応えた。

「フンツ、何者かと思えば、小鬼風情か……生意気にも言語を解すようだが、片言とは……相も変わらず下劣な種族よ。なにゆえ、そのような奇つ怪な姿をしている？」

アルデニクスは言われて思った。コイツ、初対面なのにめちゃんこ偉そうゴブ。

「シユココオ……シユココオ……」

どうしてもこうしても オイラはゴ布林族だから マスクを被るの 当然ゴブく
防護服着るの 当たり前ゴブく」

「何をワケの分からんことを……フン、たとえば言葉を得たとしても、所詮は劣等種族ということか……まあいい、オマエがこの森のゴ布林の頭目か？」

オーガ長の質問に、アルデニクスは首をかしげた。

「シユココオ……シユココオ……」

アルデニクス 頭目違う違うく

ゴ布林族 上も下もないく ゴ布林族 みんな平等く

みんな同じで みんなハッピー！」

アルデニクスのゴ布林族への貢献度は、もはや「神」近いレベルでトンデモナイことになっていたが、ゴ布林たち特有の「個」を尊重し、しかしながら「集団」を重視

するという全体主義的な思想のためか、一応それなりに尊敬されてはいるが、あくまでもそれなりでしかなかった。

みんな一緒にみんなイイ！それがゴ布林たちの信条なのだ。

なんとも要領を得ないアルデニクスの返答に、オーガ長はちよつと面倒くさくなつたのか、余計な追求を避けた。スルーしたとも言おう。

「……まあいいだろう。我こそは「魔神将」よりこの地に遣われた「オーガ長」である！これからオマエたちは「魔神王」さまの名の下に、この「土地」を明け渡し、我らが「混沌の軍勢」の「軍門」に下るのだ！」

ドーン！ という効果音でも聞こえてきそうな堂々たる態度で、オーガ長はそう要求を突きつけてきた。

それに対しアルデニクスは「えっ!?」と思った。「ゴ布林賢学者議会」のゴ布林たちも、同じく「えっ!?」と思った。ちよつと良く意味が分からない。土地を明け渡して軍門に下れて？ ウムムムム、なぜ唐突にそんな要求を……もしかしてひよつとすると、オーガ長さんは別の言葉を喋っているのかな？

ゴ布林たちは急いでオーガ長の真意を探ろうとした。その間、アルデニクスとオーガ長には、気まずい沈黙が流れる。しかし、そう思ったのはゴ布林たちだけだったのか、オーガ長は愉快そうに笑いながら続けた。

「ガツハツハツハ！ フム、驚きすぎて言葉もでないか！ まあ、当然のことだろう。矮小なるキサマら小鬼には、身に余るほどの光榮だろうからな！」

何を勘違いしてしまったのか、アルデニクスの反応を見て、そんなことを言うオーガ長。

アルデニクスはなんだか、とととて申し訳ない気分になってしまった。「混沌の軍勢」かなんだか知らないが、土地を明け渡すワケにもいかないし、軍門に下るつもりもない。それはアルデニクスだけでなく、賢学者議会のゴ布林たちも同意見であった。

「シユココオ……シユココオ……」

あく、申し訳ないけどオーガ長さん あなたの提案 受け入れられないゴブ

アルデニクスたち 丁重にお断りするゴブ

アルデニクスの返答に、オーガ長は「はあ？」という顔をした。ちよつと何言ってるかわからない。両者とも、上手く意思疎通が取れていないようだ。異文化コミュニケーションの難しいところである。

「アルデニクスたち 土地は明け渡せぬし オマエたちの軍門にも下らない」

我々は争いを好まない、争いはなにも生まれぬ、申し訳ないけど お帰り願うゴブ

想定外の返答に、オーガ長は狼狽える。まさかゴ布林に断られるだなんて、思っ

もいなかっただの。このままでは、魔神将から直々に授かった任務に失敗してしまう。

「な、なにを言っているのだ!? 我らが「魔神王」さまが復活なされたのだぞ!? いまこそ団結し、祈る者どもに復讐する時ではないか!」

そう激昂するオーガ長。混沌より生まれしモノのクセに、なに秩序だったこと言ってるんだとお冠の様子。

「でもでも、我らゴブリン「魔神王」など知らぬ、復讐する時」も知らぬ、

知らぬなら、戦うわけにはいかぬ、手を貸すわけにはいかぬ、「無益」な争いほど「無益」なモノはない、

これには流石のオーガ長もカチンときた。いくら同族の中でも話がわかるヤツと評判のカレでも、限度というものがあるのだ。この様にゴブリン族はいつも一言多いのが、玉に瑕だった。

「無益!? 無益だど!? 我らが祈らぬ者の「悲願」を「無益」だと言うのか!? 創世以来虐げられ続けてきた我らが「悲願」を、キサマは「無益」だと言うのか!? この、この……「混沌」の風上にも置けぬグズめッ!」

そんな怒号とともにブオンつという風切り音が鳴り、オーガ長の豪腕から怒りの斬撃が繰り出される。

オーガの中でも我慢強いと噂のオーガ長だが、なんやかんやいつてオーガらしく短気

なのだ。こうとなつては混沌流交渉術の出番である。つまりは話を通じぬとなれば
ブツ殺すまで。実にシンプルな発想だったが、小鬼風情には効果てきめんなはずだっ
た。二、三匹目ぬつ殺せば、大人しく従うだろう。いつもと同じパターンだ。

オーガ長の人知を超えた剛力から放たれた一撃は、見事なまでの正確さでアルデニク
スに撃ち込まれる。あわやアルデニクスの命は風前の灯火！　オーガ長の大斧は吸い
込まれるようにアルデニクスに向かい、そして、ガキインつと止まった。

「な、なんだつと!？」

オーガ長が狼狽え声を上げる。なんと信じられないことに、オーガ長の一撃は、身長
10分の1にも満たない矮小なゴブリンに、完璧に防がれてしまったのだ!

「ば、馬鹿な!?　我が一撃がこんな雑魚に……!?!」

動揺するオーガ長に対し、迫真のマスク顔でアルデニクスが自信満々に宣言してみせ
る。

「新型防護服ゴブ!」　ドドーン!

流石はゴ布林製のNEW防護服である。オーガ長の攻撃に傷一つ付いていない。
しかし、実際に無傷なのはそれだけが理由ではなかった。

確かに防護服の性能は飛躍的に向上していたが、体格的にも質量的にも、こんな理不
尽な現象が起きるはずないのだ。しかし、現実には起きてしまっている。これは、明ら

かにこの世界の法則ルールから逸脱した現象だった。大事なことなのでもう一度言うが、この現象は明らかにこの世界の法則ルールから逸脱している！

「ええい、小癩なツ！ ならばこれならどうだツ!? カリブ火ンクルス…クレス成クント長
……」

オーガ長の掌に、暴虐的とも言える火球が収束する。呪文を紡ぐほどにそれは巨大になっていき、最終的にはオーガ長を超えるほどの大きさになっていた。「キャストタイム」はそこそこ長かったので隙だらけだったが、アルデニクスは何もしなかった。お約束は守る主義なのだ。

「食らうがいいッ!! ……ヤク投タツ!!」

放たれる火球。燃え盛る炎。衝撃で木々はなぎ倒され、灰になる。そしてその中心でアルデニクスは、平然とその場に立っていた。

「新型防護服ゴブ!!」 ドドーン!

迫真のマスク顔で、アルデニクスはそう自信満々に宣言してみた。流石はおニューの防護服である。ビクともしていない。だが、お察しのとおり、無傷な理由はそれだけじゃなかった!

アルデニクスは何処にでもいる普通のゴ布林だが、言わずもがな、エオルゼア出身のゴ布林だ。この「世界」とはまた別の、異なる「理」から来た異世界ゴ布林なの

である！

アルデニクスは賽を振らない。そもそも「賽を振る」という概念すらない。いちおう「ゴブリダイス」とか「random」という概念はあるが、カレを支配するのは緻密に計算された「数値」であり、綿密に処理された「数式」プログラムだった。

要するに「世界観」が違うのだ。アルデニクスの「世界」には「レベル」があり、「ステータス」があり、「パラメータ」があり、「プログラム」があり、それが全てを決定し、全てを司っていた。この「世界」にも力量レベルという「言葉」はあるが、それとは違い、純然たる性能規格を決定づけるという意味での「レベル」を、アルデニクスは持っていたのだ。

アルデニクスの「レベル」は、アルデニクスも詳しくは知らない。それは特殊な能力を有した人物しか「視る」ことができない、不可視のモノだからだ。しかし、その程度を推し量ることはできる。

アルデニクスは冒険者だ。カレが尊敬する「あの冒険者」と比肩するほどではないが、それなりに熟練したベテラン冒険者だった。少なくとも「ヤーンの大穴」まで単独で踏破し、その土地の「Bランクモブ」とタイマン張れるくらいには、一端の冒険者だった。

つまりオーガ長がそれくらい力量を持っていなければ、最悪の場合、アルデニクスには一切の攻撃が通用しないなんてことも有り得るのだ。そしてこの「現象」はつまり、

多くは語らないが、〃そういうこと〃なのである！

「そんな馬鹿な……我が秘術が、脆弱な小鬼如きに……」

そうこう言っている間に、アルデニクスはオーガ長に飛びかかり、手に持つ何の変哲もない「ゴルダナルソード」で、オーガ長の頭をゴチンつと叩いた。

これまで受けたこともない強烈な衝撃を受け、オーガ長はあっさり気絶した。

* * *

「シユコオ……シユコオ……」

こちらアルデニクス　こちらアルデニクスゴブ

侵入者の無力化に成功したゴブ　繰り返す　侵入者の無力化に成功したゴブ

次の判断を仰ぐゴブ

『ジゴ……ジゴジゴ……ジゴ……』

こちら「賢学者議会」ゴブ

侵入者は「法典」従い　〃アレ〃の試験に用いることに決定したゴブ　闘技場に連

れて帰ってくるゴブ

「シユコオ……シユコオ……」

了解したゴブ〜」

通信を切り、アルデニクスは気絶したオーガ長を見た。

遂にこの時が来てしまった。あれを再現した「兵器」が、遂に起動する時が来てしまった。願わくば、ずっと待機状態であるのが最善だったが、カレの中を流れる忌まわしき血と知識が、それを許さなかったようだ。

「シユココオ……シユココオ……」

ハア……まったく因果なものゴブ……」

そしてアルデニクスは再びオーガ長を見た。 “連れて帰ってくる” ってどうやって

!?

*

*

オーガ長が目を覚ました時、そこは暗闇に包まれる大広間だった。どうやら四方を壁で囲まれているらしい。鋼鉄で出来た広間。夜目がきくオーガ長だからこそ、それが分かった。

鉄と油の匂いがある。歯車が回る音がある。何かが蠢く気配がある。

手を弄ると、すぐ近くにオーガ長の戦斧があった。虚ろな思考でそれを掴む。激痛で

目が眩む。頭を押さえつつオーガ長は立ち上がった。

「グッ……ガア……ここ、ここは……？」

返答は言葉ではなく強烈な「光」だった。

ガンガンガンつと照明が灯る。照らし出された場所にいたのは、あの奇つ怪な姿をした小鬼たち。観客席と思われる場所に、うじやうじやといる。

みなを代表して「剣闘マスク」を被った剣闘ゴ布林が進み出て、高らかに宣言した。
「シュココ……シュココ……」

これより それより 決闘の開始ゴブ！

オーガ長さん！ オマエさんは 十四の罪に問われ そして厳正な審判の結果 有罪となった！

主な罪状は「侵入罪」「暴行罪」「侮辱罪」でゴブ！

本来であれば オシオキ二十八日の刑に処されるところゴブが 侵入者であるオーガ長さんには 特別な刑が用意してあるゴブ！ ずばりは「決闘刑」でゴブ！

「な、なにを……なにを言っているのだ？ ここは何処だ!？」

オーガ長の質問に、剣闘ゴ布林は律儀に答えた。

「ここは 我らが彼らが ゴルデイオン闘技場でゴブ！

ゴルダナルにしようと思つたのに スペルを間違えてそうなつた場所ゴブ！」

ええーそれは言わないお約束だったのにー!? 何処かのゴブリンがそう悲鳴をあげる。

「シユココオ……シユココオ……」

オーガ長さんにはこれから ここで我らが「新兵器」の性能テストに 付き合ってもらうゴブ!

見事 勝利することができたならば お家に帰してあげるゴブ!

もし勝てなかつたら 勝てるまで頑張るゴブ!

ノリノリでそう宣言する剣闘ゴブリン。矮小な小鬼どもにそんなことを言われ、オーガ長は激怒しそうになったが、なんとか堪え、冷静さを保った。

コイツらは偶然であつたとしても、オーガ長の攻撃を尽く防ぎ、一撃で意識を奪つたゴブリンどもだ。見下すことはあれど、侮ることはしてはいけない。動物的本能から、オーガ長はそう判断した。

「イイだろう! 我は「魔神王」に連なりしオーガの長! 人を喰らい、人を糧とする不滅の化物! オーガの中のオーガ! 我に挑むと言うのなら、その証を示して見せろツ!!」

なんとという痺れる口上だろうか。こんなにカッコいい前口上を、ゴブリンたちは聞いたことがなかった。後々の参考にするために、書記ゴブリンたちはオーガ長の台詞を一

言一句あますことなく記録する。ゴ布林たちの熱狂は最高潮に達していた。

「シユココオ……シユココオ……」

それでは 決闘開始でゴブ！ ポチツとな」

剣闘ゴ布林がスイツチを押すと、何処からか大音量のBGMが流れてきて、高らかにゴ布林たちが歌い出す。

理性という平和を探し求める 平和なき時代のゴ布林たち

信じ続ける理由 眠れる獣を目覚めさせる！

歌に合わせるように対面の扉がせり上がり、奥から「ヒトの形をした機械」がガシャンガシャンと歩いてくる。人型防衛兵器「パンツァードール」。試作機「ファウスト」のご登場である。

ファウストの登場に、観客ゴ布林たちは盛り盛りに盛り上がった。キヤーファウスト先生こつち向いて！ かましたれ先生！ 負けるな先生！ やつたれ先生！

当然、ファウストはただの兵器なので、ゴ布林たちの歓声に答えるはずもなく、ただ静かに沈黙し、佇むのみである。

オーガ長は相対した「兵器」を注意深く観察した。

全身を緑色の装甲で覆われ、右腕には螺旋状の槍を持っている。後ろの首元には塔のような突起物があり、その下には尻尾のようなものが生えていた。造形はヒトの形に近

い。頭身はオーガ長の半分にも満たないだろうか。見たところジツと静止し、動き出す気配はない。

まるで「かかってこい」つと待ち構えているようだった。

この運命を手放せ お前は夢幻に囚われた

夢の中で足踏み続け 前に進む気配もなく 後ろに戻る気配もない

ゴブリンたちの耳障りな歌が、オーガ長の鼓膜を震わす。異様な雰囲気にもオーガ長は僅かに尻込みした。かいたこともない汗が、額から流れ落ちる。ゴブリンたちの歌はまだ続いていた。

そう 我らが仕える「騒がしき世」がバネの如く張る

一歩後退！

カツと目を見開き、オーガ長は決意した。

一撃だ！ 最初の一撃に全てを懸ける！ 一つの太刀！ 全身全霊を籠めた一撃で、

彼の者を粉碎する！

「カリフンクス……クレスレント……」

真に力のある言葉を紡ぎ、オーガ長は現実を捻じ曲げる。

「マークシムス……オッフエーロツ!!」

オーガ長の唱えた業火の炎が、戦斧へと宿る。もはや地獄の火炎と言っても過言では

ああああああああああああああああああああああああああああ!

おそらくオーガ長は、負けたことも、死んだことも認識できなかったのだろう。鬼の如き形相のまま息絶えるオーガ長。まさかまさかの瞬殺であった。胴体部分には大きな孔が穿たれ、上半身と下半身がお別れしそうになっている。決闘はもう終わってしまったので、当然、BGMも止まってしまっていた。

死んでしまったオーガ長に、ゴ布林たちは嘆いた。そりやあもうとてとて嘆いた。

なぜそんなにも嘆いたのかって……まだ、歌はサビまで行ってなかったのだ。まだホンの触り程度だったのだ。なのに、もう終わってしまった。これからが盛り上がりどころだったというのに。せっかく十分を超える大作を作ったというのに……ゴ布林たちは激しく嘆いた。

ゴ布林たちが悲しみにくれる中、一仕事終えたファウストは、再び開始位置に戻り、静かに待機していた。流石、生粋の仕事人である。

斯くして「混沌オの尖兵ガ」はゴ布林たちの前に倒れ、ゴルダナル大森林のゴ布林たちは、「混沌」に与しない「秩序の中の混沌」として、少しづつ、少しづつだが、「祈らぬ者」たちに認識されていくのであった。

喋るサカナと喋るゴ布林

オーガ長の襲撃以降、ゴルダナルのゴ布林たちはちよいちよ「混沌の軍勢」の攻撃を受けるようになっていた。

その尽くを返り討ちにしてみせるゴ布林たち。遂に起動した「機工兵器」たちは八面六臂の活躍で、果てしなく広がる大森林と長く険しい山脈による天然要塞は、リトルシャイアを難攻不落の都としていたのだ。

念願だった平和を手にしたゴ布林たち。みな思い思いのまま好きな仕事をし、好きな趣味に没頭した。世は正に太平の時代なのである！

釣り師である「フィツシユチックス」も、今日も今日とてお気に入りの穴場スポットで、大好きな釣りに興じていた。

ゆつくりのほほんと流れる時間。何か釣ればとつてもハッピー。なんにも釣れなくても、まあいいじゃないかそこそこハッピー。ゴ布林の中には何かと効率重視なゴ布林もいるけれど、フィツシユチックスはそうじゃなかったし、そんなゴ布林もそこそこ多かった。

流れ行くせせらぎをポケエーつと見つめるフィツシユチックス。あらあら今日の釣

果はお生憎さまの「ボウズ」のよう。まあそれもいいじゃないかご愛嬌。こんな日にこそステキなことがあるもんさ。

そんなことを思っていたからか、フィッシュチックスの釣り竿にピクピクと反応があった。

「シュココココ!?!」

遂にきたゴブ? きちやつたゴブ!?!」

グイグイと引つ張られる釣り竿。ゴ布林製の超高性能ゴブリフィッシングロッドが大きくしなる。これまでにない大きな手応え。これはもしかしてひよつとして、きちやつたかも!?!

思わずフィッシュチックスは立ち上がり、グイツと釣り竿を引つ張った。

「シュココココ!」

このアタリ この手応え 間違いないゴブ! 「ヌシ」ゴブ! 遂に来たんだゴブ!」
釣りゴ布林になって幾星霜。実際にどれだけ経ったのかは忘れちゃったけど、それなりに長かったことだけは確かだ。その釣りゴブ生の中でも随一のアタリ。これは間違いなく「ヌシ」が食い付いた感じだった。

フィッシュチックスはロッドを引き引き、リールを巻き巻き……時に大きく、時に優しく、引いて緩めてまた引つ張って、前へ後ろへ闘いを繰り広げる。

よほど立派な「ヌシ」なのだろう。フィツシユチツクススの巧みな釣り技術にも関わらず、相手はビクともしない。かなりの大物なのは疑いようもなかった。フィツシユチツクスのそれなりに長い経験からして、捉えた「獲物」は「人間並」のビッグサイズに違いない。

「シユココオ……シユココオ……」

中々に手強い相手ゴブ……でもでも フィツシユチツクスだつて負けてないゴブ！」
いかに「獲物」が強敵であろうとも、フィツシユチツクスだつて百戦錬磨の古強釣り師だ。カレに釣り上げられない「獲物」はいないし、退いてやる気もこれっぽっちもなかった。

しかし相手も相手でヌシ的な意地があるようで、いかなフィツシユチツクスでも長期戦を強いられた。攻めて守って引いて緩めて。気付けば相当な時間が流れ、もはや友情すら感じられるようになってきた頃——遂に決着の時を訪れた！

「シユコココココ！」

今だゴブ！ フィイイイイッシユツツツ！！」

渾身の力を振り絞り、フィツシユチツクスは遂に「ヌシ」を釣り上げた。バシャーンと水音を立てて陸上げさせられる「ヌシ」。フィツシユチツクスは、その「強敵と書いて友」とも呼ぶべき釣果をマジマジと見つめた。

それは、とつても珍しいサカナだった。

鱗はなく、尾ヒレも背ヒレも付いていない。胴体部分からは「手」と「足」のようなものが伸びていて、頭部には「毛」のようなものが生えていた。サカナのクセに「鎧」のようなものまで着ていて、たいそう立派な「剣」も持っている。まるでサカナというよりも「ニンゲン」みたいだった。

「シユココオ……シユココオ……」

これまた とてと珍らしいサカナゴブゝ こんなサカナ初めて見たゴブゝ

これまた 煮ても焼いても うまそうじやないサカナゴブゝ

フィツシユチツクスは釣り上げた「ヌシ」を見て、そんな感想を抱いた。とりあえず、釣り上げた証として「魚拓」を取ろうとしたら、釣り上げた「獲物」がピクピク震え、更にはうめき声まであげたではないか！

「う……ううう、ん……」

フィツシユチツクスはびつくらこいて一步飛び退いた。コイツ喋ったゴブ！ 喋るサカナゴブ！

まさに未知との遭遇。まさか喋るサカナを釣り上げてしまうとは、なんとということか！ フィツシユチツクスは自分の才能が恐ろしくなった。まさか喋るサカナを釣り上げてしまうだなんて、前代未聞の偉業であった！

これでフィツシユチックスの「名」は、栄光あるゴ布林族の歴史の中でも燦々と輝く偉ゴ布林として、未来永劫語り継がれることにウンヌンカンヌン——。

「うううん……あ、あれ？　ここは？」

そうこうしていると、そんなことを呟き始めた喋るサカナ。顔を上げ、辺りを見渡す。これはイカン！　せつかく釣り上げたサカナに、逃げられてしまつてはかなわない。陸を走るサカナなんて聞いたこともないが、手と足みたいのが生えてることだし、そんなことも仕出かすかもしれない。何せ相手は「ヌシ」なのだ。あり得ない話じゃない。

「んん？　あれ？　あなたはヘブシツ！」

瞬間、脳天を直撃する「ゴ布林ハンマー」。喋るサカナは再び目を回し、大きなタンコブを作つてもう一度ぶつ倒れる。ふう、危なかつた危なかつた。危うく取り逃がすところだったゴブ。

さあこれでひとまず一安心。あとは魚拓を取つて、図鑑に残して……そうだ！　せつかくだからリトルシャイアのみんなにも見せてあげよう！　こんなニンゲンみたいな喋るサカナ、きつとビックリするに決まつてるゴブ！

「シユコオ……シユコオ……」

そうと決まれば　早速取りかかるゴブ　ゴブゴブ　ン

そんなわけでフィツシユチックスは喋るサカナを「えいや」と担ぎ上げると、みな

に見せびらかすためにリトルシャイアへ急いだ。そばに落ちていた、それはもう見事な大剣もモチロン忘れずに……。

*

*

フィツシユチツクスが喋るサカナを持ち帰ると、リトルシャイアはちよつとした騒動になった。なにになんなの何を釣り上げたの？ うわまるでニンゲンみたいなサカナゴブ！ ちよつと なんてモノ釣って来ちやったのよ!? スゲーマジでニンゲンそっくりゴブ！

ザワザワと騒乱に包まれるリトルシャイア。フィツシユチツクスは一躍時のゴブリン。ワイワイゴブゴブとみんな集まってきて、喋る奇妙なサカナに夢中になった。

はああん……それにしても見れば見るほどニンゲンそっくりな喋るサカナゴブね。

しかし、みんなでワイワイ盛り上がっている時、とあるゴ布林がとある勘違いに気が付いた。ありやりやこれはもしかして……とあるゴ布林がみんなの前でその勘違いを披露する。

「シユコオ……シユコオ……」

みんなみんな 勘違いしてるゴブ

喋るサカナと言うけれど、ゴブたちコイツが喋つてるとこ、見たことないゴブ！

だから、コイツは「喋るサカナ」じゃなくて、「喋らないサカナ」ゴブ！」

えっ？ えっ？ あっ！ 確かに言われてみれば、そうだそうだその通り。コイツさつきから喋つてないし、喋る気配もない。ならばコイツは「喋るサカナ」じゃなくて「喋らないサカナ」ゴブ！ これは危ない危ない騙されるとこだった。

なんという思い違いをしていたのだろう。しかし、ゴ布林たちがそう思いかけた瞬間、なんとビックリ喋らないサカナが「う……うう、ん」と喋つたではないか！

アツコイツやつぱり「喋るサカナ」ゴブ！ 「喋らないサカナ」は「喋るサカナ」だったゴブ！ うわあ、なんという驚きの大発見！ よもや「喋るサカナ」が実在していたなんて、前代未聞のビックリ仰天！

そんな世紀の大発見である「喋るサカナ」を、見事釣り上げたのフィツシュチックスは、みんなに「スゲースゲー」と讃えられ褒めちぎられる。その隙について、何事も研究熱心なマッドマツデイクスが「喋るサカナ」に近づいてみると、如何にして「喋るサカナ」が喋っているのかを調べようとした。

「ううう……うーん……」

なるほどなるほど、確かに確かに空耳じゃなくて、バツチリしつかり喋っている。エラ呼吸じゃなくて肺呼吸。胴体からは「手足」が生えていて、頭部にも「毛」が生えて

いた。まるでニンゲンのように「鎧」を着て、これはもしかしてこのサカナの「鱗」かなにかかな？

なんともなんとも摩訶不思議な「喋るサカナ」……喋るサカナ、喋るサカナ、喋るサカナ……うん？ 喋る……サカナ？

「シュココオ……シュココオ……」

コ コイツ ま まさか!？」

それは、人体にとつても詳しいマッドマツデイクスだからこそ、気づけた事なのかもしれない。コイツはもしかしてひよつとすると、ほんとは「喋るサカナ」じゃなくて……。

「ううううん？ あれ？ 大きな目に、大きな鼻……はっ！ ひよつとして宇宙じでブシャ!？」

瞬間、脳天を直撃する「ゴ布林ハンマー」。喋るサカナ（仮）は三度目みたびを回し、大きなタンコブを二つも作ってぶつ倒れる。

思わずぶつ叩いてしまったマッドマツデイクスは、衝撃のあまり叫んだ。

「ジュココオ……ジュココオ……」

コイツ 「喋るサカナ」じゃなくて 「喋るニンゲン」ゴブ!!

喋るサカナは 喋るニンゲンだったゴブウウウ!!」

えええええ!?! これはまさかまさかの新事実! 喋るニンゲンっぽいサカナは、ホントのところは喋るサカナじゃなくて、喋るニンゲンだったのだ! ええええ、そんなバナナ!

ついに判明してしまった真実に、ゴ布林たちは大恐慌に陥った。ギャーニンゲンゴブ! きつとマスクを取りに来たのよ! うわ! 逃げろマスクを取られるぞ! 警備兵を呼べー! きゃー助けてファウスト先生!

大混乱に包まれるリトルシャイア。直ぐ様「賢学者議会」が招集され、あれやこれや、そうじゃないこうじゃないと話し合いが行われる。

どうすんのおよ ニンゲンなんて拾ってきて! そんなあ まさかニンゲンだとは思わなかったんだゴブ! でも よくよく見てみれば どっからどう見てもニンゲンじゃない! でもでも みんなも勘違いしてたゴブ! それは確かにその通り。

なんやかんや色々議論され、ああでもないこうでもない話し合われたが、結局決まったのは「穏便にお帰り願う」ということだった。

相手はフィッシュチックスが拾ってきた、一見なんの変哲もない「ニンゲン」さん。現時点では「侵入者」であるか「迷い人」なのか判断が付かない。ならば、乱暴に扱うのは非文明的であると言えた。

とりあえずゴ布林たちは「喋るニンゲン」を「マッドマッドデイクス研究所」に搬送

すると、容態を見た。

「シユココオ……シユココオ……」

どうやら 頭部に「強い衝撃」を受けたようでゴブ

でも バイタルに問題はないゴブから そのうち目覚めるゴブ」

「強い衝撃」を与えた張本人のくせに、素知らぬマスクでマッドマツディクスが言った。

さて、そうなれば「誰が」この「喋るニンゲン」にお帰り願うのかという話になる。なにせ相手は「あのニンゲン」さん。「混沌の軍勢」よりかはマシであるとはいえ、凶暴で野蛮な可能性は五分五分であった。ゴブゴブ、ゴ布林だけに、ゴブゴブ。

しかも「喋るニンゲン」はどうも「赤毛」のようで、過去のデーターを参考にするに凶暴な可能性が飛躍的に高まった。ゴ布林たちの実体験では「赤毛のニンゲン」は凶暴で、「金髪のニンゲン」は温厚なのだ。サンプルが二種類しかないので一概には言えないが、ゴ布林たちには慎重な対応が迫られた。

「シユココオ……シユココオ……」

誰かが代表して 交渉するのがいいと思うゴブ！ 成人していて 知性が高く 経験豊富で 実力があり 頼りがいのあるゴ布林がいいと思うゴブ！

というわけで矢面に立つことになったのはアルデニクスである。拾い主である

フィツシュチュツクスと共に、喋るニンゲンと対面する。

「う、ううくん……あ、あれ？　ここは？」

なんだか前にも同じようなことを言ったような？　そんなことを思いながら喋るニンゲンは目を覚ました。

ゴブリンたちに緊張が走る。空気が3℃くらい下がった気がしたが、観測によると気のせいだった。下がったのは2℃である。なんとということでしょう。万が一の時に対処するため、対ニンゲン用の薬物なども準備させてあるが、どう転ぶかはゴブリンにも分からない。

「シュココオ……シュココオ……」

ようやくお目覚めゴブ、ここはゴブたちの都「リトルシャイア」

オマエさんは　フィツシュチュツクスリバーで川流れしていた時　フィツシュチュツクスにフィツシュユされ　釣り上げられたんだゴブ」

「……ううう、んん？　ええつと？」

唐突にそんなこと言われても……そう疑問符を浮かべるニンゲン。フィツシュチュツクスがフィツシュチュツクスでフィツシュチュツクスがどうしたって？　さてさて対するアルデニクスたちは、そんな様子を見せるニンゲンにホッと一息ついていた。

「喋るニンゲン」さんは、初手でいきなり斬りかかってこないところからして、そこそこ

温厚なタイプのニンゲンのようだ。とはいえまだまだ安心できない。アルデニクスたちはさらなるコミュニケーションを試みるため、会話を続ける。

まず切り出したのはフィツシユチッククスだ。

「シユココオ……シユココオ……」

オマエさん このフィツシユチッククスが釣り上げたんだゴブ〜

それはそれは とてとて大変だったゴブ〜

そのままリリースするのは勿体なかったから 持って帰ってきたんだゴブ〜

フィツシユチッククスの発言にアルデニクスが「えっ!? そうだったの?」と振り返える。それにフィツシユチッククスが「任せる!」といったマスク顔をした。アルデニクスが頷く。しかし、フィツシユチッククスはノリでそうしただけで、実はまったくのノープランだった。

「そ、それはどうもありがとう? ああっとキミたちは……」

「ゴブはフィツシユチッククス! そしてこっちのカレは アルデニクスゴブ!」

「どうも はじめまして こんにちはゴブ」

「え、あ、うん、どうもはじめまして……えっと、ボクは見習い冒険者です」

そう自己紹介をする見習い冒険者。胸部はべったんこだが、マッドマツデイクスの診断によればニンゲンの「メス」らしかった。前の赤毛と同じタイプである。でもでも金

髪のヒトとも同じタイプだったので、見習い冒険者の危険性に変化はなかった。

「シユココオ……シユココオ……」

それにしてもオマエさん どうしてこうして 川流れなんかしていた？

趣味ゴブか？ それとも噂に聞く「カツパ」ゴブか？ 教えてみるみる」

アルデニクスがそう尋ねる。注意深く観察し、返答を待った。回答によつては、いつでも動き出せるよう身構える。なんだかイヤな予感がするゴブ。緊張の一瞬だった。

見習い冒険者が「うんうん」つと頭を捻ると、記憶を思い出しながら答える。

「ええつと、確か……ゴブリンの親玉つばいのを追いかけてた時に、うっかり道に迷っちゃつてね。なんとかその親玉は倒したんだけど、帰る途中、「変な人形」みたいのに遭遇しちゃつて、それで戦闘になつただけ、そいつがそれはもうトンデモなく強くてさ……んで、その戦闘中にうっかり足を踏み外しちゃつて、そのとき頭を打つて川に落つこちちやつたみたい……あつ！ 二人とも、助けてくれてありがとうね！」

そう見習い冒険者は頭を擦りながら言った。そして「ボクだつて単独で依頼達成くらいできるんだつて豪語しちゃつたけど、失敗しちゃつたなあ……とブツブツ呟く。頭にはそれはもう大きなタンコブが二つもできていて、コイツのせいで気絶してしまったのは、間違いないようだった。

すっごいデカイタンコブになつてる——そんなことを見習い冒険者が呑気に思つて

いた時、居合わせていたゴブリンたちには戦慄が走っていた。

アルデニクスたちは動揺を悟られないよう冷静なマスク顔を演出したが、果たして効果はあったかどうか……アルデニクスは直ぐ様バックにいるゴブリンたちに指示を出し、「パンツアードール」たちに何か異常がないかどうか確認させる。

するとなんとということだろうか！ 山間部に配置されていた「ファウスト」の一体が、ポロポロになって半壊しているではないか！ その事実にはゴブリンたちは大慌て。直ぐさま新たな「ファウスト」が派遣されたが、当番だった警備ゴブリンはオシオキ一七日の刑に処された。

「シユココオ……シユココオ……」

よもやファウストと戦って生き残るとは トンデモナイヤツゴブ この見習い冒険者さん ヤバーヤツゴブ」

そうボソボソとアルデニクスは呟いた。

「シユココオ……シユココオ……」

こんなヤバーヤツを釣り上げてしまっただなんて 自分の才能が怖いゴブ」
フィッシュチツクスはお気楽にもそんなことを言ってみせた。

そんなフィッシュチツクスを、アルデニクスはポコンつと叩く。まったくの偶然だったとはいえ、そんなヤバーニンゲンさんを勘違いでリトルシャイアにつれてきちゃった

のは、他でもないフィツシユチッククスなのだ。少しは反省しなさいっとアルデニクスはツッコむ。

さてさてこの見習い冒険者は、どうにも「ファウスト」と戦闘して川に落っこちたらしい。そうであるならば、いちおう「侵入者」として分類されるが、見た感じ「敵意」も「害意」もないようなので、手荒なマネはご法度であった。ゴ布林たちはお互いのマスクを見合わせて頷く。

「シユココオ……シユココオ……」

それにしても とてとて面倒くさいことになったゴブ

フィツシユチッククス トンデモナイヒト 釣り上げちゃったなゴブ」

「でもでも あのままほっとくわけにもいかなかったゴブ！ 仕方がなかったんだゴブ！」

「確かに確かに 起きてしまったコトは このさい仕方がないゴブ

幸い 暴れだす様子もないゴブし このまま丁重にお帰り願うゴブ」

「でもでも しかして どうやって？」

そうコソコソ相談するアルデニクスたちが気になったのか、好奇心旺盛な見習い冒険者がずいっと割り込んできた。

「ねーねー？ なんの話してるの？」

「シユココココ！」

べ 別に なんでもないゴブよ！

別に オマエさんにさつきとお帰り願う相談なんて してないゴブよ！」

「あつ……」

アルデニクスがフィツシユチッククスを見つめる。フィツシユチッククスもアルデニクスを見つめた。見習い冒険者はその様子を気まずい感じで見ていた。

「シユココオ……シユココオ……」

フィツシユチッククス それ言ってしまうては 元も子もないゴブ

穩便にお帰り願いたいヒトの前で お帰り願う相談してると言うのは なんやかんやお帰りいただけないフラグゴブ！」

「シユココココ！」

しまった あらま やっちまったゴブ！

見習い冒険者さん 後生だから 今のは聞かなかったことにしてほしいゴブ！」

「えつ……と、そう言われても、ねえ……」

流し目になり頬をかく見習い冒険者。見ちゃいけないものを見てしまった気分だが、どうやらあまり歓迎されてないということだけは分かった。

でも、なんというんだらうこの感じ……上手く言えないが彼らの様子を見ると、

なんだかこう——不思議とイジメたくなるね！ キラーンと目を輝かせて見習い冒険者は思った。

「うーん……別に聞かなかったことにしてあげてもいいけど、どうしようかなあ。ボクは別にどっちでもいいんだけど、どうしてもって言うなら、考えてあげなくもないかなあ。」

勿体ぶってやや演技過剰になりつつも、見習い冒険者はそう言う。もちろん、チラチラと反応を伺うのも忘れない。

ゴブリンたちはビクウつとなると、見習い冒険者から距離をとってヒソヒソと相談を始めた。オイオイヤベーよどうするよ。どうするたつてどうするゴブ……それがなんだか子供たちの井戸端会議を見ているようで、見習い冒険者はつい吹き出してしまった。

「プツ……冗談だよ冗談！ 別に聞かなかったことにするくらい、そんなに慌てなくても全然やるよ」

「シユココオ……シユココオ……」

本当ゴブか？ 本当に嘘ついてないゴブか？

偽証罪 とてとて重い「罪」ゴブよ、ウソだったらオシオキ一二日の刑ゴブよ」

「うんうん、ついてないついてない……ボクは何も聞きませんでした！ キミたちがボ

クに「お帰り願う相談」をしてるだなんて、一言も聞いておりません！」
両手で耳を塞いで、見習い冒険者はそう言った。

「シュココオ……シュココオ……」

ああ良かったゴブ！ これで一安心ゴブね！

ささアルデニクス 話の続きを進めるでゴブ！

「あゝ なんかもう これでいいのかって感じゴブ」

アルデニクスはちよつぴり悲しくなった。それでもここで立ち止まっては話が進まないの、アルデニクスはレンズを拭いて前進することにした。

「……んで 見習い冒険者さん なに見てるゴブ？」

「いや、聞かなかったことにする」とは言ったけど、「見なかつたことする」とは言っていないあつて……」

「シュココココ！」

だからつて ジロジロ見るのはダメゴブ、ダメダメなんだゴブ」

「えー、でも「聞かなかったことにしてほしいゴブ」とは言われたけど、見ちゃダメなんて言われてないもん！」

「シュココココ！」

確かにその通りおっしゃる通り でもでも それは屁理屈つてやつゴブ」

見習い冒険者さん 屁理屈さんゴブ！ 屁理屈さんは嫌われるゴブ！

ゴ布林たちはプンスカプンスカ。その反応がいちいちコミカルで、見習い冒険者の嗜虐心をますます刺激した。

「分かった、分かったよ。今度は聞きも見もしません！ キミたちに嫌われたくないしね！」

今度は目も耳も閉じてそう言う。ようやく見習い冒険者が引つ込んだことを認めると、ゴ布林たちは再び相談を始めた。ゴブゴブゴフゴ、ああでもないこうでもない。

しかし、幾ばくもしない内に、見習い冒険者からコソツと横槍が入った。

「ねえ、もしかしてキミたちってさ……ゴ布林だったりする？」

サーツと冷や汗が流れるのをアルデニクスは感じた。フィツシユチツクスが何か言おうとしている。オイバカ止める。

「シユココオ……シユココオ……」

ど どうして……そう……思ったゴブ？」

「どうして……さつきからずつと「ゴブゴブ」言ってるし、もしかするとゴ布林なのかなあ？ って」

ガガンー！ ゴ布林たちは予想だにしていなかった発言に慌てふためいた。よもや語尾の「ゴブ」と「ゴ布林」を結びつけるだなんて、コヤツ天才かッ!?

ゴ布林たちは「赤毛のニンゲン」を研究したことによって、人体構造など様々なことを知ったのだが、何より多く学んだのは、「人間はゴ布林のことが嫌い」ということだった。

なのでニンゲンと接触する時は、極力ゴ布林であることを明かさないように細心の注意を払っていたというのに、まさか語尾からバレるだなんて、全くの盲点である。

「ねえ、ねえ、どうなの？ キミたちって、ゴ布林なの？ それとも違うの？」

「シユココオ……シユココオ……」

もしゴ布林なら どうする気ゴブ？」

アルデニクスは訊いた。口調は淡々としていたが、事の次第によつては最悪刺し違える覚悟すらあつた。ニンゲンがゴ布林だと分かつて取る行動は、大凡予想される限りでは碌なもんじゃないからだ。

「んっ？ 別にどうもしないよ。だって、キミたちは「良いゴ布林」じゃん。「悪いゴ布林」なら倒すけど、キミたちはそうじゃないでしょう？」

特に根拠はない。なんとなくそう感じたのだ。ただこういつた勘は、見習い冒険者は良く当たつた。

「それにしてもボク、「喋るゴ布林」なんて初めて見たよ。みんな「喋るゴ布林」は危険だ！」って言ってたけど、やっぱり噂はアテにならないんだね。キミたちには邪悪さ

の欠片も感じないもの」

「シユココオ……シユココオ……」

じゃあ ゴブたちをイジメたり 斬りつけたり マスクを取ったりしないゴブか？
「うんうん、しないしない。というかそんな酷いことした人がいたの？」

ゴ布林たちはその返答を以って、見習い冒険者を「温厚なタイプ of ニンゲン」であると認定した。見習い冒険者は赤毛であるが、金髪の女治癒士と同じタイプである！
そうなりや洗いざらい話してさっさとお帰り願おう！

「シユココオ……シユココオ……」

分かった 分かった 決まりゴブ

見習い冒険者さん「良い人」ゴブ 女治癒士さんと一緒ゴブ

ここは ゴルダナル大森林の「リトルシャイア」ゴブ

我らは彼らは そこに住む「文化ゴ布林」ゴブ

オマエさんは今回 ゴブたちの防衛兵器に捕まって ボコボコにされたんだゴブ

「ふんふん……って、えっ!? 防衛兵器？もしかして「あの人形」って、キミたちのだったの!？」

見習い冒険者の驚きの顔。

「その通りゴブ その節はそれはそれは 大変申し訳なかったんだゴブ」

お詫びに　ゴブたちにできることなら　一つだけ　お願い聞いてあげるゴブ々
 だからだからそのかわり　ゴブたちのお願ひも一つ　聞いて欲しいんだゴブ々」
 ここぞとばかりにアルデニクスはそう言った。

「それは、別にいいけど……何を願ひしたいの？」

見習い冒険者の了承に、アルデニクスは一瞬言葉を置いて続けた。

「シユココオ……シユココオ……」

ゴブたち　静かに暮らしたいんだゴブ々　平和に過ごしたいんだゴブ々

無闇な争いはご遠慮したいんだゴブ々

だから見習い冒険者さん　森を出て　森を出たら　ゴブたちのことは黙ってて欲し

いんだゴブ々」

見習い冒険者はうんつと考えた。「それってお願い二つない？」なんて空気の読めないことは言えない。対するアルデニクスたちゴブリンも、言い淀む見習い冒険者を見て思った。やっぱり見習い冒険者さんは「悪いヒト」だったゴブか!?

しばらく沈黙が続き、ややあつてから見習い冒険者が口を開いた。ドキドキの瞬間である。

「もちろん良いよー！」

あつけらかんといい放つ見習い冒険者。

フウ……おそろくきつと、その瞬間はリトルシャイア中のゴブリンがホつと一息ついた瞬間に違いない。しかし、気を抜くなかれ、見習い冒険者の言葉はまだ続いていたのだ。

「でもその代わり——ボクに「キミたちの人形」と戦わせてくれないかな？」

*

*

ゴルディオオン闘技場では、ひしめくゴブリンたちが盛り上がりつつあった。

こんなに盛り上がりつついるのは「オーガ長」の時以来である。というかこの闘技場が使われたこと自体が、オーガ長以来であった。

今回も今回で「剣闘マスク」を被った「剣闘ゴブリン」が、みんなを代表して進み出て、アナウンスする。

「シュゴオ……シュゴオ……」

見るとイイ 聞くとイイ 騒がしいゴブリンたちよ！ 暇を持て余したゴブリンたちよ！

遂に今日とて 決闘の幕開けでゴブ！

わああああつと歓声をあげるゴブリンたち。久々の決闘にゴブリンたちは湧きに湧

いた。剣闘ゴブリンがアナウンスを続ける。

「本日決闘をするのは、ご存知 我らが門番「ファウスト」先生ツ!!

数多の侵入者を ちぎっては投げちぎっては投げ 我らがゴブリンの発展に 大いに貢献してくれたゴブ!

今回はオーガ長の時とは違い、ファウストは既に開始位置でスタンバイしていた。ファウストに向けて、ゴブリンたちの黄色い声援が注がれる。キャーファウスト先生頑張っ!

「シユゴオ……シユゴオ……

対する挑戦者は この度フィツシユチックスに釣り上げられたニンゲンさん!

通称「喋るサカナ」 見習い冒険者アアアアアアア!!」

バアンつと見習い冒険者にスポットライトが当てられると、彼女に対してもゴブリンたちは惜しみない声援を与えた。やいのやいのやいのやいの。中には野次らしきものも混じっていたが、まあまあそれはご愛嬌。アウエーにしては概ね好印象な声援ばかりである。

なんとも大掛かりな仕掛けに、見習い冒険者は胸を高鳴らせた。

「うん! すっごいワクワクするね!」

それにしても、この見習い冒険者。この雰囲気には飲まれないとは、見習いのクセにか

なり肝が座っているのである。ゴブリンたちはみなスゲーっと関心した。

しかしそれもそのはずである。なぜなら見習い冒険者は、ずっとこんなシチュエーションを密かに望んでいたのだ。それはもう結構シリアスな感じにである。

周りは目を覆うばかりの敵だらけ。味方はなく、孤立無援の状態で、相対するのは勝てるかどうかも分からない比類なき強敵——そんなギリギリの「冒険」を、見習い冒険者はずっと待ち焦がれていたのだ。

「でわでわ 決闘の開始ゴブ〜！ ミュージックスタート！」

冒険者になれば、それが成せると思っていた。でも直ぐにそれが間違いだと気付いた。

彼女はあまりにも、あまりにもあまりにも強すぎたのだ。

冒険者になってから、ずっと感じていた僅かな不満。一党を組んでパーティーいる幼馴染たちにも

も言えなかつた確かな不足。どんなに難しいという依頼をこなしても、どんなに危険だと言われる迷宮に挑んでも、どんなに強いと言われる怪物と戦っても、こんなものか” としか思わなかつた。

理性という平和を探し求める 平和なき時代のゴブリンたち

信じ続ける理由 眠れる獣を目覚めさせる！

決して満たされることのなかつた密かな欲求。ずっと憧れていた「冒険」は、念願だつ

た「冒険者」は、こんなものだったのか。そんなはずはない、そんなことがあつていいはずがない。そう信じて冒険に出かけても、待ち受けているのはいつも落胆と失望だけだった。

見習い冒険者は運命に愛されていた。苦戦はなく、敗北もまた無い。それ故に満たされぬ想いはますます焦がれ、やがて遂には一時的に一党パーティーを離れるまでになる。

この運命を手放せ お前は夢幻に囚われた

夢の中で足踏み続け 前に進む気配もなく 後ろに戻る気配もない

ずっと一緒だった幼馴染たちとの別れ。不安と孤独の中で挑んだ初めての単独任務。それでも心のどこかでこう思っていた。「今回もまた一緒だろう」と。

そう思っていた矢先に出会った真の強敵、真の怪物、真の冒険。その一時はまるで甘美な蜜のように感じられ、満たされぬ想いを満たしてくれた。

でもまだ足りない。まだまだ全然足りてない！

そう 我らが仕える「騒がしき世」がバネの如く張る

一步後退！ 二歩 二歩 二歩 一 二 三！

一回目は中途半端なところで終わってしまった。バカなことに足を踏み外して、中断されてしまったのだ。だからまだまだ満たされていけない。あれくらいじゃ全然足りない。むしろ、知ってしまったからこそ、その渴望は余計に膨れ上がっていた。

消されたすべてに依存するシステムに

お前は流され込んで落ちていく

ゴ布林たちの歌が聞こえる。「あの人形」^{フェアウスト}は目の前にいた。ずっと焦がれていた

「敵」が目の前にいた！

お前がこのシステムから抜け出すために戦うことは

お前がこの場所に居ることを意味する

笑みを浮かべる。胸が高鳴り、頬が紅潮した。まるで恋をしているかのようだ、と柄にもなく思う。でも言われてみればそうなのかもしれない。まさか初恋の相手が人形で、しかもこれから決闘する相手だなんて思ってもいなかったが、まあ、そんな恋もありつつやありだろう。そんな悲劇のヒロインってのに、憧れてた時代もあった。

そう お前を最下位に落とすシステムに

またもや流され込んで落ちてゆく

「だから、これで滾らなくてどうするのさ!!」

音を置き去りにして見習い冒険者は駆けた。渾身の力で愛用の剣を振るう。駆け出しの時に偶然手にした曰く付きの一品だが、これほど手に馴染む剣はなかったし、これほど切れ味のある武器もなかった。

明日には時間が足りない！

始点に戻るためには圧倒的に足りない!

ドゴーン! 剣戟で発生してはいけない轟音を立てて、ファウストを斬りつける。大抵の場合この一撃だけで全てが決着するのだが、ファウストは平然と受けきって、平然と反撃してきた。

それが何よりも嬉しかった。

「そうこなくっちゃ!」

二十二区画の走査完了!

一方向に断片アリ!

繰り返される一撃は何もかもが激烈。まともに喰らえば、いかな見習い冒険者でも必殺であろう。それが雨霞の如く注がれる。これが悪夢と言わずしてなんといいのか。その悪夢の中を、見習い冒険者は駆ける、駆ける、駆ける。

天体のノイズを発見!

精神錯乱の疑いナシ!

何度も潜り抜ける死線。ギリギリの攻防。情け容赦のない刺突を避け、僅かな隙を見出しファウストに一撃を加える。

致命的な一撃ツ!!

しかしファウストはビクともしない。

「いまさらそれくらいじゃビツクリしないよ！ 雷撃ッ！」

ライトニングボルト

詠唱破棄な上に異状なまでの威力で放たれる魔法。人形相手に電撃が有効であると判断したのか、しかし、見習い冒険者の攻撃はこれで終わりじゃなかった。

「まだまだあああッ！ 雷撃！ 雷撃！ 雷撃！ 雷撃！ 雷撃！ 雷撃！」

ライトニングボルト

雷撃 オオオオオオツツツ!!」

怒涛の雷撃魔法六連発！ 理不尽な攻撃の連続に、されどファウストは怯まない。不沈艦の如き勇猛さで、見習い冒険者に迫りくる。

「いいよ！ そうだよ！ そういふのだよッ!!」

思わず歓喜の声をあげる。

クリティカルヒット

異常なまでのタフネス。致命的な一撃と魔法の連発を前提とした、不屈なまでの耐久性。さらにそれらを大前提とした想像を絶する攻撃力。何もかもが規格外。常理から外れまくった異端児。『普通』とは違う、『おかしなモノ』。

エネルギーが徐々に浸透

我が存在との相乗効果

同じだ……。

滴る汗を舐め、見習い冒険者は正眼に構える。ファウストの刺突が彼女の頬を掠めた。全く息つく暇もありはしない。そうだというのに、見習い冒険者は決して笑みを崩

さなかつた。

呼吸が苦しい。心臓がバクバクする。筋肉ははち切れそうで、頭は割れそうだった。手に持つ「愛剣」が異様なまでに重い。それでも容赦なく繰り出される攻撃を紙一重で躲し、愛剣を振るって、見習い冒険者はこれまでにない充実感を得ていた。

不信の一時停止

シナプス伝達まで あと三秒 三 二 一……送信！

同じだ……この人形はボクと同じだ……。

異常、異端、異質、異形……何もかもが常理から外れた化物。この世界の法則システムの外にいるモノ。何もかもが常識外で、何もかも“当たり前”の外にいる真なる怪物。

“ボク”と同じ、“おかしなモノ”。

見習い冒険者と人形の戦闘は、恐ろしいまでに噛み合っていた。戦法が似ているとか、相性が良いとかいうレベルじゃない。存在レベルで……いや世界レベルで両者は噛み合っていた。

そう、つまりは「世界観」がとってもマッチしていたのだ。

言葉を交わさなくても、ともすれば剣を交えなくても、分かる。“この人形”は……いや、“この場所”はボクと同じ“存在”だ。歌うゴブリンたちも、戦いを見守るゴブリンたちも、声援を送るゴブリンたちも、みんなみんな。

それが見習い冒険者は嬉しくて嬉しくてたまらなかった。
一人じやなかった。

楽しい

楽しい……

すごく楽しい……

私はいま、すごく楽しんでる！

「楽しいー！」

生まれて初めて感じた感情を、見習い冒険者は素直に言った。

咆哮、疾走、そして——気付けば、立っていたのは見習い冒険者だけだった。

ゴ布林たちが大歓声をあげる。

荒々しく息を吐いて、見習い冒険者は辺りを見回した。彼女の足元には崩れ落ちた
ファウストが沈黙している。

「勝つ………た？」

息も絶え絶えそう吐き出す。

「その通り！ その通り！ お見事ゴブ！ 見習い冒険者さん！ おおブラボー！ お
おブラボー！」

ゴ布林たちはみんな立ち上がり、見習い冒険者の勝利を讃えた。スゴいぞ！ スゴ

たしてそこから這い出て来たのは、ファウストよりも遥かに大きく、遥かに巨大な、対大型施設用無人兵器「オペレッサー」だった。

そうさつきまでの「ファウスト」はあくまでも「門番」で、「本番」はこれからだったのだ。

「は、はは……さすがに、これは、想定外……」

乾いた笑い声を漏らす。

体はポロポロ。足はガクガク。完全に満身創痍。そもそも万全の状態で勝てるかも分からない相手。敵はもはや巨人を越えて小さな城。それでも見習い冒険者の気力は今だ萎えず、戦意は挫けていなかった。

「ではでは 第二ラウンド開始ゴブ〜!」

始まりのゴングは必要ない。ゴブリンたちが再び歌い始めたと同時に、見習い冒険者はオペレッサーへと駆けていった。

*

*

「ちくしょー、あと少しだったんだけどなあ……」

愛用の大剣を杖のように突き、見習い冒険者はトボトボと田舎道を歩いていた。体中

ボロボロで美しい赤髪もあっちこっちに跳ねている。

あのあと見習い冒険者は「オペレッサー」に敗北した。そりやあ見事に大敗した。文句の一つも出やしない完全敗北だった。

「良いところまでいったと思っただけで、まさか分身が出てくるなんてね……」

ホント、なんでもありかよ。そう見習い冒険者は呟く。

「でも、楽しかった……」

そう、楽しかった。負けたけど、ずっと楽しかった。

あれやこれや考えて、工夫して、頭を使って、体を使って、使えるものはなんでも使って、手持ちのカードを全部フル活用して、それでも勝てなかった戦いは、すつごく楽しかった。

今までの、ただ力任せにゴリ押しする戦いでは得られなかった不思議な快感。ずっと探し求めていた楽しさ。

見習い冒険者はすっかりその魅力に魅了されてしまっていた。

「帰ろう……帰って、もっと強くなろう……」

何者もボクには敵わない——そう勝手に思っていたボクはなんて烏滸がましかつたのだろう。世界は広い。世界は果てしない。冒険は確かにある。あの森のゴブリンたちのように、ボクの知らない「未知」はこの世界にはまだまだある。

「思い切つて一人で出てきて良かった……」

そうじゃなかったら、きつとこんなステキな出会いに巡り合うことは出来なかったであろう。なにかと口うるさい幼馴染たちと一緒にでは、きつとこんな「危険」は冒せなかつただろうから……。

「でも、今回のことで骨身に染みたよ。ボクは弱い。一人ぼっちじゃもつと弱い。だから——」

帰つたらいい一番に謝ろう。『勝手に出ていってごめんなさい』とちゃんと謝ろう。

謝つて、そして今度は三人でゴ布林たちに会いに行こう。あの陽気で元気で能天気なカレらに、また会いに行こう。

「出ていってとも、黙つてても言われたけど、帰つてくるなどは言われなかったからね……あつ、でもそうすると、二人には言えないのか……」

まあ、いいさ。きつとカレらならそれくらい笑つて許してくれるはず。二つあつたお願いを、ボクはちゃんと聞いてあげたのだから、それくらいは許されるはずさ……一人家路を急ぎながら、見習い冒険者はそう思った。

人間のようなゴブリン

一人の冒険者が、街道を歩いている。

薄汚れた鉄兜に革鎧、手には円盾と短剣、腰に雑嚢を携えた、みすぼらしい冒険者だった。

冒険者の名は「ゴブリンスレイヤー」——その名の通り、ゴブリンを殺すことを生業とする冒険者である。

等級は「銀等級」——在野では最高位の等級であり、ゴブリンスレイヤーは、ゴブリン退治だけでその等級にまで上りつめた、ゴブリンゴブリンジャンキー狂いであった。

ゴブリンスレイヤーにとって「ゴブリン」こそが行動原理であり、存在理由だ。彼にはそれ以外に何も無く、それ以外に何も必要なかった。

今は「依頼」を終え「辺境の街」へ帰る途中だ。依頼内容は言うまでもなく「ゴブリン退治」であり、ゴブリンスレイヤーはいつものようにゴブリンを見つけ、戦い、そして殺した。

波乱は何もなかった。ゴブリンは馬鹿だが間抜けではない。ゴブリンスレイヤーは口癖のようにそう言うが、所詮ゴブリンは卑猥で知性の低い下等生物だ。ゴブリンを知

り尽くした彼の敵ではなく、彼は尽くを見つげ出し、尽くを塵殺した。

油断や慢心など欠片も無い。たとえ代わり映えのない「仕事」だとしても、ゴ布林スレイヤーは坦々と仕事をこなし、坦々とゴ布林^{ゴ布林スレイ}殺しをするのみである。

ゴ布林スレイヤーは「辺境の街」に着くと、早速冒険者ギルドに行き、受付嬢に依頼達成の報告をした。

「あ、お帰りなさいゴ布林スレイヤーさん。依頼の方はいかがでした?」

「ゴ布林を殺してきた。数は八。ホブやシャーマンなどの「渡り」はなし。依頼どおり極小規模な巣だった。増援もなし。これなら「駆け出し」でも問題はなかっただろう」

「ははは……そうだとしても「ゴ布林退治」は中々やり手がいませんから……」

ゴ布林スレイヤーの報告を聞き、淀みなく答えつつも、スラスラと書類に記入する受付嬢。

「……はい、特に問題はありませんね。他になにか気になった点などはありませんでしたか?」

「気になったこと……」

顎に手を当て思案する。

受付嬢はその様子を上目遣いで伺うと、心の中で「珍しいこともあるものだ」と思った。

ゴブリンスレイヤーは、ことゴブリンに関しては「ド」が付くほど大真面目な男だ。依頼報告に関しても、彼女の「教育」の賜物か、言い淀むことは全くない。少なくとも、ゴブリンに関しては……。

そんな彼がなにか思案している。

なにか異変でもあったのだろうか？ ゴブリン退治のプロフェッショナルであるゴブリンスレイヤーの言葉は、存外、ギルドでは重要視される場合が多い。都では悪魔^{デーモン}が出没し始めているという噂もあるし、万が一ということもある。樂觀視することはできないだろう。受付嬢が握るペンに、自然と力が入る。

暫しの後、ゴブリンスレイヤーは静かに口を開いた。

「ゴブリンどもに変わりはなかった」

ホッと胸を撫で下ろす受付嬢。

「……だが、『奇妙な娘』に会った」

「奇妙な……『娘』ですか？」

さつきまでとは違う意味で受付嬢に緊張が走る。ライバルは少ないと思っていたが、もしかして、もしかするののか？

「そうだ、『娘』だ。依頼のあった村の教会にいる「修道女」だったのだが、村に行くとゴブリン退治に猛反対された」

「猛反対？ 急かされたのではなく？」

「ああ。まるでこの世の終わりのような様子で懇願してきた。 〃お願い、あの子たちを殺さないで〃とな……」

「珍しいこともあるものですね。「恨み」ならまだしも、まるでゴブリンたちに「情」でもあるかのような言い方です」

「実際そのようだった。ギルドに依頼を出す時も一悶着あつたそうで、村人たちも困り果てていたようだ」

「そのようなことは依頼書には書いてありませんでしたが……」

ゴブリン退治の依頼書をチラリと見つつ受付嬢が言う。

「村人も言いづらかったのだろう。ゴブリン退治に反対する修道女が村にいるなどと言うのは、些か外間が悪い。気が触れてしまっているのではないかと」

「……それじゃあ彼女は？」

「いや、別な気が触れているわけではないようだった。事実、普段は献身的で大人しい修道女だったようだ。「元冒険者」ということで「治癒術」も修めていたらしく、村人たちからは頼りにされていたらしい。特に、子供たちにはかなり好かれていたようだった。だが、ゴブリンが出たとなると様子が一変したらしい」

村人たちは最初、修道女はゴブリンに何らかのトラウマを持っているのだと推察し

た。そういったことは良くある話だったし、彼女のような境遇の女性はそういった場合が多いのだ。彼女のように「冒険者を辞めて、教会に入った女性」、は……。

しかしそれにしても様子がおかしい。

ゴブリンが出たことで「早く退治してくれ」と取り乱すなら話は分かるのだが、彼女の場合は「絶対に手出しをしてはいけない」と取り乱してきたのだ。

それはまさに鬼気迫る様子で、明らかに異状な光景だった。

「……それで、ゴブリンスレイヤーさんはどうしたんですか？」

「無論、ゴブリンを殺してきた」

「そ、そうでしょうね」

問答無用の断言。その思い切りの良さは流石ゴブリンスレイヤーと言うべきか、ことゴブリンに関してだけは情け容赦が全く無い。

ゴブリンスレイヤーは必死に懇願する修道女を完全に無視して、ゴブリンを皆殺した。大人も子供も余すことなく、全てだ。

殺したゴブリンたちは、なんの変哲もないゴブリンだった。

誰よりもゴブリンの恐ろしさを知るゴブリンスレイヤーでも、なぜそこまで恐れるのか理解できないほどのゴブリンだった。

だから、それだけで終わればこの修道女のごときは、ゴブリンスレイヤーの記憶にも残

らなかつただろう。

過去、何千、何百と繰り返してきた「作業」となんら変わらない同じ結末。ただ少し変わった修道女がいただけ。それだけで、この話は終わるはずだった。

「だが、依頼を終え村を出る時、修道女から奇妙なことを訊かれた」

取り乱し、泣きじゃくりながら、絶望した様子で修道女は訊いてきたのだ。

「……なんて訊かれたのですか？」

受付嬢の言葉には、僅かながらに恐怖が滲んでいた。ゴ布林スレイヤーが話を進める。

「殺したゴ布林の中に、「マスクをしているゴ布林」はいなかつたかと訊かれた。俺が「いなかつた」と言うと、修道女は救いの神でも現れたかの様な顔をして言った。」「
「良かった」と……なぜだ？」

ゴ布林スレイヤーの最後の呟きは、受付嬢へ向けてではなく、まるで自分自身に問いかけているかのようだった。

「さ、さあ……あいにく私は、ゴ布林にはあまり詳しくなくて……」

受付嬢はそう言ったが、ゴ布林スレイヤーの耳には届いていないようだった。

下を向き、考えにふけるゴ布林スレイヤー。

ゴ布林スレイヤーはずっと、村から街に帰ってくる間そのことが引つかかかってい

た。

「マスクをしたゴブリン」。チャンピオンやロードとも合致しない、ゴブリンスレイヤーが聞いたこともないゴブリンの特徴。果たしてそんなゴブリンが本当に存在するのだろうか？

ふと、ゴブリンスレイヤーはギルドに設置されている大きな「姿見」に目を向けた。

そこには、薄汚れた鎧を着込み、角の折れた兜を被ったゴブリンスレイヤーの姿が映っている。そう、兜をした人間の姿が……。

「……人間のようなゴブリン」

そう呟くとゴブリンスレイヤーは受付嬢に向き直った。

「えっと……ゴブリンスレイヤーさん？」

「ゴブリンだ……」

「はい？」

「ゴブリンだ。依頼はあるか？」

「え、ええ……今日も何件かありますが……」

「その中に「マスクをしたゴブリン」の依頼は？」

「え？ いいえ、そのような依頼はなかったはずです……」

「なら過去に似たような依頼は？」

「ええっと、そうだったのはなかった……っと思えます」

「……そうか」

当然だ。そんな変わったゴ布林がいたのであれば、ゴ布林スレイヤーの耳に入らぬはずがない。

だが、いないという保証があるわけでもない。

そして、ないのであれば、確かめる必要がある。

「……そうか」

ゴ布林スレイヤーはもう一度、そう強く呟いた。

*

*

修道女は今日も、教会で祈りを捧げていた。

だが一体何のために？ 彼女は祈りを捧げる時、いつもそんな疑問が湧いて出ていた。

見捨てた「仲間」のためか？ 見殺しにしてしまった「友達」のためか？ それとも、憐れで可哀想な「自分」のためか？

何のために自分は祈っているのかと考えると、修道女は気が狂いそうだった。

なぜなら、彼女はゴブリンのために祈っていたからだ。彼女が信奉する「地母神」ではなく、教会が信仰する「至高神」でもなく、あの卑猥で矮小な「小鬼」^{ゴブリン}のために祈っていた。いや、正確にはただの「小鬼」ではなく、「マスクをした小鬼」のために祈っていた。

これは明らかな異端行為だ。修道女として決して褒められることではない。だが、そうすべき責務が彼女にはあると思われた。

「カレら」はそれを望んではいないだろうが、他でもない彼女がそうすべきだと思つたのだ。そうすることが「彼女」と「彼女」への罪滅ぼしになるのだと、それだけが「彼女たち」への償いになるのだと、そう信じて……。

自分勝手な言い分だとは思ふ。でも、それ以外に良い手段も思い浮かばなかった。どんなに祈つたところで、死んだ者は帰つてこないし、過去を変えることはできない。結局の所これはただの自己満足だ。きつとこれは償いですら無い。だから、修道女は村にゴブリンが出たと聞いた時、密かにゴブリンと運命を共にしようと決意していた。ずっと見逃されていた「罪」を贖う時が遂に来たのだ。

修道女は惨めにゴブリンたちの食い物になつて、失意のまま「カレら」の糧になるべきだったのだ。もうずっと前にそうなるべきだった。「女治癒士」という冒険者は、辺境の村でのうのと「修道女」などになるのではなく、そういつた末路を迎えるべきだつ

たのだ。

だが、そんな彼女の心中を知ってか知らずか、村人たちはそんな愚行を許そうとはしなかった。

畑が荒らされたわけでもなく、ただの目撃証言があつたというだけで、速やかに冒険者ギルドに出される「討伐依頼」。数日もしない内に、「冒険者」はすぐやってきた。それも「銀等級」の冒険者が……。

かの冒険者こそ、ゴブリン退治のプロフェッショナル中のプロフェッショナル。ゴブリン退治だけを専門とする偏屈な冒険者「ゴブリンスレイヤー」だった。ことゴブリン退治において、これほど信頼のおける人物はいないだろう。

スペシャリストの登場に、村人たちはホッと胸を撫で下ろす。

事実、ゴブリンスレイヤーの手際は見事の一言で、いくつかの質問を的確に交わした後で足早にゴブリンの住処に赴くと、数時間もしない内にゴブリンを全滅させて帰ってきた。

その熟練すぎる手腕に村人たちは皆一様に関心したが、修道女だけは心底恐れ慄いていた。

ああ、ゴブリンを殺してしまった。ならば「カレら」が来る。復讐しにやって来る。この村にやって来る。

それは妄想以外の何物でもなかったが、恐怖からくる強迫観念によって修道女はそう信じ込んでしまっていた。

「カレら」が来る。復讐しにやって来る。もし殺してしまったのが「マスクをしたゴブリン」なら、「カレら」は必ずここにやって来る。「カレら」が「罪」を贖わせに、必ずここにやって来る。

修道女はそれが何よりも恐ろしかった。

ただのゴブリンならいい。孕み袋になるくらいならどうってことない。むしろこの「悪夢」を終わらせてくれるなら、望むところかもしれない。毎夜訪れる「赤髪の悪夢」を終わらせられるなら……。

だがマスクをしたゴブリンはダメだ。カレらの罪を償うことだけは、到底耐えられそうにもない。

だからゴブリンスレイヤーが帰る際、修道女はつい訊いてしまった。「あなたが殺したゴブリンは、マスクをしたゴブリンではなかったのか」と。

修道女はそのことを恥じた。結局のところ自らの保身が大事なのかと恥じた。なにごとに罪滅ぼしだ、なにが償いだ。綺麗事ばかり並べ立て、言うに事欠いて結局はこのザマか。何より修道女は、ゴブリンスレイヤーが「そんなゴブリンはいなかった」と言ったことに対して、心底安心してしまった自分がいたことに、心の底から恥ずかしくなっ

た。

なんて浅ましい考えなのだろうか。ここまで卑しくなれる生物も他にはいないだろう。そう修道女は自嘲する。だからこそ、今日も彼女はゴブリンに祈りを捧げるのだ。決して潰えぬ罪を贖うために……。

「……ここにいたのか」

そんな彼女に声をかけたのは、他でもないゴブリンスレイヤーであった。

「あんたに訊きたいことがあって来た」

ゴブリンスレイヤーが修道女に近づく。

修道女は祈りの姿勢を崩さぬまま、ゴブリンスレイヤーに応えた。

「……なんででしょうか？」

だが、なんとなく察しはついていた。

ゴブリンに執着する冒険者ゴブリンスレイヤーが、わざわざ教会に来て、修道女に訊きたいことなどが

知れているからだ。

「ゴブリンについてだ」

案の定、ゴブリンスレイヤーの返答はゴブリンだった。

修道女は無言。それをゴブリンスレイヤーは了承と受け取ったのか、話を続ける。

「あんたはこの間、「マスクをしたゴブリン」はいなかったのかと訊いた。なぜだ？ な

「ぜそんなことを訊いた？」

ゴブリンスレイヤーらしい単刀直入な問いかけ。対する修道女は沈黙を貫いていた。

「……」

返答は無言。

「マスクをしたゴブリンがいるのか？ いるとしたらどんなマスクをしている？ 特徴

は？ 大きさは？ 武器は？ 魔法は使うのか？」

「……」

返答はない。

「ホブやシャーマンとは違うのか？ チャンピオンやロードではないのか？ ヤツらの

中には権威を示すために仮面を被るヤツもいる。その類ではないのか？」

「……」

答えは返ってこない。

「あんたは「マスクをしたゴブリン」を見たのか？ 聞いたのか？ それともただの妄想

か？ あんたは何を知っている？」

「……」

修道女は祈り続けている。

「なぜ「マスクをしたゴブリン」がいたかどうかを俺に訊いた？」

「……」
修道女は答えない。

「……」
沈黙が続く。

「……」
「……」
それでもゴブリンスレイヤーは辛抱強く待った。

「……」
待つことは何よりも得意だった。“あの時”もずっと側で待っていた。姉が小鬼たちに食い物にされている間、ずっと側で待ち続けていた。いつだって待つてばかりだった。だから、待つことだけに關してはなんの苦にも感じなかった。

「……」
ゴブリンスレイヤーはただひたすら黙って待つていた。彼女が語り出すのをジツと

……。

「……」

「……それを聞いて、あなたはどうする気ですか？」

やがて観念したのか、修道女がそう呟く。

「無論、ゴブリンを殺す」

間髪を入れぬ即答。

だがゴブリンスレイヤーの言葉を、修道女は心の中で「ハッ」と笑い飛ばした。

なるほど、流石はゴブリンスレイヤーを殺す者様だ。恐れ多くもゴブリンを殺すなどと、こんなにも平然と言つてのけるとは、命知らずも甚だしい。

ゴブリンスレイヤーは「カレら」のことを知らないからそんなことを言えるのだ。

「カレら」のことを知っている修道女にしてみれば、ゴブリンスレイヤーの言葉は愚答
 と言う他ない。

「……たとえそれが、善良なゴブリンでもですか？」

「善良なゴブリンなどいない」

今度は間髪を入れぬ否定。

その容赦のない断言は、ゴブリンを殺し続けてきたゴブリンスレイヤーだからこそ言える台詞であり、自らの実績と経験に裏打ちされた確固たる事実であった。

少なくとも、ゴブリンスレイヤーにとってはそれが真実だ。

「もし方が一いたとしても、それは人前に出てこないゴ布林であって、そんなゴ布林は存在するはずもない」

そうゴ布林スレイヤーは言い切る。

「ゴ布林たちは「略奪する」という発想しか持たないからですか？」

「そうだ。ヤツらは「奪う」ことしか知らず、自分たちで新たなものを「作り出す」ことなど決してしない」

「あなたが殺してきたゴ布林はきつとそうだったのでしようね」

吐き捨てるように修道女はそう言った。

「でもじゃあ、あなたはこの世界の隅々まで冒険して、その事実を確かめたのですか？ 決してそうじゃないでしょう？ だったら善良なゴ布林が絶対にいないだなんて、どうして言い切れるんですか？ 中には「奪う」ことではなくて「作る」ことを知ったゴ布林もいるかもしれないのに！ 平穩を望んで静かに暮らすゴ布林もいたかもしれないのに！ ただゴ布林ってだけで、どうして傷つけることができるんですか!?! どうして私たちはツ!!」

最後の方はもう絶叫となっていた。

気付けば修道女は立ち上がり、ゴ布林スレイヤーと向き合っていた。体は震え、蒼色の瞳には涙が溜まっている。怒り、悲しみ、恐れ、憤り……様々な感情が瞳に渦巻い

ている。

ゴブリンスレイヤーは奇妙な感覚を感じていた。修道女の言葉はまるでゴブリンスレイヤーではなく、自分自身へと向けられているかのようだったのだ。

「どうして……どうして、私たちは……」

「……なにがあつた？」

ゴブリンスレイヤーは修道女のような娘を何度も見てきた。ゴブリンに人生を狂わされた者の姿。必死にひた隠しにしているようだが、他でもないゴブリンスレイヤーの目を誤魔化すことはできなかつた。この修道女は、ゴブリンスレイヤーが知らない「何か」を知っている。

「……確かに「善良なゴブリン」はいるのかもしれない。俺は見たことはないが、なるほど、あんたが言う通り俺もゴブリンの全てを知っているわけではない。探せば確かにいるのだろう。善良なゴブリンなどという矛盾をはらんだ存在も。だが、俺は「ソレ」を知らない。「善良なゴブリン」など知つたことではない。だが、知らないのであれば、知らなくてはならない。俺はゴブリンのことを知る必要がある。あんたは知っているのか？ 知っているのであれば教えてくれ……」

「私は……私は……」

私はこんなにも浅ましかつたのかと、このとき修道女は思った。この期に及んで修道

女は「救い」を求めていたのだ。

罪を贖うのではなく、罪から救われようとしている。自分だけのうのと生き延びて、あまつさえ救われようとしてしまっている。

ずっと祈り続けていたのはこのためだったのか？ このためにここでずっと祈り続けていたのか？ いずれ来るであろう「救い」を待ち続けるために、罪を贖うフリをし、ずっとここで祈り続けていたのか？ 良かったじゃないか目論見どおり「救い」は遂に来たぞ！ ホラ、これでオマエは救われる。卑しいヤツめ、恥を知れ！

赤髪の悪夢が、彼女をそう責め立てる。

でも仕方がないじゃないか。なにせ相手は「ゴブリンを殺す者」だ。ただの「ゴブリンに祈る者」である修道女に、抗えるはずもない。

「私は——」

だから修道女は自らが知る「秘密」を、ゴブリンスレイヤーに洗いざらい話した。

* * *

翌日、ゴブリンスレイヤーは冒険者ギルドに行き、真つ先に受付嬢のところに向かった。

「おはようございます、ゴ布林スレイヤーさん！ 今日もゴ布林ですか？」
「いや違う」

「はい、今日はゴ布林退治の依頼が六件ほどありまして……つて、今なんて言いました？」

「む？ 違うと言ったんだが……」

「……え、え、え？ ええええええええ！？ ゴ布林スレイヤーさんがゴ布林じゃない？

じゃ、じゃあ一体なにしにギルドに来たんですか!？」

思わずそう言ってしまう受付嬢。言ったあとで「しまった!」という顔をする。さすがにこれは失言以外の何物でもない。

「す、すみません！ そりゃあゴ布林スレイヤーさんだつて、時にはゴ布林以外でギルドに来ることもありますよね！ 私は見たことはありませんが!」

「む？ ああ、そうだな」

「……そ、それで、ゴ布林でないなら一体何をしにギルドへ？」

も、もしかして私に会いに!？ なんてことを考えちゃうくらいには、いま受付嬢はテンパっていた。それくらいゴ布林スレイヤーがゴ布林と言わないのは珍しかったのだ。

あたふたする受付嬢をよそに、ゴ布林スレイヤーは坦々と言う。

「過去にあった「冒険者依頼」を見せて欲しい。数年前、当時「青玉」と「鋼鉄」だった女冒険者の一党が請けた依頼だ。ああ、ゴ布林以外で構わない」

「ゴ布林以外!? 本当にゴ布林以外で良いんですか!？」

「ああ」

受付嬢は天地がひっくり返るかのような衝撃を受けた。あのゴ布林スレイヤーの口から「ゴ布林以外で」なんて言葉が飛び出してくるとは前代未聞だったのだ。明日は血の雨でも降るのかしら? きつとその血はゴ布林のものだろう。

「ちよ、ちよつと待ってて下さいね」

受付嬢は椅子から転げ落ちるのをなんとか堪えて、そそくさと資料室へと向かった。自分でも足取りが震えているのが分かる。これは天変地異の前触れか何かか。ゴ布林スレイヤーからゴ布林以外を求められるだなんて、彼女が受付嬢になって以来初めてのことだった。

つまりこれは処女を奪われたのと同義ではないか。何を言っているんだ私は? 受付嬢は混乱していた。

オーバーヒートする頭とは裏腹に、受付嬢はゴ布林スレイヤーが求める資料を着実に探し当てていく。資料以外でも求められればなんでもしてあげるのに……だから何を言っているんだ私は? 受付嬢はかなり混乱していた。

「こ、これで以上になります、ゴブリンスレイヤーさん」

見つかった資料は思ったよりも多くはなかった。「青玉」と「鋼鉄」の一党にしては驚くほど少ない。どうやら、彼女たちは僅か数か月でその等級まで登りつめていたようだ。

「優秀な冒険者さんだったのですね……彼女たちに何かあるんですか？」

さり気なく探りを入れる受付嬢。もしかすると、もしかして、またもやライバル出現の兆しなのかもしれない。

「どうだろうな……彼女たちが請けた中で一番最近の依頼はどれだ？」

「ええつと……それなら多分これですね。「辺鄙な村」からの調査依頼です。ああこの依頼は私も覚えていますよ。確か私が受付した依頼ですね。随分前のことですが、ちよつと変わった依頼でしたので覚えていません。これ彼女たちが請けていたのですね。あ、でも彼女たちこれを最後に引退しちやつてるんですね。道理で等級の割に依頼数が少ないわけだ……「女剣士」に「女治癒士」の一党パーティー。彼女たち、何かあったんですかね？」

「見せてくれ」

一介の冒険者に個人情報でもある「依頼書」を見せるのはあまり褒められた行為ではない。だが、ゴブリンスレイヤーは安心と信頼の「銀等級」の中でも最優と言われるくらいには信用のおける冒険者だ。実績に関しても全く申し分ない。特に問題はないだ

ろうと判断し、受付嬢はゴブリンスレイヤーに資料を渡した。

マジマジと資料を見つめるゴブリンスレイヤー。

「そうか「辺鄙な村」か……すまない世話になった」

「いえ、これくらいどうってことないですよ。その依頼に何かあったんですか？」

「ああ……ゴブリンだ」

やっぱりそうでしたか、と受付嬢は呟く。むしろちよつと安心したくらいであった。やはり天変地異の前触れはなかったのだ。ゴブリンスレイヤーは今日も今日とて相も変わらずゴブリンスレイヤーだった。

「では俺は行く」

「あ、はい。気を付けて下さいね」

「ああ」

そう言つてゴブリンスレイヤーはギルドを出て行った。

気が動転していた受付嬢は気付けなかった。ゴブリンスレイヤーが、ゴブリンの依頼があるというのに、一つも請けずにギルドを出て行ったという事実。そんなこと、ゴブリンスレイヤーが冒険者になって初めてのことだった。

*

*

辺境の街を出て、街道をひたすら行き、気が遠くなるほど歩き続けてようやくゴブリンスレイヤーは「辺鄙な村」に辿り着いた。

森の近くにある寂れた村——とりたてこれといった産業もなさそうで、当然、宿屋らしい施設もない。教会すらないようだった。

住民は老人が多く、働き盛りである大人たちは少ないようだ。それに倣うように子供たちの姿も少ない。

よくある過疎化が進む農村のそれだった。冒険者という職業が流行るにつれて、こういった寒村が増えていると聞く。もう何年かすれば、この村も人知れず消え去ってしまうのだろう。

まあそれ自体はよくある話だ。

消え行く寒村のことなど、ゴブリンスレイヤーには関係がない。なぜなら相手は「ゴブリン」ではないからだ。ゴブリンでないなら知ったことではない。

突然前触れもなく現れたゴブリンスレイヤーに対し、村人たちはなぜか手慣れた様子で対応した。曰く、ここ最近「三人組の女冒険者」がこの村を利用するようになったらしい。頻繁ではなく数週間に一度あるかないかの話らしいが、こう何度もあれば自ずと手慣れてくるというものだ。

「それで兄ちゃんも、森へ探索に行くのかえ？」

「ええ、まあ、そうです」

拠点として提供してくれた村長家で、ゴ布林スレイヤーはそう質問に答えた。当然、取るものは取られたが、元よりそうするつもりだったので問題はない。むしろ情報収集も兼ねられて都合が良かった。

「しっかし奇抜な人もいるものじゃな。こんな辺鄙なところにわざわざ来るだなんて……いつも来る冒険者さんたちは、森へ行くといっつもボロボロになって帰ってくるんじゃが、兄ちゃんも森へ行くなら気をつけることじゃて」

「はい、そうします」

まずゴ布林スレイヤーは、辺鄙な村に着くやいなや徹底的に情報を集めていた。修道女が語ったことを信用していないわけではないが、人伝で聞くのと自らの足で集めるのとでは、情報の確度が違うことをゴ布林スレイヤーは知っていたのだ。

村人の話によれば、森には正体不明の小人が住んでいる。小人はマスクを被っていて不干渉を望んでいる。森から響く「音」はその小人たちの仕業。村人たちは小人たちの正体を探ろうとは思っていない。なぜなら、かつて調査を依頼した時、調査を担当した冒険者からそう言及されたから。それは、小人たちに会いに行っていると思われる「三人組の女冒険者たち」からも、そう強く注意されていた。

村人たちは、それだけは厳格に守るようにはしていた。触らぬ神に祟りなし。辺鄙な村の住人は、そうやって今の今まで生き抜いていたのだ。

村人たちの情報はこれだけではない。

森から響く「音」は、日の出と共に鳴り始め、日没と共に鳴り止む。日が沈んでから鳴ることは滅多にない。

小人たちが現れるようになってから、ゴブリンだけではなく、怪物による被害が全くなくなった。お蔭で老人ばかりの村でも、なんとかやっていけているらしい。

定期的に森へ赴いている「三人組の女冒険者たち」は、いつも大抵ボロボロになって帰ってくるが、なにか酷い目に遭っているというわけではないようだ。

総じて判断するのであれば、森に住む「小人」は決して危険なモノではないように思われる。あらゆる情報がそう示していた。

ゴブリンスレイヤーは僅かに困惑する。

得られた情報全てが、彼の知るゴブリンの生態と全くといって合致しない。

鳴り響く「音」から、ヤツらは日中に活動しているようだ。ゴブリンは夜行性で昼間に歩くことは滅多にない。相手がゴブリンなら、ボロボロになった女冒険者たちが平穩無事に戻ってこられることはまず無いだろう。村の作物に全く被害が無いとはどういうことだ？

ゴ布林スレイヤーに一抹の疑問が過ぎる。本当に森に住む小人は「ゴ布林」なのか？ だが修道女は言った。あの森に住む小人こそ、「マスクをしたゴ布林」なのだ……。

村で得られる情報だけでは確証は得られないようだった。やはり自らの目で確かめるしかあるまい。ゴ布林スレイヤーは迷ったが、ゴブリンの習性に基づいて、最初の「音」が鳴り響く前——つまりは日の出前に森に入ることに決めた。

まだ薄く暗い寒空の下、ゴ布林スレイヤーは「三人組の女冒険者」が利用しているという獣道から僅かに逸れる道なき道から森に入る。それからゴ布林スレイヤーは慎重な足取りで、森の深部へと前進していった。

ゴ布林は言うまでもなく、「森」とは元来非常に危険な場所だ。立ち並ぶ木々は平衡感覚を狂わせ、生い茂る草葉は日差しを遮り視界を悪化させ、体温を容赦なく奪う。そこは人類の領域ではなく、そこに棲む獣たちの領域だ。碌な装備も準備もなしに挑んでは、呆気なくその深淵に飲まれ命を散らすことになるだろう。

細心の注意を払い、ゴ布林スレイヤーは徐々に、だが確実に森の奥地へと歩を進めていった。

息を殺し、汗を拭い、音を立てずに進む。こんなにも慎重になったのは久しぶりかもしれない。そもそも——

(こうして、自らゴブリンを探索するのは、初めてのことだったかもしれない……)

ゴブリンスレイヤーにとって、ゴブリンは人生の全てにおいて優先される事柄だ。ともすれば、ゴブリンこそが生きがいであると言ってもいい。

だがそのスタンスとしては、基本「受け身」であった。

ギルドで依頼された「ゴブリン退治」を手当たりしだいに請け、そして実行するだけの人生。ゴブリンは数だけは多かったから、それだけでゴブリンスレイヤーの時間は殆ど忙殺された。だからこそ、こうして自らの意思でもってゴブリンを探すなんて、初めてのことだった。

これはゴブリンスレイヤーにとっても意外な発見だった。だがそれ故に実に有益な発見でもあった。

修道女は言った。「あなたは世界の隅々まで探索したわけではない」と。確かにその通りだ。ゴブリンスレイヤーとてゴブリンの全てを知っているわけではない。ゴブリンのことを全て知るには、これまでのように待ち続けるのではなく、自ら行動に移すべきなのかもしれない……探索を進めながらも、ゴブリンスレイヤーはそう思った。

森へと侵入して、もうどれだけの時間が流れたのかゴブリンスレイヤーにも分からない。悠然と生い茂る草木の中では、流れゆく時間も違うようだ。だが、まだ日の出の「音」が聞こえないことから、そんなに多くの時間が流れたわけでもないようだった。

森の様子は至って平穩で、なにか異常があるだとか、変わったモノがあるだとかいう様子もない。慎重に歩を進めているが、あまりにも慎重になりすぎるのも得策ではないだろう。ゴ布林ンスレイヤーがそう思いかけた瞬間——遠くの方の茂みがガサガサと揺れた。

ゴ布林ンスレイヤーは素早く臨戦態勢をとり、警戒を露わにする。

茂みの揺れは次第に大きくなっていき、遂にはゴ布林ンスレイヤーが体感できる程に地面が振動するほどになった。ズシン、ズシンという「音」が鼓膜を震わす。日の出の「音」とは違う音だ。

「音」の方向に目を向け、ジツと構えるゴ布林ンスレイヤー。居場所がバレないよう、木々の影に身を潜める。息を殺し待つ。ややあつて現れたのは「巨大な人形」であった。全身甲冑に身を包み、関節部の隙間からは人肌ではなく金属の接合部が見え隠れしている。手には大きな矛を持ち、肩や背中の部分には——ゴ布林ンスレイヤーにはどんな用途があるのか分からなかったが——巨大な装飾が施されていた。駆動音が鳴り響き、金属が軋む音が聞こえる。ゴ布林ンスレイヤーは見たこともなかったが、相手は機械仕掛けの人形のようなものだ。

「……これはゴ布林ではないな」

だが、人間というわけでもない。

巨大人形——対見習い冒険者用新型防衛兵器「ネオ・ファウスト」——は、ゴ布林スレイヤーから僅かに漏れた呟き声を、その優れた感知機能で速やかに察知すると、ゴ布林スレイヤーへと急転換した。

「——ッ!？」

息を飲むゴ布林スレイヤー。よもやこの距離から察知されるとは、予想だにしていなかった。この人形は相当に感知能力が高いらしい。気配を殺し息を潜める。

ガシャン、ガシャンつと音を立て、ゆつくりとゴ布林スレイヤーの方へと向かってくるネオ・ファウスト。もはや起動音だけでなく、ピコピコといった電子音さえも聞こえてくる位置にまで近づいていた。

ゴ布林スレイヤーは選択を迫られた。このまま一旦退くか、戦いを挑むかの二択だ。

ゴ布林スレイヤーは自らの力量は重々承知していた。ゴ布林スレイヤーは「勇者」ではない、もちろん「英雄」でもない。ただのゴ布林ゴ布林スレイヤーを殺す者だ。だから、ゴ布林が相手でないのなら、何者であつてもゴ布林スレイヤーに分が悪かった。

直ぐ様踵を返し、撤退を選択するゴ布林スレイヤー。だがしかし、今回ばかりは相手が悪過ぎたようだ。

ゴオオオオオオという音を鳴らし空中を飛翔するネオ・ファウスト。瞬く間にゴブリ

ンスレイヤーの行く手を阻み、進行を塞いだ。

ゴ布林ンスレイヤーは回り込まれてしまった！

まさか空を飛ぶとはな——ゴ布林ンスレイヤーが下唇を噛む。どうやら撤退は許されないようだ。ならどうするか……ゴ布林ンスレイヤーの脳裏にいくつもの選択肢が列挙される。だが、彼がそれを実行に移す前にネオ・ファウストの行動は既に始まっていた。

「グッ……」

ゴ布林ンスレイヤーの腕を掴み、強引に持ち上げるネオ・ファウスト。逃げられないように確保してから、ネオ・ファウストは念入りにゴ布林ンスレイヤーを観察した。

ガガガ……侵入者(仮)ヲ確保……コレヨリ「スキャン」ヲ開始シマス……ガガガ……頭部位ニ「マスク」ヲ確認……侵入者デアル可能性ガ17%低下……

「なに、を……見ている？」

ガガガ……対象ヨリ「共通語」ノ発声ヲ確認……侵入者デアル可能性ガ3%低下シマシタ……ガガガ……スキャン継続中……胴体部、脚部、腕部ニ「防護服」ヲ確認……侵入者デアル可能性ガ24%マデ低下……対象ハ「ゴ布林」デアル可能性ガ高イデス……

ネオ・ファウストは搭載された最新鋭の思考回路を駆使して、確保した対象の正体を

解明していく。

この姿、この格好、このマスク、そしてこの「臭い」……多少サンプルから外れているが、間違いはない、確保した対象は「ゴ布林」に違いなかった。計算しつくされた思考回路によつてそう導き出すネオ・ファウスト。

なぜこんなところにゴ布林がいるのかデータはないが、それはネオ・ファウストが計算すべき項目ではなかった。大方きつと遭難でもしたのでらうとゴブリ式思考回路は弾き出す。ならば速やかに安全を確保しなくてはならない。迷子になったゴブリンの身柄確保は、ネオ・ファウストの最優先任務事項なのだ。

「ガガガ……0645遭難シタ「ゴ布林」を確保。コレヨリ「リトルシャイア」へト帰還シマス」

言うやいなやゴオオオオオと音を立てて飛び立つネオ・ファウスト。

斯くして、遂に出会つてしまうことになる「ゴ布林スレイヤー」と「マスクを被つたゴ布林」——囚われの身となつてしまったゴ布林スレイヤーの明日はどっちだ!?

ゴブリン・アイデンティティー

ゴブリンスレイヤーは空を飛んだ。

正確には飛ばされたかもしれないが、どちらにせよ、そんなことは初めてだった。

急上昇、急降下、急旋回、急停止——そのたびに内臓がせり上がり、血液が逆流する。視界が狭まり、色調が消え失せた。意識が彼方へと吹き飛んでいく。

高性能ゴブリンマスクと防護服を装備するゴブリンであれば、これくらい手荒なマネをされた方がアトラクションほくてエキサイティングするのだろうか、ただの革鎧と鉄兜でしかないゴブリンスレイヤーには少しばかり刺激的すぎた。

意識を失いだらんと脱力するゴブリンスレイヤー。そんな彼をネオ・ファウストはがつちりホールドし、ゴブリン的「安全第一」でリトルシャイアへと輸送する。

轟音を響かせてリトルシャイアの「レンドロン広場」に着陸したネオ・ファウストは、ゴブリンスレイヤーをゴブリン的な意味で優しくポイ捨てすると、ゴブリンスレイヤーは脳天から地面に直撃した。グシャアツと嫌な音がする。

任務遂行を確認したネオ・ファウストが、再び任地に赴くためゴゴゴつと炎を噴射させて飛び去っていった。

ポツンと広場に取り残されるゴブリンスレイヤー。水路のせせらぎが虚しく響き、一陣の風が哀しく吹く。ここは老若男女のゴブリンが集うリトルシヤイアの憩いの場だったが、幸か不幸かまだ夜明け前であったため、ゴブリンの姿はない。

ゴブリンスレイヤーは暫しのあいだ、無慈悲にもそのまま放置されることになる。しかしそれも束の間のことであった。

ドーン！ つという爆発音。夜明けを知らせる爆発が鳴り響くと共に、どこからともなくリトルシヤイアのあちこちから、ゴブリンたちがゾロゾロと這い出てきたのである。

うーんうーん、まだまだちよつと眠いゴブ。今日の朝ごはんはなんだろなゴブ。さてさてこれからなにをしようかゴブ。ああく腰が痛いゴブ。今日は採掘場にでも行こうかなゴブ。アンタ昨日も採掘場に行ったじゃないゴブか。

そんな雑談を和気あいあいと交わしながら、どこかへとトコトコ向かうゴブリンたち。カレらが目指しているのは、広場の外れにある大きな建物——「クックノックス大食堂」だった。

リトルシヤイアの食卓事情を一手に担うこの大食堂は、最大収容ゴブ数約千五百ゴブリンを誇るリトルシヤイアでも有数の巨大施設で、クックノックスを始めとする74名の給養ゴブリンと、27体のコツヘンドールによって、リトルシヤイアのゴブリンたち

の食欲とお腹を満たしていた。

クツクノツクス大食堂が提供する食事は日によって最低三回は変わり、大抵の場合、日の出の爆発とお昼の爆発と日没の爆発の時にさり気なく変更される。

今はちようどその「日の出の爆発」の食事の時間というワケだ。リトルシャイアのゴ布林たちは日の出とともに目覚めると、まず真つ先にこの場所を目指すのが習慣になつていた。腹が減つては仕事も趣味もできぬというわけだ。

クツクノツクス大食堂からはゴブリンのに美味しそうな匂いが漂つてきて、ゴ布林たちは期待に胸を膨らませる。

これは我先にと行かねばならん！ ゴ布林たちは競い合うようにしてクツクノツクス大食堂を目指した。ラプトルの臭み焼きのような人気メニューは、人気だけあつて競争率も高いのだ。

ゴ布林たちは、まるで押し寄せる大波のような大群となつて、そろそろとレンドロン広場を横切つていく。

そしてその最中、ゴ布林たちはとんでもないモノを見つけてしまった！

これはなんとということでしょう！ 我らが憩いのレンドロン広場の端つこに、なんとも一風変わったマスクと防護服に身を包んだ、身の丈ニンゲンほどもある大ゴ布林が寝つ転がつてるではないか！

これはビックリなんたることか！ 一体なにゆえこんなところでお寝んねを!? ゴブリんたちは不思議に思つて、ワサワサとその大ゴブリんのところ集まつて来る。

ははーん、さてはこつそり深夜に抜け出して、酔つ払つてそのまま寝ちやつた感じゴブね。やれやれ全く仕方のないやつゴブ。こんなところで居眠りするだなんて、なんてだらしないゴブリんなのかしら。ゴブリんたちは思い思いにそんな感想を述べていく。

本来なら大忙しの日の出の時間だというのに、ゴブリんたちは寝つ転がつてる大ゴブリんが気になつて、興味津々の様子だった。次から次へとゴブリんばかりができて、それに伴つて、何だ何だつと、どんどんどんどんゴブリんたちが集まつてくる。

どうしたなんだ何事か？ 大丈夫？ 平気？ 何があつたの？ なんでも、酔つ払つて眠りこける大ゴブリんが広場で発見されたそうぞ！ あらまそれはまあまあ！

それは確かに一大事！

リトルシャイアのゴブリんたちは、こんな感じで、結構、何気に、面倒見が良いヤツらだった。持ちつ持たれつの精神が、ゴブリ社会を円滑に回す秘訣なのだ。ゴブリんたちは困っているゴブリんを見ると、なんだかんだで放つておけないタチだった。

眠りこける大ゴブリんは、随分と薄汚れた防護服になんだか古めかしい鉄製マスクと、随分古風な姿をしている。

そこそこイカしたデザインだけれど、機能性についてはイマイチのようで、ゴ布林たちの評価もイマイチだった。空气清新機能や環境適応機能どころか、体温調節機能すらも付いていない。見た目は大きな体をしているが、体格に似合わずまだまだ未熟な若者ゴ布林のようだ。

もしかしたらひよつとすると、外から来たゴ布林かもしれないぞ！

どこかのゴ布林がそんなことを言い出す。それは確かに言われてみれば、そんな風に見れば、そんな風に見えなくもないかもしれない。それならば前時代的なマスクと防護服に説明がつくし、仄かに香る体臭が原始ゴ布林っぽい理由にもなる。

リトルシャイアのゴ布林たちは、寝っ転がってる大ゴ布林が「外ゴ布林」だと分かって、歓喜に包まれた。外ゴ布林の中にも我々のような文明開花ゴ布林がいたのだ！ ゴ布林たちが諸手を挙げて喜び合う。

外ゴ布林といえば、大抵「ナントカの軍勢」とかいえば良く分からないヤクザみたいな連中に支配されていて、全くコミュニケーションの取れないヤンキーゴ布林ばかりだったけれど、この大ゴ布林を見る限り、決してそんなことはなかったのだ。外ゴ布林の中にも、ちゃんと話の通じそうな文化ゴ布林がいたのである。

ゴ布林たちはこれまで、森の外の文明とは積極的に関わろうとはしてこなかった。ほぼ一方的に喧嘩を売られたり、因縁を付けられたりしてきたことはあったが、ゴブリ

ンたちからコミュニケーションを取ることは殆どなかったのだ。現在定期的に関わりがあるのは、精々、なぜか気に入られてしまった見習い冒険者たちぐらいである。

その見習い冒険者たちにしても、交流相手というよりも「勝手にやって来て防衛兵器をボコボコにしていく傍迷惑な相手」でしかなく、交流しているというよりも競争しているというのが正しかった。ゴ布林たちは「争い合い」や「殺し合い」は好まないが、「競い合い」ならば大歓迎だったのである。

ゴ布林たちは見習い冒険者との競い合いを通じて、様々なことを学んだ。競い合う楽しさ、より効率的な兵器の運用法、戦術戦略の洗練、新たなゴ布林兵器……そしてなにより強く学んだのは、「ニンゲンってヤバイッ!!」ということだった。

どんなに情け容赦のない鬼畜なギミックやトラップを仕掛けても、見習い冒険者たちはその尽くを見事に突破してみせるのだ。「ナニナニの軍勢」が何ヶ月も躓いている防衛機構を、だ。

もちろん、何事も最初は上手くはいかないものである。だが、最終的には必ず解法を見つけ出し、見事クリアしていった。中にはゴ布林たちが想定していなかった意外な方法で突破することもあり、今ではもう「マニピュレーター」にまで到達しているのである。

見習い冒険者たちの強さは、「ナンチャラの軍勢」なんか目じゃないくらいブッチギリ

の強さだった。しかし、そんな恐ろしい強さを誇る見習い冒険者たちでさえも、人間基準で見れば、その名の通りただの「見習い」でしかなかった！

これが「見習い」じゃなくて「正」とか「聖」とか「天」とかになったら、いったいどうなっちゃうの？ ゴブリンたちは戦慄した。

これは認識を改める必要がある——ゴブリンたちは心底そう思った。

これまでのゴブリンたちの人間基準は、骨の髄まで調べ上げた「貢献者A」が基準になっていたのだが、実際には貢献者Aはニンゲンの中でも規格外に弱い部類だったらしく、基準としては全くもって相応しくなかったようである！

ゴブリンたちはデータを重んじる主義だった。貢献者Aと見習い冒険者たちならば、どちらがより参考になるデータなのかは、赤ちゃんゴブリンでも分かることだった。「1」と「3」ならば当然「3」の方が、ゴブリン的にも統計学的にも参考になるのは一目瞭然である。

どっちもあんまり変わらないじゃないかというツツコミは、ゴブリンの辞書にはなかった。

とはいえ貢献者Aのデータもおおざなりにすることはできない。結局ゴブリンたちは彼女たち4人の平均値をニンゲンの最低基準とし、予てより練っていた「ある計画」の見直しを図った。

実のところゴ布林たちは、パンサーアードールなどのゴブリ兵器を完成させたあかつきには、ゴルダナル大森林の外に進出することを密かに目論んでいたのである。

大森林の隅々まで網羅したゴ布林たちには、もはや森は全てを知るところとなり、カレらの知識欲を満たす「未知」は、もうめつきり見つからなくなっていたのだ。それでもゴ布林たちの探究心は留まることを知らず、遂にはゴルダナル大森林ですら越える領域に到っていた。

しかし、そんな折に現れた計算外の強さを持つ見習い冒険者の登場によって、ゴ布林たちの「計画」は一旦取り止められることとなる。ゴ布林たちの「外の世界への進出」は、当面の間「延期」となったのだ。少なくとも、見習い冒険者たちとの「競い合い」を経て、彼女たちを鼻をほじりながら倒せるくらいに強い機巧兵器を創り上げるまでは……。

外の世界は危険でいっぱいだ。見習い冒険者のような「つええーニンゲン」が、まだまだゴロゴロいると予想される。そんな危険が危ない世界に、なんの準備もなく飛び込んでいくほど、ゴ布林たちは無鉄砲ではなかった。

だからこそ、「外から来た話の分かりそうなゴ布林」の来訪は諸手を挙げて大歓迎だった。「外の世界」を知り、まだ見ぬ「未知」を知る「同族」の来訪は……。

「シユココオ……シユココオ……」

それにしても 見れば見るほど「ニンゲン」みたいな 不思議なゴ布林さんゴブね」
「もしかしてひよつとすると 実は「ニンゲン」だったりして」

「何をご冗談を 確かに一風変わったはいるが 「マスク」をしているし 少し原始的だが「防護服」も着ているゴブ」

「それにこの仄かに香る匂いは まさにゴ布林そのものゴブ！ 一週間は洗っていない ばつちいゴ布林の匂いがするゴブ！」

「確かに確かに ちよつと原始的だけど 間違いなくゴ布林ゴブ ちよつとニンゲンみたいだけど コイツは立派なゴ布林ゴブ！」

ゴ布林たちは、見た目がちよつとニンゲンに似ているからって、決して鼻屑はしないヤツらだった。寝っ転がってるだらしないニンゲンみたいなゴ布林は、そうは言ってもきちんと立派なゴ布林なのだ！

そんなゴ布林の論理思考で、ゴ布林たちは「気絶しているゴ布林スレイヤー」のことを「ゴ布林」だと認識した。一風変わったマスクと防護服だが、「マスク」と「防護服」をしている以上、この寝っ転がってるゴ布林が「ゴ布林」であることは確定的に明らかなのである。

ゴ布林たちは自らが作り上げた治安維持システムに絶大な自信を持っていた。さらに、その一翼を担うネオ・ファウストのことも大いに信頼していた。そんな優秀なゴ

ブリ兵器が、リトルシャイアのだ真ん中でニンゲンが居眠りしていることを許すはずもないし、有り得るはずもなかった。

それにカレが外ゴ布林なら、擬態とかカモフラージュとかそんな理由で、ニンゲンみたいな見た目をしている可能性もある。ゴルダナルの文化ゴ布林は、見た目がちよつとニンゲンに似ているからって、変な偏見は持たないのだ。なんにせよ、ゴ布林たちはゴ布林スレイヤーのことを自らの同朋であるとした。

さてさて、それじゃあそれならば、未だ目覚める兆しのない外ゴ布林を、みんなで起こしてあげようか！ ということになって、そういうことならばつと続々と集まってくるゴ布林たち。こういった「放置ゴ布林」は、ネオ・ファウストの配備以降、まあまあそこそこ良くあることだったので、ゴ布林たちは慌てず騒がず落ち着いて対処した。

まずはバイタルチエック——なんとゴ布林スレイヤーの防護服には、「バイタルチエック機能」がついていなかった。外ゴ布林の文化はちよつと遅れてるゴブね、と呑気に思うゴ布林たち。仕方がないので視診で容態を窺う。

「シユココオ……シユココオ……」

それにしても これにしても 見れば見るほど 個性的な格好のゴ布林ゴブね」

「マスクは鉄製 防護服は革がメイン……素材を統一していないのは 外ゴ布林の流

行りゴブか？」

「頑丈そうな造りゴブけど 傷だらけだし 汚れが多くてばっちいゴブ

ちゃんとお手入れしないと せっかくのイカしたマスクがもつたいないゴブ」

「ならきつと コイツはズボラな性格のゴ布林ゴブね それならこんなところで居眠りしちゃうのも 頷けるといいうものゴブ」

「見たところ 呼吸 体温 共に異常なし それなら起こしてあげようしよう だれか気付薬とか持つてないゴブか？」

「それならこれなら ゴブが持つてるゴブ ホレこれゴブ」

そう言ったゴ布林が取り出したのは、なんとも怪しげに発光する瓶詰め謎エキスだった。

それをホイッと渡すお薬ゴ布林。

手渡されたゴ布林は、渡してきたゴ布林をチラリと見てから、瓶詰めになった気付薬らしき謎エキスをチラリと見ると、「ま、いっか！」と思つてゴ布林スレイヤーのマスクの隙間からドバドバッと投入した。

「……ゴツ……ゴボツ!? ゴボゴボゴボ! ……ゴボゴボゴボ!」

激しくむせ返るゴ布林スレイヤー。それでも容赦なく注ぎ込まれる謎エキス。気絶した状態でもマスク越しで飲食できるのはゴ布林たちの常識だったので、一切容赦

がなかった。

「ガハツ、ゴホツ、ゴボオツゴボゴボゴボツゴボツゴボツゴボツ!? ……ガツ、ガハアツ!!」

そして遂に鉄兜から謎エキスが溢れそうになった頃、ガバアツと覚醒するゴブリンスレイヤー。

ゴ布林たちは流石ゴ布林製の謎エキス! と思つたが、実際にはただ単純に息苦しくて目覚めただけだった。

「ガハツ、ゲボオ、ゴホツ……ハア、ハアハア……ゲツ……ここ、ここは……?」

視界が霞んでいる。気分は最悪だ。息が苦しい。頭の奥がズキズキする。動悸が激しく高鳴り、体が痙攣していた。ここは何処だ? いやそもそも……俺は誰だ?

「シユココ……シユココ……」

オマエさん ホントにホントに大丈夫か?

心配するな安心するとイイ ここは 我らが彼らがゴ布林たちの理想郷「リトルシャイア」ゴブよ」

「……リ……トル、シャイア?」

その地名には聞き覚えがあった。だが、それを何処で聞いたのか思い出せない。まるで朝霧の中に迷い込んだかのように、記憶が曖昧だった。怒りとも、恐怖とも、歓喜と

も言えぬ感情が湧き上がってくる。何故そう感じる？ 何故、俺はここにいるんだ？

呼吸が荒く、酸素が足りない。脳に血液が行っていなかった。何もかもがあやふやで、何もかもが曖昧だった。吐き気がする。しかし吐くべきモノがない。胃の中は空だった。

ゴ布林スレイヤーは辺りを見渡した。おびただしい数の「小人」たちが無数にいる。頭を覆い隠すほどの大きなマスク。丸いレンズの瞳。足先から手の先まで至る全身防護服——誰かが言っていた、マスクをした「何か」。それが何だったのか思い出せない。記憶の中が空虚だった。

「お前たちは……誰だ……？」

頭を押さえ、震えながらゴ布林スレイヤーは訊いた。

「シユココオ……シユココオ……」

オマエさんオマエさん マジでホントに大丈夫ゴブか？

オイラたちはどこからどう見ても 「ゴ布林」に決まってるゴブ

生まれてこのかた「ゴ布林」だし 死んでこのかた「ゴ布林」ゴブ

「ゴブ、リン……だつと!？」

その「名」に、ゴ布林スレイヤーは言いようのない「執着」を感じた。

言い知れぬ感情が溢れてくる。恨み、嫉妬、執念、後悔、悲しみ、虚しさ、恐怖、そ

して歓喜……それでも記憶は蘇ってこない。俺は「ゴ布林」に何らかの「執着」がある。だがそれが、何なのかが思い出せない。

「お、俺は……いつたい……」

狼狽する様子のゴ布林スレイヤーに、ゴ布林たちは心配そうに声をかける。

「シュココオ……シュココオ……」

オマエさんオマエさん さつきから大丈夫ゴブか？ なんだか震えていて 苦しもうゴブ どこか痛いところでもあるのか？ 体調は？ 気分は悪くないゴブか？」

「……分からない……俺は、俺は……誰だ？」

「もしかしてひよつとして オマエさん 自分が誰か分からないゴブか!? 綺麗さっぱり忘れてしまったゴブか!？」

おお、それはなんとということだ！ ザワザワとざわつくゴ布林たち。

「グツ、アアアア……思い、出せない、何も……思い出せない……俺は、俺は……」
「しっかりとるゴブ！ とりあえず落ち着いて深呼吸するゴブ！

はい！ 吸って吸って吐いて！ 吸って吸って吐いて！」

「——つてそれはラマーズ法ゴブ！ フザケている場合ゴブか!？」

ゴ布林たちがしようもない寸劇を繰り返している最中、ゴ布林スレイヤーはなおも苦しんでいた——ゴ布林、リトルシャイア、ゴ布林、ゴ布林、ゴ布林ゴ布林

せめて「ゴブスレニクス」だったり「ゴブスレオクス」だったりしたらマシなものになあ、と思うゴブリンたち。外ゴブリンの命名法則は、見た目と同じように一風変わっているようだった。

そんなことを思われているとは露知らず、ワナワナと震えるゴブリンスレイヤー。

「お、俺は……ゴブリンだった？ 俺は、ゴブリンなのか？ ゴブリンだったのか？」
うわ言のように繰り返す。

まるで信じ難い話だが、これが事実であると示すかのように、ゴブリンスレイヤーの周りにいるのは誰も彼も「ゴブリン」ばかりだった。

彼もゴブリン、彼女もゴブリン、貴方もゴブリン……ならば「俺」も「ゴブリン」なのではないだろうか？ 徐々にそう思い始めてしまうゴブリンスレイヤー。

ゴブリンスレイヤーは「ゴブリン」というワードに、異状なまでの「執着」を感じていた。それは、自分自身の種族が「ゴブリン」だからなのだろうか？ 自らの種族に執着を持つことは、別に不思議なことではない。ゴブリンスレイヤーは歪む意識の中でそう思った。

さつきから様子のおかしいゴブリンスレイヤーに、ゴブリンたちは困惑する。せっかく出会うことのできた外ゴブリンだというのに、なんだかさつきから悶え苦しんでいる様子。明らかに異常アリの兆候だった。

もしかしてひよっとするとこれは……。

「シユココオ……シユココオ……」

もしかしてもしかしてオマエさん「記憶喪失」ゴブか？

大事な大事なオマエさんの「過去」なくしてしまったゴブか!？」

記憶喪失というものはそんなに簡単に起きるものではない。相当過酷な環境に長時間晒され、大きなショックを頭部に受けるか、深刻な酸素不足に陥るか、ヘンな薬品を大量に摂取しない限り、滅多に起きるものではなかった。そしてゴ布林スレイヤーはその全て当て嵌まっていた。

いったいこの外ゴ布林の身に何が起きたというの？ 事情を知らぬゴ布林たちがそう心配する。ゴ布林スレイヤーはまだ俯いて震えていた。

「シユココオ……シユココオ……」

どうやらこうやらこの外ゴ布林さん なんだか記憶喪失みたいゴブ」

「えーっ！ それはとてとて可哀想!」

「なんたることか一大事!」

「過去」をなくしては「今」も「未来」も見えはしない」

「どうにかこうにかなんとかしてやらねば!」

「そうゴブ そうゴブ! 記憶を失くした外ゴ布林 助けてやらねばゴ布林の名が

「廃る」

「然り然りその通り！」

「さあみんなで救おう外ゴブリン よそ者だとしても変わらない ゴブリンならば関係ない ダサい名前でも問題ない みんなで救おうゴブリンスレイヤー！」

ゴブリンたちはやいのやいの言って、ゴブリンスレイヤーを助け起こした。

ゴブリンスレイヤーは平均的なゴブリンよりも大分体格が大きく、さらには体重も重かったが、パワードスーツ的な機能も持っている防護服のお蔭でチヨチヨイのチヨイだった。

ゴブリンたちに助けられ、なんとかかんとか立ち上がるゴブリンスレイヤー。まだフラフラとしているが、しっかりと二の足で立って、ゴブリンたちにお礼を言った。

「……すまない」

素直にそう言うゴブリンスレイヤー。

「気にすることないないゴブ 困った時はお互い様ゴブからな！」
「……そうか」

ゴブリンたちは立ち上がったゴブリンスレイヤーを、改めて上から下までまじまじと見つめた。

平均的なゴブリンよりも三周り以上も大きいその体格は、ゴルダナルのゴブリンたち

の中では頭六つ以上も抜けていて、非常に目立つ。子供ゴ布林と大人ゴ布林よりも体格に差があった。

外のゴ布林は育ちが良いゴブねくつと呑気に思うゴ布林たち。

みすばらしいがよくよく見ればかなり使い込まれたであろう「マスク」と、薄汚いが見たこともないデザインの「防護服」をしているゴ布林スレイヤー。うーん、これはどこからどう見ても完全にゴ布林！

最初見た時は古臭くてダサイと思ったが、改めて見るとこれはこれで味があつて悪くなかった。

「シユココオ……シユココオ……」

さてさてゴ布林スレイヤー……うーむ やつぱりこの「名」はいただけないゴブ

ゴ布林スレイヤーという「名」では 美男も美女も分からぬゴブ」

「……そうなのか？」

「そうなのゴブ そうなのゴブ！」

美男美女が分からねば ゴ布林スレイヤー 全くもってモテないゴブ！ 全くモテないブサゴ布林ゴブ それはイヤイヤ 嫌でしょう？」

ゴ布林スレイヤーは思った。別にモテモテになりたいわけでは——しかし、口下手な上に記憶喪失になっていたゴ布林スレイヤーには、咄嗟に否定することはできない

かった。

「シユココオ……シユココオ……」

「そうだそうだイイこと思い付いた

いつその事 これを機会に「改名」するのはどうゴブか？

我らがゴルダナルの文化ゴブリン イイこと 新しいこと 記念すべきこと ステ

キなことあると 「改名」する習わしがあるゴブ」

「ウムウム それはナイスアイディアゴブ

外から来たゴブリンスレイヤー これを機に「改名」してみるみるゴブ！」

「……改名？ どんな「名」が良いんだ？」

根は真面目なゴブリンスレイヤーは、ついうっかりそんなことを訊いてしまった。

ゴブリンスレイヤーの台詞に、ゴブリンたちは大いに盛り上がる。名付けはゴブリン

にとって最高に名誉なことであり、最高に楽しい娯楽だったのだ。

ゴブリンたちは口々にゴブリンスレイヤーの新たな「名」を考える。記憶を失くした

から「アムネシクス」。風来坊っぽいから「サマヨエリクス」。眠りこけていたから「スリー

ピクス」。森の外のから来たので「アウトサイクス」。

色々なアイディアが飛び出してきたが、結局、最後に選ばれたのは「旧名」を

大事にして、単純にもじった「ゴブスレニクス」だった。

「シユココオ……シユココオ……」

今日からこれからオマエさんは「ゴ布林スレイヤー」改め「ゴブスレニクス」ゴブ
！ ゴ布林スレイヤーイクスを略して ゴブスレニクスゴブウウ!!」

ゴ布林たちが大歓声をあげる。

「俺の名は……ゴブスレニクス……」

噛みしめるようにそう言うゴ布林スレイヤー改めゴブスレニクス。

「早速気に入って貰えたようで ゴブたちも満足ゴブ！」

さてさてすつかりイケメンになったゴブスレニクス どうやらオマエさんは「記憶喪
失」の疑いがあるゴブ」

「シユココオ……シユココオ……」

でもでも安心するとイイ 同族のゴブたちが付いているゴブからな！」

「そいじゃあオマエさんは とりあえず詳しい診察を受けるために 今から「マツド
マツデイクス診療所」に……」

その時、胃の中が空っぽだったゴブスレニクスのお腹が、ぐうううつと鳴った。それ
に合わせてゴ布林たちのお腹もごぶうううつと鳴る。

「……その前にひとまず食事にするゴブ！ 腹が減っては仕事も趣味も 記憶を取り戻
すこともできないゴブ！ それじゃあ さっさと向かうゴブ！」

そうしてゴ布林たちはウンウンと頷くと、再びクツクノックス大食堂を目指して移動し始めた。腹が減っては仕事はできぬ、趣味もできぬ、過去を思い出すこともできぬ。そんな唄を即興で歌いながら、ゴ布林たちはゾロゾロと食堂に向かうのであった。

そして、そんなカレらに連れられたゴ布林スレイヤー改め「ゴブスレニクス」も、フラフラと食堂へ移動するのである。

*

*

クツクノックス大食堂では、ゴ布林たちが整然と列を作り、専用のトレイを持ってワイワイと順番を待っていた。

中には愛用の自家製トレイを持っているゴ布林もいるらしく、木製だったり、金属製だったり、なんだか良く分からない素材だったり、実に多種多様な装いだった。

そしてその最後尾に、ゴブスレニクスは並んでいた。

なぜこんなことになったのか自分でもよく分からない。流れに身を任せていたら、いつの間にかこうなっていたのだ。

一緒に連れられてきたゴ布林たちに促されるまま、用意されていたトレイを持ち、列に並ぶゴブスレニクス。瞬く間にゴブスレニクスの後ろにも、ゴ布林たちの長蛇の

列ができた。

前にもゴ布林、後ろにもゴ布林、右にも左にもゴ布林ゴ布林。地面を覆い尽くさんばかりのゴブリンの群れに、ゴブスレニクスは思った。やはりこれは、俺も「ゴ布林」なのか？

ゴブリンの数は、ぱつと見ただけでも余裕で「百」は超えていた。下手をすれば「千」に届いているかもしれない。しかもそれは食堂にいるゴ布林だけの話で、普通に考えればもつというであろうことは、容易に想像できた。

何故だか理由は不明だが、ゴブスレニクスはその事実に言い知れぬ恐怖心を抱く。なぜこんなにも「ゴ布林たちがいることが怖い」のか、さっきまでの体調不良とは違う理由で、体がブルブルと震えた。

「シユココオ……シユココオ……」

そうビツクリするもの無理ないゴブ　なにせ「記憶喪失」ゴブからな

でも安心するとイイゴブ　別にここに危険はないゴブよ　美味しい食事があるだけ
ゴブ」

それでもゴブスレニクスの震えはとまらなかつた。言いようのない複雑な感情が彼を支配する。

人知れぬ原生林の奥底で、ゴ布林たちが社会を形成し、文化を築いている。規律

だった行動をし、明らかな秩序が生まれていた。あのゴブリンが文明化している。あの「ゴブリン」がだ。

ゴブスレニクスはそれが何よりも恐ろしかった。だがしかし、どうしてこんなにも恐ろしいと感じるのか、それが分からなかった。

記憶の中が真っ白で、何もかもがフワフワとしている。そんな中でも僅かに浮かんでくる情景は、薄汚い格好をして、卑しく顔を歪めた小鬼の姿だった。

そうだ、「ゴブリン」と呼ばれる生物は、そんな下劣で卑猥な種族だったはずだ。「俺」の周囲にいるこの「マスクをしたゴブリン」は、本当に俺の知っている「ゴブリン」なのか？俺は何かどうしようもない勘違いをしているのではないか？

ゴブスレニクスは頭を押さえこんだ。「マスクをしたゴブリン」。何処かの誰かに、そんなゴブリンの話聞いた気がする。

確かそれは――

「グッ……」

頭蓋骨の奥から激痛が響き、浮上しそうだった「記憶」が沈殿していく。どうやら「過去」を思い出すには、もう少し時間がかかるようだった。

いつの間にかゴブリンたちの列は短くなっていて、その大群の割にはスムーズに消化されていた。気付けばもう、ゴブスレニクスの番になっている。

鼻が曲がりそうになるほどに独特な匂いがゴブスレニクスに襲いかかり、彼の嗅覚を死滅させた。なんという匂いだろうか。とてもじゃないが食欲をそそる匂いではない。独特すぎて吐き気がしそうだった。

悶絶するゴブスレニクスに、マスクの上にわざわざマスクをした給養ゴ布林が、カウンスター越しに訊いてくる。

「シューコオ……シューコオ……」

ん？ オマエさん あんまり見ないマスクゴブね 新顔さんゴブか？」

「あ、ああ……ゴブスレニクスという……」

「ゴブゴブ そうかそうか「ゴブスレニクス」ゴブか 中々イカした「名前」に「マスク」

ゴブ オマエさんは体が大きいから いっぱい食べるゴブ！ さあーんとお食べ
！」

給養ゴ布林がお皿にドカツと「何か」を入れて、ゴブスレニクスに渡してきた。お皿にはドロっとしてグチャっとした粥状のモノが山盛りに盛られている。

これは食べ物なのか？ ゴブスレニクスはその摩訶不思議な不定形の物体を見て思う。

これはゴ布林たちの日常的な朝食「ゴブミール」だった。見た目も味もゴ布林好みの味付けで、ゴ布林たちにはお馴染みの料理だ。ちなみにニンゲンが食うもので

はない。

目眩がしつともゴブスレニクスがさらに前に進む。

進んだ先にいたのは、これまたやっぱりマスクの上にマスクをした給養ゴブリンで、素早い手付きでゴブスレニクスのトレーに「何か」を載せてきた。

「シューコオ……シューコオ……」

オマエさんツイてるゴブな！ 大人気の「ラプトルの臭み焼き」は オマエさんで最後ゴブ この後は残念無念の「ボイルドエッグ」ゴブ！

「ええーそんなー殺生なく！ と後ろのゴブリンがシヨックで叫ぶ。ものスゴイ異臭を放つ肉塊が、ゴブスレニクスのトレーに載せられていた。

「……交換するか？」

ゴブスレニクスが後ろに並んでいたゴブリンに訊く。

「えっ!? ホント良いゴブか!？」

「いやーオマエさんとてとていいゴブリンゴブな！ ありがとうサンキュー愛しているゴブ！」

ゴブスレニクスはボイルドエッグを受け取って、前へ進んだ。進んだ先にいたのはやはりマスクの上にマスクをした給養ゴブリンで、ゴブスレニクスにも見覚えのあるものを配っていた。

少なくとも、見た目だけはゴブスレニクスが知っているモノだった。

「これは……チーズか？」

給養ゴブリンに訊く。

「シューコオ……シューコオ……」

その通り　いう通り　ご明答　これはゴ布林秘伝の「ゴ布林チーズ」ゴブ

ステキな匂いに　ステキなお味　きつとオマエさんも夢中になるゴブ」

しかしながらゴブスレニクスには、とてもじゃないが夢中になれそうな匂いはしなかった。ツンと刺激する腐臭がゴブスレニクスの鼻を貫く。

配給はこれで終わりのようで、後は思い思いのドリンクをセルフで選ぶだけのようだった。独特な色と匂いのお茶や、赤黒い謎の液体、青白いゴゴボコした飲み物など、兎に角いっぱいある。どれもゴブスレニクスの舌には適しそうにもない。

幸いにも「水」があつたので、ゴブスレニクスはそれを側に備えてあつた容器に入れた。水は信じられないくらいに冷たく、容器越しでもその冷気を感じ取れた。驚くべきことだが、飲料水は幾らでも飲めるようだ。

食堂の席はゴ布林たちで埋め尽くされていて、ワイワイゴブゴブと仲睦まじげに会話を交わしている。

ゴブスレニクスは一瞬立ち止まり、空いている席を探した。

「シユココオ……シユココオ……」

おい　おい　ゴブスレニクス！　そうだそうだ　こっちだゴブ〜」

一緒に食堂に来ていたゴ布林たちが、そう言って手招きしてくる。

他に空いている席もなさそうだったので、ゴブスレニクスはフラフラとカレらの元へ向かった。

ゴブスレニクスが席につくと、ゴ布林たちは思い思いに適当な祈りを捧げて、食べ始めた。ゴブスレニクスもそれを真似て、トレーに乗っている朝食らしき物体を食べ始めようとする。

「……………」

マスクが邪魔で、上手く食べることができない。無理やりマスクの隙間から食べようとする、隣のゴ布林がヤレヤレと様子で言ってきた。

「シユココオ……シユココオ……」

なんだなんだオマエさん　その様子じゃ　ゴ布林流の食べ方も知らないゴブか？」
「……すまない、そのようだ」

「まあまあ　謝ることはない　そんなことはない」

オイラが教えてあげるから　ちよつと真似してみるゴブ　さあ！　こゝろゴブ」

「こゝろか？」

「いやいや こうゴブ！」

「……………こうか？」

「おいしい！ こうゴブ！！」

「……………こうか？」

「おお！ そうゴブ そうゴブ！ オマエさん 中々に飲み込みが早いゴブな！ それならスムーズに食べれるゴブでしょ？」

「ああ、そうだな」

そんなわけでゴブリ流食事法マスターしたゴブスレニクスは、ゴ布林ぽく食事を再開した。

まずは「水」——乾ききった体に、冷えきった水が染み渡る。色だけではなくその味までも澄み切っているようだった。非常に美味しい。こんなに美味しい水を飲んだのは初めてだったかもしれない。記憶喪失だが。

続いて「ボイルドエッグ」——普通の固茹で卵の味がした。ハードボイルドな感じがする。良質なタンパク質を摂取したからか、鋭気が戻ってくる気がした。

次に「ゴブミール」——ワナワナと震えるスプーンでそれをよそう。マジマジと見つめる。見つめて、意を決してそれを食べる。咀嚼。匂いの割には味はしなかった。無味だ。何の味もしない。

最後に「ゴ布林チーズ」——記憶はないが、自分は乳製品に少し拘りがあるようだ、とゴブスレニクスは自己分析する。鼻が曲がるほどの恐ろしい臭いだが、もはや嗅覚は麻痺していた。食堂中に匂いが充満しているのだ。ゴクリと息を呑んで食す。

「ハ、これは!?!」

確かに匂いは果てしないが、その分コクが段違いだった。

思わずゴブスレニクスがガタツと立ち上がる。長身のカレが立ち上がると、食堂中のゴブリンの注目の的だった。

ゴ布林たちが何だ何だつとゴブスレニクスを見つめる。そしてゴ布林たちの視線を集めるゴブスレニクスは、そのまま何も言わずスツと座った。一瞬間があったのち、何事もなかったかのように、ゴ布林たちの食事が再開される。それくらい衝撃的な「味」がした。

思ったよりもイケるものだな……ゴブスレニクスは静かにそう思う。嗜好が一致するなら、やはり俺はゴ布林か？ そんなことさえも考えてしまうゴブスレニクスであった。

「シュココオ……シュココオ……」

どうやらどうやらその様子 すっかりこつきり気に入ったみたいゴブね」

「『外ゴ布林』の口に合うか心配だったゴブが 杞憂だったみたいゴブ」

黙々と平らげるゴブスレニクスを見て、ゴ布林たちはそう言った。

「その「外ゴ布林」というのは？」

「ああ オマエさんは記憶喪失だから忘れてしまってるのかもしれないが オマエさんは 森の外から来た「外ゴ布林」なのゴブよ」

「森の、外のから来た？」

「そうゴブ そうゴブ」

オマエさんは リトルシャイア初めての「外から来たゴ布林」ゴブ 初ゴ布林ゴブ」

「アンタたちとは違うのか？」

「全然そんなことはないゴブ！ 確かに見た目はちよいと違うが ゴブたち一緒のゴ布林ゴブ！ みんな同じお仲間さん」

「……そうか」

ゴブスレニクスはズズツと「ゴープミール」を噉って答えた。

「なんにせよどうにせよ 腹ごしらえが終わったら 一度「診療所」に行ってみるゴブ！ きつとそこで オマエさんの「記憶喪失」をどうにかする方法も 見つかるゴブ！」

「……ああ、そうだといいな」

もう一度ゴブスレニクスは「ゴープミール」を噉った。全く味はしなかったが、思っ

たよりも美味いと感じた。

ゴブリンのような人間

「これは、心因性の記憶障害ゴブね」

白衣を身にまとい、ひととき大きなモノクルサイトを、赤く、怪しく発光させているマッドマツディクスが、ゴブスレニクスにそう下した。

さながらマッドマツディクスの姿は、マッドサイエンティストのような風貌である。それもそのはず。かのマッドマツディクスは、その名が示す通り、リトルシャイアーのマッドなサイエンティストなのである。

「心因性？」

僅かな間があつた後、ゴブスレニクスが問う。「記憶障害」という意味はなんとなく理解できるが、「心因性」という言葉は初耳だった。

「精神的ストレスや、心的外傷トラウマによって引き起こされる、症状全般のことゴブよ」
おそらく、きつとオマエさん、相当怖い目にあつたゴブよ」

マッドマツディクスが両手をジタバタさせて答える。何かのジエスチャーぽくもないが、特に意味はなようだ。ゴブリンの伝統的な会話法である。

「治るのか？」

最も重要なことを、ゴブスレニクスが質問する。

「もちろん もちろん 治るゴブ！」

脳波に異常はないゴブし 認知症や解離性障害の疑いもないゴブよ！

極度の精神的ショックによる 一時的な記憶喪失だろうゴブから そのうち自然と治るゴブ！」

「……そうか」

そうゴブスレニクスは、吐き出すように小さく呟いた。

「シユココオ……シユココオ……」

それでも これでも いろいろと 不安でしょう 心配でしょう

それなら これなら 提案が！

やるなら やるなら 催眠療法や薬物治療 あるあるゴブが いかがゴブ？

マッドマツデイクス的には 是非とも被検体になってくれると ハッピー嬉しい
ありがたいゴブ！」

そう言われてゴブスレニクスは、さつきから部屋の片隅にさり気なく置かれている、
“怪しげな催眠道具” や “ポコポコ泡出すヤバめな薬品” をチラ見した。

もしかしなくとも、嫌な予感がする……。

ゴブスレニクスは再びマッドマツデイクスと向き合おうと、きつぱりとした口調で言っ

記憶があやふやな上に、自分がゴ布林であることに違和感は有りまくりだったが、周りのゴ布林たちが言うには、どうにもそうらしい。

「ならオマエさん リトルシャイアは初めてゴブな？」

ここには “働かざる者食うべからず” という「法」があるゴブ

記憶喪失といえども ここで暮らしていくなら 働かないとご飯は食べれないゴブ” 悠々自適でマイペースに見えるゴ布林社会といえども、ニートは断固として許さない主義なのであった。ゴ布林社会もそこそこ世知辛いのである。

とは言えども、リトルシャイアのゴ布林たちは生来より勤勉で、集団に対する奉仕精神が本能的に高いものだったので、殆どのゴ布林たちは、全くこの「法」を意識したことはなかった。

そんな中でも、数少ないおサボリ精神を持つゴ布林でさえ、 “より良い休息法を研究しているゴブ”、などというあからさまに怪しい名目でも、ギリギリ働いている認定されるので、カレらの基準は結構ガバなものだった。

何にせよ、リトルシャイアで生活するには、何らかの形で “働いて”、カレらの社会に “貢献” しなくてはならない。それがたとえ、記憶喪失中のゴ布林であつても、だ。

「シュココオ……シュココオ……」

そんなワケで こんなワケで ゴブスレニクス

オマエさん なにか好きな「仕事」や「趣味」はないゴブか？」

マッドマツディクスの問いに、ゴブスレニクスは一瞬考え込む。しかし、考える必要などないことに直ぐ気付いた。

「ない……と思う。なにせ記憶がないものでな」

「そういえば そうだったゴブね なんとも記憶喪失つてのは 難儀なものゴブ

まあこの際 いい機会だと思って いろいろ試して 好きなコトを見つけてみるみるゴブ

最悪 マッドマツディクスの実験体……ゴブンゴブン ゴブが面倒みてやってもいいゴブ」

「いや、それは遠慮しておこう」

秒で断るゴブスレニクス。心底残念そうなマスクをして、マッドマツディクスはガツカリした。

「シュココオ……シュココオ……」

そういうことなら とりあえず 今後のことは “コイツ” に相談するといいゴブ」

そう言うマッドマツディクスが、おもむろにピコンつと三次元ディスプレイを起動してみせた。青白い光線が軌道を描き、空中に何か投影していく。はたして現れたのは、何処にでもいそうな至って平凡なゴブリンだった。

空間に映し出されたゴブリンが、ゴブスレニクスの目の前でクルクルと回旋している。

「彼は？」

ゴブスレニクスが仰ぎ見て訊いた。

「その名も この名も カレの名は “アルデニクス” というやつゴブ！」

「アルデニクス？」

「何かとゴブたちの世話を焼く まあ一種の相談役みたいなやつゴブ

大抵の困りごとは コイツに丸投げ……任せるのが ここの流儀ゴブ

きつと力になってくれるでゴブよ！」

投影されていた立体映像が、マッドマツディクスの「丸投げ」という言葉に反応したのか、「えっ!？」というリアクションをした。まるでこの場にいるかのようにリアルな反応だ。

「……そうか、わかった」

ビツクリする3Dアルデニクスを華麗にスルーして、ゴブスレニクスは頷く。

「シユココオ……シユココオ……」

それじゃあ マッドマツディクスは “ムキムキマッチョになる新薬開発” とかで忙しいゴブから お大事にゴブ」

*

*

リトルシャイアの実質的な指導者リーダーと言っても過言ではないはずのアルデニクスは、今日もとてとて何処かで発生した厄介事を解決したり、ゴブリンたちに悩み事を相談されたりして、いそいそ忙しくしていた。

さながら、アルデニクスが憧れる「光の戦士」のような仕事ぶりだ。

かの「光の戦士」にまつわる様々な逸話は——正に八面六臂に大活躍な、スーパーウルトラな逸話だ——話に聞くだけでは「スゴい」とか「立派だ」としか思えないものであったが、こうして我が身になって体験してみると、中々どうして大変である。

あつちでゴソゴソこつちでゴロゴロ、そつちもこつちもシツチャカメツチャカ、いそいそせわせわ忙しない。しかし、それでもアルデニクスは気にしない。大変だからって気にしない。憧れの光の戦士だって、きっとそう思ったに違いない。

そんなアルデニクスのところに来ては、何を隠そうゴブスレニクス。無口いえども無駄に存在感溢れるゴブスレニクスの気配に、素早く気づいたアルデニクスは、その姿を見るなり衝撃を受けた。

どどどどうしてこんなところにニンゲンさんが!? これはビックリたまげたな!

そう、それなりに世間に詳しいアルデニクスは、ゴブスレニクスの正体を、見事に一発で見破ってみせたのだ！

実はゴブスレニクスの正体は、ゴブリンではなく「人間」だったのだ！ いわゆる、ゴブリンのような人間ってヤツである。エオルゼアを西へ東へ旅をして、“外”の世界をよく知るアルデニクスにしてみれば、ゴブスレニクスの正体を見破ることなど、朝メシ前だったのであった。もつとも、もう朝メシは食べてしまっていたので、朝メシ前ではないのだが……。

アルデニクスのところに来たゴブスレニクスは、どこからどう見ても鎧を着た「ヒューラン♂」だった。確かに着込んでいる装備は標準的なゴブリン装備に似てなくもないが、明らかに骨格が人間の“ソレ”である。一体全体、いつの間に紛れ込んでしまったのか。

「シユココオ……シユココオ……」

オマエさん　オマエさん　このこのアルデニクスに　ナニナニ何か　用ゴブか？」

とはいえ決して慌てることなく、慎重に言葉を選んでアルデニクスは問いかける。ニゲンさんが紛れ込んでしまったのは由々しき事態だが、まだ慌てるような事態ではないし、時間ではないのだ。

「俺は、ゴブスレニクス……マッドマツディクスに、ここに行けと言われて来た。ここで

アルデニクスというゴ布林に相談しろ、とな。アンタがアルデニクスで合っているか？」

「……そうゴブ そうゴブ そうゴブよ！」

ゴブがアルデニクスで合ってるゴブよ！

さてさて ならなら ゴブゴブゴブ アルデニクスに相談とは いったい全体なんの相談ゴブ？」

ゴブスレニクスの見た目はどう見てもヒューラン♂だったが、見た目がヒューラン♂だからといって、アルデニクスは特に鼻屑はしないゴ布林だった。

世界はとてとて広く、ゴ布林以外の種族もとてとていっぱいいる。むしろ全体から見れば、ゴ布林族はまだまだとてとて少数派だろう。そのことを、世界中を旅してきたアルデニクスは、良く良く理解していた。

だから、どう見ても人間であるゴブスレニクスにも、いつもと変わらぬ姿勢で対応する。

ゴブスレニクスがなにゆえここまで迷い込んでしまったのかは、まだ分からない。しかし、どうやらお手製のゴ布林装備を身にまとっているようだし、名前の雰囲気もゴ布林ぽかったから、きっと志を共にする「同志」なのだろう、とアルデニクスはこっそり得心した。

彼の地——リトルシャイアのモデルにもなった——「イデイルシャイア」でも、こういったことは良く良くある話だったし、まあギリセーフだろう。

「どうやら俺は、記憶喪失らしい」

突然の衝撃発言に、アルデニクスはびつくらこいたリアクションをした。まさかまさかの初手爆弾発言である。

「あれま それは 一大事！ いったいナゼナゼそんなことに!？」

「分からない。マッドマツディクスには、〃心性の記憶障害〃と言われたが……」

そう言われただけで、エオルゼアの冒険者でもあるアルデニクスは、大体のことをまると察した。エオルゼアでの冒険者稼業において、察しが良いことは必須技能である。察しが良くなければ、到底生き残ることはできない。ましてや、何かと言葉を省きがちなゴブリン族なら、なおさらである。

「なるほど なるほど そうゴブか

それなら これなら 分かったゴブ

このアルデニクスが オマエさんの力になるなるゴブよ!」

そう言つてアルデニクスが力強く手足をバタバタさせた。その頼もし気な発言に、ゴブスレニクスといえども少しばかりは勇気付けられたし、ほっと一安心したのもまた事実だった。

あやふやな過去に拭いきれぬ違和感。ゴ布林たちが矢鱈と親切で友好的だったお蔭でパニックになることはなかったが、不安なものは不安で仕方なかったのが正直なところなのである。

「俺は、森の外から来た……ようだ」

「ほうほう ほうほう そうゴブか」

納得といった感じで頷くアルデニクス。

森の「外」から来たならまだしも、森の「中」から来たとしたら、それはとてとてえらいこつちやな事態である。危うくネオ・ファウストの防衛アルゴリズムが、大改修に迫られるところだった。

ゴブスレニクスの話は続く。

「……どうやら俺は記憶喪失らしい」

「さつきも聞いたゴブが そのようゴブね 大変ゴブ」

「……それで、記憶を取り戻したいと思っっている」

「それはそれは 当然の成り行きゴブな」

「だがマッドマツディクスに抛れば、記憶は時間が経てば自然と戻るそうだ」

「おお それは良かったゴブ！ とててな朗報ゴブな！」

我がことのように喜ぶアルデニクスを見て、ゴブスレニクスは静かに頷いた。

「……それで、記憶が戻るまでの間、どうすればいいのか、身の振り方を教えてほしい」
「そうか そうか そういうことゴブか」

さてさて オマエさん 「名」は ゴブスレニクスでよかったゴブな？」

「そうだ、俺はゴブリンスレイ……いや、ゴブスレニクスだ」

何を言いかけたゴブ？ とアルデニクスは内心思ったが、空気を読んで野暮なツッコミは止めておいた。空気を読むことも冒険者の必須技能であるし、特に、アルデニクスは空気の読めるゴブリンを自称していた。

「それなら これなら ゴブスレニクス オマエさんに いくつか質問ゴブ」

オマエさん ここで暫く リトルシャイアで暮らしてみるゴブ？」

首を傾げて訊くアルデニクス。短期でも長期でも相応の「仕事」はあるが、確認しておくことに越したことはない。

「できればそうしたいと思っている。行く宛ても、今のところはないから……」

「なるほど なるほど それは これは 大歓迎ゴブ！」

リトルシャイアにも良い刺激になるゴブから！ ゴブスレニクス 大歓迎ゴブ！」

「そ、そうか」

何やら大歓迎な様子アルデニクスを見て、ゴブスレニクスはなんだか不思議な気持ちになった。嬉しいような恥ずかしいような……もしかすると、これまで碌に歓迎され

ない人生……いやゴブ生を送ってきたのかもしれない。

さてさてそんなことはお構いなしに、アルデニクスはジタバタと話を続ける。

「それなら これなら ゴブスレニクス

オマエさん 「好きなこと」や「得意なこと」はあるあるゴブか？」

マツドマツデイクスにも訊かれたが、改めて言われてゴブスレニクスは考えた。腕を組んで考えた。霞んだ記憶の中を模索して、「何が好き」で、「何が得意」だったのかを、今一度思い出そうとした。

しかし――

「……分からない」

答えはさっぱり浮かんでこない。ゴブスレニクスの記憶の中は、いまだ空っぽのままだった。

「……そうゴブか」

少しだけ悲しそうなマスクをしたゴブスレニクスを見て、アルデニクスがそう慰めるように言う。

「けれども それでも 心配するな！

分からないなら見つければいい！ 見つからないなら探せばいい！ 空っぽなら埋

めればいい！

今はなんにもなくつても　いつか分かるさ　“大切なモノ”！」
アルデニクスの励ましに、ゴブスレニクスは勇気付けられのか力強く頷いた。

「ああ、そうだな」

「シュコオ……シュコオ……」

そういう　こういうわけだから　ゴブスレニクス　ここで色々体験してみるゴブ！

そうすりやそのうち　“好きなこと”も　“得意なこと”も分かるゴブ！　そうすりやきつと　記憶も思い出も　キレイさっぱり元通りゴブ！」

斯くして、記憶喪失のゴブスレニクスによる、楽しい楽しいゴブリン職場体験が、始まることとなった。

*

*

ゴブスレニクスは寡黙だが誠実な性格だったようで、どんな仕事でも真面目にこなし、どんな趣味でも興味を示して、とてとて良く働いた。

ゴブスレニクスの「防護服」の性能はそれなりで、ハッキリ言ってしまうえばイマイチだったが、その標準よりも遥かに大きすぎる体格を十分に活かして、運搬作業や採掘作業などの力仕事も、難なくこなしてみせた。

そんな精力的に働くゴブスレニクスのことを、ゴ布林たちは微笑ましく見守り、幾ばくもしない内に、ゴブスレニクスはリトルシャイアに受け入れられていった。

そんな新参ゴブリンのゴブスレニクスに、リトルシャイアのゴ布林たちは良く世話を焼いた。特に真つ先に世話を焼かれたのは、ゴブスレニクスの「防護服」である。

素材も性能も貧弱すぎるゴブスレニクスの「防護服」は、ゴ布林たちからしてみれば危なっかしいの一言で、何をするにしてもゴ布林たちをどきまぎさせた。

それなので、ゴ布林たちは「ゴブたちでゴブスレニクスの「防護服」をなんとかかしてあげるゴブ！」ということになって、そんなこんなでゴブスレニクスの「防護服」は、ゴ布林たちによって魔改造が図られることになったのである。

「シユココオ……シユココオ……」

というわけゴブから　ゴブスレニクス

何か何か　リクエスト　あるあるゴブか？」

「このまま、という選択肢は——」

「ないないゴブよー！」

「……そうか」

ゴブスレニクスは謙虚なのか、あるいは自身の装備に無頓着過ぎるのか、どういふワケかゴ布林たちの提案を頑なに拒否しようとしたが、やる気その気元気になったゴブ

リンたちの暴走を止められるほどではなく、最終的には折れる形になった。

あれも、これも、それも、どれも……終いにはドンドン悪ノリし始めて、そのあまりにもアレな性能に、ゴブスレニクスは「敵に奪われた場合の危険性について云々カンヌン」と力説を述べて改めて固辞しようとしたが、「生体認証システムにおける盗難防止機能」とかいう意味不明な説明を受けて、見事に轟沈した。

斯くして、ゴブスレニクスの「防護服」は、見た目こそ全く変化はないが、もはや別の「何か」に変態した。

「シユココオ……シユココオ……」

——そんなワケで 以上で「真・防護服」の機能説明を終わるゴブが 何か質問あるあるゴブか?」

「……いや、ない」

とはいえ、それをゴブスレニクスが使いこなせるかどうかは、別問題である。

リトルシャイアのゴブリンたちには、各々に「個室」が与えられていて、もちろんゴブスレニクスにも「個室」があてがわれていた。

ゴブリンたちの「個室」には、生体認証で入る扉以外には、出入り口と呼べるものは全くなく、容易に中の様子は窺えないようにできている。それは、「素顔」に関して強烈な忌避感を持つ、ゴブリン族ならではの風習からであり、「個室」は、嚴重なまでにセキユ

リティーが敷かれ、プライバシーが確保されていた。

新参ゴブリンであり、数少ない外ゴブリンだと思われるゴブスレニクスは、想像以上に注目的であり、さらには防護服の一件で、それなりに人気者になっていたためか、ゴブスレニクスが一人になれるのは、その「個室」に入っている時だけだった。

ゴブスレニクスにとって、一人になれる時間が少ないのは、なんともむず痒く、複雑な気分させるものだったが、決して悪いモノとも感じなかった。

記憶は掠れてしまっていて、まだ思い出すことはできないが、ゴブスレニクスはずっと一人ぼっちでいた気がする。

僅かに浮かんでくる思い出の中に友達はなく、もちろん、その中に仲間と呼べる者もない。それは、ただ単に記憶喪失のせいなのかもしれないが、それだけが原因ではない、とゴブスレニクスは感じていた。

それに対してここリトルシャイアでは、共に働くゴブリンたちに溢れ、仲間も多く、友達も、もしかしたら出来たのかもしれない。四六時中一緒にいるカレらは、こんな風に言うのは気恥ずかしいが、もしかするとこれが、家族と呼べるものなのかもしれない、とゴブスレニクスは思うようになっていた。

ゴブリンたちは仲間意識が高いながらも、プライバシーというものを大切にしていた。嚴重なセキュリティを誇る「個室」の存在もそうだが、決して「素顔」というも

のを詮索しようとはしないという部分に、それが良く現れているだろう。

ゴブスレニクスにとってそれは、とても新鮮な感覚だった。

“前にいた場所”では、ゴブスレニクスのマスクは何かにつけて脱がされそうになるモノで、「素顔」は常に危機に晒されているものだった。みんながみんなゴブスレニクスの素顔が気になって、ことあるごとに覗き見しようとしていたのだ。

ゴブスレニクスがそのことをゴ布林たちに話すと、カレらは口々に「なんて鬼畜な所業なんだゴブ！」と憤った。ゴ布林たちにとって、素顔を探ろうとするのは、万死に値する極罪なのだ。

別にゴブスレニクスにとっては、素顔を詮索されることは、そこまで嫌なことだとは思っていないが、ゴ布林たちの反応ももつともだと思っていて、そしてどちらかといえば、下手な詮索をしないゴ布林たちの方が、より好ましいとさえ感じていた。リトルシャイアの生活は、ゴブスレニクスにとって充実したモノで、心地よいものであった。夜、安心してぐっすり眠れたのは、とても久々なことだった気がする。

ここにはやるべき“仕事”がいくらでもあり、興味深い“趣味”がいくらでもあった。前いた場所では、やるべき事は“一つ”しかなかった。いや、やらなくてはいけない事だったかもしれない。

またゴ布林たちは、“学び教える”ということに至上の喜びを見出しており、新入

りゴブリンであるゴブスレニクスに対しても、積極的に教育を行ってくれた。

医学、薬学、農学、錬鉄術、数学、物理学、機工学、ゴブリ科学などに代表される一般学問から、錬金術、魔術、魔法、魔科学などの神秘学、音楽、美術、文学などのゴブリ芸術……多くの場合は、ゴブスレニクスには高度すぎて、一朝一夕では理解できない内容ばかりだったが、実践的な部分に関しては、ゴブスレニクスはよく学び、よく習得した。

ゴブリ火薬の調合や使用法、「青燐水」という燃える水、そしてその利用法、ゴブリタシクなどの乗り物の操縦法などが主な「ソレ」だ。

現在リトルシャイアでは、中心部にある古代遺跡である「リトルシャイア城」の改修工事が急ピッチで進められており、それゆえゴブスレニクスの成長はとてとてみんなに歓迎された。働き盛りのゴブリンは、いくらでも必要だったのだ。

リトルシャイア城の改修工事には、働きゴブリンも趣味ゴブリンも一丸となって作業に参加していて、これまでにない一大事業となっていた。

リトルシャイア城は古い建物でもあるせいか、「城」というよりは小さな「塔」のようにはしか見えないシヨボイものだったが、ゴルダナルのゴブリンたちにとってこの城は、「最初の家」であり「文明発祥の地」でもあったので、とてとて大切にされて親しまれていたので。

リトルシャイアの住民の一員として、ゴブスレニクスもこの名誉ある仕事に率先して参加し、とてとて真摯に作業した。

そうしてこうして、リトルシャイアでの日々は過ぎ去っていき、空っぽだったゴブスレニクスにも、“好きなもの”や“得意なもの”ができていった。いやもしかすると、ただ単に思い出してきただけなのかもしれないが……。

ゴブスレニクスは主に力仕事や農作業など、体を使う仕事を良く好んだ。また、研究者基質なのか知識の習得に貪欲で、良くベテランのゴブリンたちに質問したり、自ら実験を行ったりもしていた。趣味に関しても、どうやら「謎かけ」に関心があるらしく、良くゴブリンたちに謎かけを出して四苦八苦させていた。

だが、その中でも特に積極的だったのは、「ミートイートミート」に棲む家畜たちの世話で、もう滅多に外敵など出なくなっただけというのに、毎日律儀に夜明けとともに牧場の見回りをして、破損した柵がないか調べたり、外敵の足跡がないか探すなど、まるで生来の仕事であったかのように、熱心に取り組んだ。

「こうして牧場の仕事をしていると、なぜだか心が落ち着く……」

ちやうど様子を見て来ていたアルデニクスに、ゴブスレニクスはそう吐露した。

そんなゴブスレニクスをマジマジと見て、アルデニクスが言う。

「シユココオ……シユココオ……」

もしかするとオマエさん 外の世界では 牧場とかで 働いていたのかもしれない
ゴブ

とてとて手付きが 慣れてるゴブ

「そうか？」

「そうゴブ そうゴブ！」

筆頭管理ゴブリンのシエパーラポクスも えらく褒めてたゴブ！

〃ゴブスレニクスは 生まれついでの畜産家ゴブな” って！”

「……そうか」

言葉は濁したが、言われて悪い気持ちはしなかった。

穏やかな風が吹き、木々が揺れる。実に長閑な雰囲気だった。どこか懐かしい、不思議な気持ちがある。

もしかすると本当に、ゴブスレニクスはかつて牧場で働いていたのかもしれない。もしくは牧場に住んでいたか……。

「それにしても、ここには「牛」はいないのだな」

牧場を眺めながら、ゴブスレニクスはふとそう言った。

ゴブリンたちの牧場には、山羊や羊、豚、兎、鶏、養蜂、はてはウルフやラプトルなどの魔獣も飼われていたが、唯一「牛」だけはいなかった。

「シユココオ……シユココオ……」

ゴルダナル大森林 色々な獣 色んな魔物 いっぱいたくさん棲んでたゴブが

けれども けれども モーモー 牛だけは見つからなかったゴブ 残念無念また来

世ゴブ

ゴブスレニクスは 牛のコト 知ってるゴブか？」

「ああ、良く世話をしていた……と思う」

ゴブスレニクスにとって「牛」は、とてとて慣れ親しんだ家畜だったようだ。牛の乳で作ったチーズとシチュー……思い出の中にある、とても優しく懐かしい味。ゴブスレニクスはそれが大好物だった。

「シユココオ……シユココオ……」

それならこれなら 今度クックノックスに頼んで 作ってもらおうといいゴブ

牛の乳はないけれど 他の乳でいいのなら レシピさえあれば クックノックスなら作ってくれるゴブ」

「そうか？ では、期待しておこう」

ゴ布林たちの料理は、多くのものが無味乾燥で味気ないものや、独特すぎて得体の知れないものが多かったが、乳製品に関しては、ゴブスレニクスの口にまあまあ合っていた。中でもゴ布林チーズなどは、時折、禁断症状が出てしまうほどに大ヒットであ

る。

しかし、そうは言ってもその他の食品に関しては、残念過ぎる場合が殆どで、ただのゴブリンにとってはそうでもなかったが、ゴブスレニクスにとってみれば要改善事項であった。あまり食事に頓着しないゴブスレニクスであつても、だ。

そういつたワケで、早速アルデニクスのアドバイスを実行に移したゴブスレニクスは、なんとか思い出したレシピをクックノックスに伝えたと、少しだけヴァリエーション豊かな食事が出されるようになった。

ゴブスレニクスの食事情が、多少なりとも改善された瞬間である。

このように、ゴブスレニクスがゴブリンたちの知識を吸収する傍ら、ゴブスレニクスの持つ知識も、少しづつではあるがリトルシャイアの中に浸透していった。外の世界に興味津々なゴブリンたちは、よくよくゴブスレニクスの言葉に耳を傾け、積極的に自らの文化に吸収していったのだ。

ゴブスレニクスの持つ知識は、多くの場合、既存のものであることが多かったが、「古きを知り 新しきを知る」を合言葉に、ゴブリンたちは決して無碍にはしなかった。

そうやって新たに取り入れられた知識や技術は、「外界風」とか「ゴブスレ流」などとも呼ばれ、リトルシャイアのゴブリンたちに慣れ親しまれていった。

ゴブゴブ言わない「外界風」の喋り言葉や、あまり派手でない古風な見た目のマスク

と防護服——ゴブ並外れた身長や、ゴ布林らしからぬ寡黙な性格も相まって——ゴブスレニクスは一躍リトルシヤイアの人気者に躍り出ることとなる。

リトルシヤイアのゴ布林たちは、どうにかこうにか「ゴブゴブ」言わない喋り方をマスターしようとしたり（しかし、当然ながらどう頑張ってもゴブゴブ言ってしまうサガだった）、わざわざ見た目を古風なマスクと防護服に換装したり、若者ゴ布林たちを中心に、ゴ布林たちはこぞってゴブスレニクスの真似をしようといった。

なんやかんやで、ゴブスレ流の一大ブームの幕開けである。

渦中のゴ布林であるゴブスレニクスは、当然ながら、空前の人気者となり、少しばかり口数が少な目のゴブスレニクスであっても、そんなことはお構いなしに、ゴ布林たちは良く良く話しかけた。

あれこれ、それこれ、どここれ、そここれ……主に訊かれたのは、やっぱりゴブスレニクスの「記憶」に関する事で、外の世界に並々ならぬ関心を持つゴ布林は、ゴブがゴブがと我先に話を聞いた。

少しだけ思い出してきた記憶を頼りに、ゴブスレニクスは静かに語った。

「……多分俺は、牧場に住んでいた。そこには多くの牛がいて、毎日の食事はその牛の乳や肉を食べていた」

「ほえええ 外の世界もゴブたちと あんまりそんなに 変わらんゴブのね」

「ゴブゴブ 外の世界の牧場はどんなだったゴブか？」

「やっぱり完全自動式で ライン工のごとく管理されてたゴブか？」

「いや、ここよりももっと古くて、昔ながらと言うべき牧場だったと思う。視界の果てまで牧場が広がっていて、木でできた柵があり、その中に家畜がいて、牧草を食べる。俺は主に、その修理保全を行っていた……と思う」

ゴブスレニクスの話に、ゴブリンは盛りに盛り上がった。

「ゴブウウ そうなのか そうなのか」

それなら これなら 牧場は オマエさんだけで 管理していたゴブか？」

「……分からない。ただ、ここのようにハーベストドールの手を借りていたワケではないと思う」

ハーベストドールとは、パンツァードールを農作業用に改良した、非戦闘用機械人形のことだ。

「シユゴオオオ……」

そこらへんは ちよつとちよつと 遅れているゴブのかね」

「シユゴオ……シユゴオ……」

それは それは 当然のことゴブ！

なにせ なにせ 外の世界とは あの「見習い冒険者」級が跋扈する 混沌の地ゴブ

よ！

きつとゴブたちみたいだな テクノロジーに頼らなくても やっていけるんだゴブ！

な！ ゴブスレニクス！」

「……すまん、どうだったのかは、よく思い出せない」

少なくとも、ハーベスドールのような機械人形はなかったと思われる。

ゴブスレニクスは、更に記憶を探った。

「……確か、俺以外にも誰かがいたはずだ……赤い髪をした……「誰か」……そして、それと一緒にいる、「誰か」が……」

だがその顔も名前も、日差しに照らされた「影」のようになっていて、思い出すことができない。とても大切な誰かだったはずなのに、忘れてはいけない大切なヒトだったはずなのに、思い出すことができない。

「シユココオ……シユココオ……」

ここにきて ここにきて まさかの「赤毛」とは

きつとゴブスレニクスは その鬼のような赤毛に こき使われていたに違いないゴブ！」

ゴ布林たちにとって、「赤毛」は鬼門だった。「赤毛」は色々な意味で不吉の象徴だ。良いことにしろ、悪いことにしろ、碌なもんじゃない。

「……そうなのか？」

ゴブスレニクスは首を傾げた。

ゴブリンに「赤毛」が忌み嫌われていたとは、初耳だ。ゴブスレニクスのには、「赤毛」には良い印象しかなかった。とても優しい、安らぐ印象だ。

「きつと そうゴブ！ そうゴブ！」

きつと きつと ゴブスレニクスは

そこで受けてた ヒドいヒドい仕打ちに もうマヂ無理 耐えきれず

どうにか こうにか 命からがら 飛び出して 自由奔放 出奔 逃奔！

ほうほう体で逃げ落ちた その先 この先 あの先が

ここそこ そこここ リトルシャイアだったゴブ！

記憶を失ってしまったのは きつと その悪しき過去を忘れ去るため そして 安

堵感からゴブな！」

「……そう、なのか？」

熱弁するゴブリンの気迫に若干引きつつも、ゴブスレニクスは真面目に受け答えした。

「シュコオ……シュコオ……」

そんな冗談はさておいて 消えてしまった記憶の片隅に在るといふことは

きつと きつと ゴブスレニクスにとつて “大切なヒト” だったに違いないゴブ
 ！」

同席していたアルデニクスが、 “大切なヒト” という部分をさり気なく強調して、お
 もむろに言つた。上手いこと誘導して、ゴブスレニクスが記憶を思い出すのを手助けを
 してあげようという、アルデニクスなりのゴブ心からだった。

「大切な……か」

「それなら これなら もしかすると

その赤毛は ゴブスレニクスの番つがいだったゴブかもな！」

若者ゴブリンが、茶化すように言う。

「番？」

「恋人とか 結婚相手とか そんなステキな相手のことだゴブ

ゴブスレニクス オマエさん ニンゲンを番にするだなんて 命知らずというか

隅に置けないやつゴブね！」

他の若者ゴブリンが、そう鼻息荒く付け加えた。

「赤毛を番とか パネエゴブ！」

「ゴブスレニクス パネエやつゴブ！」

ジタバタと興奮した様子で言うゴブリンたち。

「モテモテ ゴブスレニクス 羨まけしからんゴブ

ちよつとや そつとくらい ゴブたち非モテゴブリンにも 分けてほしいゴブ」

一躍時のゴブリンとなっていたゴブスレニクスは、その個性的な見た目も相まって、中々にモテモテのゴブリンだった。なんでも、物静かでクールな感じが、今どきのゴブリン娘にウケウケらしい。ちなみに、クールなゴブリンも物静かなゴブリンも、本来なら存在しえない。

「別に俺はモテたいわけでは……」

「カーッ！ やっぱりモテるゴブリンは 言うことが違うゴブね!？」

嫉妬に憤怒する若者ゴブリンたち。とはいえ本気で言っているワケでもなく、一通り愚痴をこぼし終えると、誰ともなくゴブゴブと笑い出した。

ゴブスレニクスに番がいるらしいということは、まだまだ一人身の独身ゴブリン♂には朗報だったし、密かにゴブスレニクスに想いを寄せていた独身ゴブリン♀には悲報だった。

ちなみにアルデニクスは未だに独身ゴブリン♂の筆頭ゴブリンだった。なぜだ……リトルシヤイアでも最古参のゴブリンだというのに……。

ゴブリンたちが笑い合う中、ふとゴブスレニクスは物思いに耽った。

記憶の片隅にいる「誰か」

今にも泣き出しそうな顔をした「誰か」

赤い色の、長い髪の「キミ」

大切な「ヒト」

もしかするとソレを思い出せば、自分が何者だったのか、思い出せるかもしれない。

*

*

リトルシャイアに来て、ゴブスレニクスは優しさを知った。温もりを知った。安らぎを知った。

リトルシャイアのゴ布林たちは、気の良いヤツらだった。少なくとも、*“今”*のゴブスレニクスにはそう感じられた。

こんなにも多くの「誰か」と食事を共にし、こんなにも多くの「誰か」と一緒に働いたのは、初めてのことだった。

霞む記憶の中では確証はないが、それでも確かにそうだった。

彼らゴ布林たちは、口下手なゴブスレニクスにも気軽に声をかけてくれた。

打算や下心ない親切。いや、そもそも彼らは親切だとも思っていない。極々自然に、まるで十年來の親友であるのように、ゴブスレニクスに接してくれた。

それが嬉しかった。

ゴブスレニクスはずっと孤独だった。

誰かの優しさに触れただとか、誰かの温もりに包まれたとかいうのは、記憶喪失以前に皆無だった。

ずっと一人ぼっちで生きてきた。

孤独こそがカレの生き方だった。

いや、本当にそうだったか？

本当に一人ぼっちだったのか？

ゴブ——はずっと一人だったのか？

いや、決してそんなことはなかったはずだ。

記憶の片隅にいる「誰か」

そして、それよりもずっとずっと昔にいた、とつても優しかった「あのヒト」

誰よりも優しく、誰よりも偉大だったあのヒト。

ゴブスレニクスが一番好きだったあのヒト。

もうどこにもいないあのヒト。

だってもう、あの人は「ヤツら」に——あの醜くて、薄汚くて、卑猥で、憎たらしい

「ヤツら」に……

あの「小鬼」に——
ゴブリン

そこで、目を覚ました。

警鐘が鳴り響き、遠くの方から炸裂音が聞こえる。

ゴブリンたちが騒がしい。嫌な予感がする。

「なにがあつた!？」

個室を飛び出て、近くを通りかかったゴブリンに問う。

「シュココオ! シュココオ！」

なにもなにも 緊急事態ゴブ! 緊急事態ゴブ!

「緊急事態?」

「そう! ヤツの来襲ゴブ! 見習い冒険者のお出ましゴブ!」

行きて帰りしゴ布林

突如としてリトルシャイアにやって来た見習い冒険者たち。彼女たちは襲いかかる武装ゴ布林や防衛兵器たちを、千切つては投げ、千切つては投げ……無駄に高すぎる実力そのままに、破竹の勢いで侵攻していった。

人間離れた見習い冒険者たちの前に、あわれ、爆発四散するしかないゴ布林たち。ご自慢のネオ・ファウストもまさかの足止め程度にしかならず、ゴ布林たちは、よもやの劣勢を強いられていた。

「しかし、本当にこここのゴ布林たちが、あの『行方不明になった冒険者』に関わっているのでしょうか？」

長剣を腰に携えた凛々しい顔の女性が、そう問いかける。

「んん、分つかないけど、多分無関係じゃないと思うんだよね！」

「根拠は？」

「もちろん、直感です！」

「はあああ、全くあなたって人は……」

クソでかいたため息をつく女性。

彼女は、ヒトの間では「劍聖」とか呼ばれている凄腕冒険者だが、ゴブリンたちの間では、「見習い劍士」という名で通っていた。

「でも、勇者の直感は良く当たる。そうでなくとも、件の冒険者はゴブリンのエキスパートらしいから、ここにいる可能性は高い」

もう一人のパーティーメンバーである白フードの女性が、そう付け加える。

彼女も世間では、「賢者」とかいう称号を持ったためちやスゴい冒険者なのだが、やはりと言うかなんというか、ゴブリンたちには「見習い魔法使い」として認識されていた。「しかし、よりにもよって『ここ』とは……私にとって『ここ』は、並大抵の覚悟で来れる場所ではないのですが……」

「それは私も。勇者にとつては最高の遊び場かもしれないけど、私達にとつてみれば、魔王の本拠地に単身潜り込むに等しい。逐一付き合う身にもなつて欲しい」

「えええ、そこまでなの!? でもでも、あんな悲しそうな目をした子、放つてはおけないじゃん!」

そう声を上げつつ、「勇者」と呼ばれた「見習い冒険者」は、たまたま立ち寄つた「辺境の街」で偶然出会つた、*“悲しそうな目をした女性”*のことを思い出していた。

年頃は、おそらく二つか三つほど上。同じ赤毛だが、見習い冒険者とは違つて出るところ出て、女性らしい体つき。正直言つて羨ましい。そんな、*“素敵なお姉さん”*といつ

た印象の女性が、この世の終わりのような顔をして俯いていれば、きつと「勇者」でなくとも手を差し伸べたくなるものだろう。

聞けば、幼馴染の冒険者が、もう何週間ものあいだ行方不明らしい。いつものようにギルドに行き、いつものように冒険に出て、そしてそのまま、といった具合に……。

本音を言えば、こんなことよくある話だと思った。こんなご時世、冒険者が冒険に出たまま帰ることなく……なんてことは、そこら中に溢れている。特段、珍しい話じゃない。何もかもが、この世界では日常茶飯事な、よくある話だった。

ただ、彼女の場合、少しだけ事情が違うようだった。

なんとその行方不明になった冒険者というのは、まさかまさかの「ゴブリン専門」の冒険者だということではないか！

「それだけでもう、『ピン』っときちやいましたよね！」

「いつもいつも思うのですが、どうしてそれだけで『ピン』っとくるんですか？」

「世界三大勇者の謎。ここのゴブリンたちと同じ」

「あははーいやあ、照れるなあ！」

「いや別に褒めてないですからね？」

鋭いツツコミが見習い冒険者を襲う。

「まあ何にせよ、ゴブリンのことならゴブリンに……つてね！ 最悪、ここじゃないにし

ても、この子たちなら何か知ってるでしょ！ 多分」

「そんなこと言って、実際のところカレらの新兵器を楽しんでませんか？」

「まっ、それはそれ、これはこれってね！ せつかくの久しぶりの「冒険」なんだし、目一杯楽しまなくちゃ！」

そう明るくはにかんで、見習い冒険者にはこやかに笑った。

そんな感じで談笑していると、ウーウーつとけたたましいサイレンが鳴り響き、ゴブリンたちの襲撃が再開される。

「——つと、そろそろ前に進まないと！ 今回はちょっとシリアスな感じだから、マジ顔キメて行くよッ！」

状況は全然シリアスどころかシリアルな感じだったが、見習い冒険者に言われたとおり、彼女たちはマジ顔をキメた。

瞬間——陰が射す。

恐る恐る見上げると、そこには身の丈10mはあろうかという巨大ゴブリンが、フンスフンスつと鼻息荒く立ち塞がっていた。

「シュゴオオオオオオオオ!! テンションMAXゴブウウウウウウ!!」

彼女たちのキメ顔は、5秒と持たなかった……。

*

*

騒乱に包まれるリトルシヤイアを、ゴブスレニクスは懸命に駆けていた。

何故こんなにも必死なのか、自分でもよく分からない。だが、ゴブスレニクスにとって、住処を外敵に襲われるのは、どうしようもない程にトラウマだったようだ。

森の遠くの方から、轟音とともに地震のような振動が伝わってくる。見れば、新開発のビツクビツクリゴ布林薬（通称B B Gエキス）をキメたマッドマツデイクスが、巨神の如く巨大化していた。

正に「マツチヨサイエンティスト」といった風体だ。あまりにも巨大になりすぎて、木々の上に頭が突き出ている。

そんなジャイアントマッドマツデイクス相手に、まるで小さな羽虫のように飛び回り、戦いを挑んでいる者たちがいた。あれがきつと、噂の「見習い冒険者たち」なのだろう。遠目にだが、ヒトの姿をしているのが見て取れた。

その中でも一際強い「光」を放つ存在に、どういう訳かゴブスレニクスは目が釘付けになる。

「……赤色の髪？ グッ、頭がツツツ!」

突然、激しい頭痛に見舞われるゴブスレニクス。

頭の奥底から、*“何か”*が浮かび上がって来そうになる。

記憶の片隅にいる「誰か」

今にも泣き出しそうな顔をした「誰か」

赤い色の、長い髪の毛の「キミ」

大切な「ヒト」

思い出したい記憶。

思い出すべき思い出。

でも思い出せば、何かがコワレテシマイソウで、それが怖くて、ゴブスレニクスは頭を振り払って再び駆けた。

目指す場所は改修中の「リトルシャイア城」——緊急事態の時には、ここに集まるよと言われている。

「シュココオ……シュココオ……」

おお！ おお！ ゴブスレニクス！ いいところにキタキタゴブ！

リトルシャイア城に辿り着くやいなや、そう呼び止められるゴブスレニクス。

見渡せば、数名のゴブリンとともに、アルデニクスが手を振っていた。

僅かな安堵の後、そちらへ駆け寄るゴブスレニクス。奇妙なことに、その場にいるゴブリンたちの何名かは、普段とは違うカラフルな防護服に身を包んでいるようだった。

赤色マスクのレッドゴ布林、緑色マスクのグリーンゴ布林、黄色マスクのイエローゴ布林、青色マスクのブルーゴ布林、そしていつもどおりのアルデニクス……。「……オマエは普通なのだな」

「シユココオ……シユココオ……」

今回アルデニクスは 司令官ポジゴブから 仕方がないゴブ！」

なんのこつちや、と首を傾げるゴブスレニクス。

「シユココオ……シユココオ……」

それよりこれよりゴブスレニクス きつきも言ったが いいところに来たゴブ

ちようど ゴブ手不足で ゴブゴブ困っていたところゴブ！

でもでもこれで 頭数は揃ったゴブ！ 準備はいいゴブか？ 今こそ出撃の時ゴブ

!!

「うおおお！ テンションが上がってきたゴブウウ!!」

「オツシヤアアア！ ヤツたるぜゴブウウウウ!!」

「けちよんけちよんに してやるゴブよオオオオ!!」

「待つてろゴブよ！ 見習い冒険者ゴブウウウ!!」

「オ、オイ待てツツ！ ワケが分からんぞツツ!!」

状況が読めず、困惑するしかないゴブスレニクス。

でもでもそんなことはお構いなしに、テンションアゲアゲMAX中のアルデニクスたちは、あらほれさっさとゴブスレニクスを捕まえて、エイヤと高く持ち上げた。

「ささ、いいから何も言わず、これ”に乗り込むゴブ!”

嫌だと言つても、その見た目によらず実力者なアルデニクスの前には、抵抗は無意味だろう。

されるがまま、ゴブスレニクスはあれよあれよという間に、アルデニクスの言う”これ”に放り込まれてしまった。

「プシューウー」つという音と共にコックピットの扉が閉まり、ディスプレイがチカつと点灯する。画面には『ジャステイスシステム律動開始』と表示されていた。

『ピピピッ! ジャステイスシステム律動開始……コンバットシステムダウンロード……戦闘データインストール中……火器管制システムオールグリーン……搭乗員ノ生体認証ヲ開始……スキャン中……ピピピッ! 認証完了!』

ヨウコソ! コードネーム『シルバーゴブリン』アナタヲ 当機体ノ搭乗員ニ任命シマス 全システムニアクセス可能 ゴ命令ヲドウゾ!

「なんだこれは? なんだこれは? なんだこれは!」

「さあ みんな! 「マッチョサイエンティスト」が時間を稼いでる 今がチャンスゴブよ! 機巧戦隊ジャステイスレンジャー! 律動発進ゴブウウウツツ!!」

「なんなんだこれうおおおおあああああああ!?!」

ゴブスレニクスの悲鳴は、超高速で飛び出した“五体”の機動兵器とともに、彼方へとかき消えた。

そしてそれを、アルデニクスが白いハンカチーフを振って見送る。

戦いはまだ始まったばかりだ!

*

*

リトルシャイア城を飛び出して、ミダースウエイを翔ける五つの機影! ゆくぞ我らのジャステイスレンジャー!!

先頭行くは青の機影! その名もこの名も「プラスター」! ミラージュアタック忍者兵!

次ゆく機体は黄色の機影! その名もこの名も「プロウラー」! ドリルバスター武装兵!

続く戦士は緑の機影! その名もこの名も「スウィンドラー」! ハイトカウント算術兵!

さらなる兵士は赤の機影! その名もこの名も「ボルテッカー」! ウルトラフラッ

シユ魔道兵！

それから大きく後退し、遅れて行くは謎の機影！ 防衛参謀「オンスローター」！
ちよつと拙い操縦だけど、一体どうした「オンスローター」!?

「ゴブウウウ！ ま まいつたゴブウ」

轟音を立て、崩れ落ちるジャイアントマッドマツデイクス。

どうやらカレらの戦いは、見習い冒険者たちの勝利で終わったようだ。

一体どんな経緯があつたかは分からないが、いつの間にか、見習い剣士と見習い魔法使いが、野性み溢れた「ゴリラ」の姿へと変貌している。一体、ナニがあつたというのだ……。

「まさか アニマル変身システムを そんな風を利用するだなんて 思つてもみなかつたゴブ……ゴブの負けゴブ……でも ゴブを倒しても 第二 第三のゴブリンが 必ずやオマエたちを……ゴ ゴブウンン!!」

ドカーン！

ありがちな捨てゼリフを吐いて爆発四散するマッドマツデイクス。そこはかたなく満足げなマスクをしていたのが、妙に憎たらしい。

乙女にあるまじきゴリ体を、現在進行形で晒している見習い剣士と見習い魔法使いだが、しかし、彼女たちに休んでいる暇などない。第二、第三のゴブリンたちは、もう直

ぐそこまで迫ってきているのだ！ 物凄い早さのフラグ回収である。

「シユゴオ……シユゴオ……」

よもや マッチョサイエンティストを倒すとは やるゴブな 見習い冒険者ツ！

「しかし マッチョサイエンティストは 我ら律動四天王の中でも 一番の小物ツ！」

「我らがジャステイスレンジャーの 敵ではないゴブわツツツ!!」

「覚悟するといいいゴブ 見習い冒険者！ 行くぞ ジャステイスツツ!!」

「行くぞ ジャステイスツツ!!」

ジャステイスレンジャーが決めポーズをキメると、それに合わせ、ソツケンソングスの親父譲りのトランペットが高らかに鳴り響き、道行くゴ布林たちが大合唱する！
言わずもがな、機巧戦隊ジャステイスレンジャーのテーマソングである！

バシツ カチツ クルクル グーン ヒュー ドツカン ブーン！

怖れよ 我らがジャステイスロボ！

バキツ ズンツ バチバチ バーン ビイー バツカンズーン！

赤き火花が散り 真紅の輝きが爆ぜる！

不快な奴らの足を止めろ！

信管外してポンツ！ 骨を抜いてブチツ！ 気圧を下げてバーンツ！

システムチェックOK 《これが説明書ゴブ?》

ああしてこうして……あつ 《あつ!?》

なんか変なエラーが出たゴブ 《天体ノイズを発見!》

大丈夫 大丈夫 多分大丈夫 《精神錯乱の疑いナシ!》

ゴブウ なんとかならんものか 《周波数を正しく合わせて下さい!》

このボタンはなんだつけゴブ? 《エーテルフロウが起きています!》

ええい もういつちよポチツ! 《伝送ヲ開始シマスカ?》

七、二、三、二、三……送信ゴブ! 《キター!》

ジャステイスレンジャー 緊急出撃要請!

全力デ以ツテ迎撃セヨ!

コンバットシステム律動……全機リンク開始…… //同調//セヨ!

行けツ! 我らがジャステイスレンジャー!

大盛り上がりの戦闘ソングだが、かくも猛き見習い冒険者の前に、ジャステイスレンジャーですらもあと一步というところで及ばない!

乱れ飛ぶ、ブラスターの分身の術、プロウラーのドリルミサイルバスタービーム、スウインドラーの生命計算術、ボルテッカーのウルトラフラッシュユースーパーサイクロン—

―その中を、見習い冒険者たちは紙一重で掻い潜る、掻い潜る、掻い潜るッ!!
その光景を、シルバーゴ布林ことゴブスレニクスは、オンスローターの中で見つめていた。

人知を超えた戦い。その中でも、特に惹きつけられる姿。赤い髪の少女。目を離すことが出来ない。

揺れる機体、伝わる振動、記憶のノイズ。激しい頭痛が襲い、胃の中がグチャグチャになる。

「グツ、ガア……ガアアアアアアア！」

頭を押さえ叫ぶ。視界がグルグルして、上か下かも分からない。それでも、決して目を離すことのできない少女の姿。もはや自分が何者で、何をすべきなのかさえ不明だ。

「アアアアアアアアアア……頭が、頭が……」

苦痛に呻くゴブスレニクス。

戦いに夢中なゴ布林たちは、そんなカレの異常に気付くことができない。

防衛参謀「オンスローター」の不調により、徐々に追い詰められていくジャステイスレンジャー。

しかし、恐れる必要はない！ まだカレらには「奥の手」があるのだからッ!!

「シュココオ……シュココオ……」

なかなかやるゴブな 見習い冒険者！ こうなったら 奥の手ゴブ！

今こそ ジャステイスロボの “真の姿” を見せつける時ゴブ！」

「ゴブウウウ ついに あれをやるゴブか!？」

「ゴブゴブ！ 覚悟をキメるゴブ！ ゴブは出来てるゴブ！」

「さあ みんな！ 声を揃えて叫ぶゴブ！」

じゃあ みんな準備はいいゴブか？

イチニのサンで叫ぶゴブ！

せーのっ！

ブルート！

ジャステイス！

トランス……『ピーピーピー！ エラー エラー！ コンバットシステム二重大ナエ
ラーガ発生シマシタ！ ブルートジャステイス トランスデキマセン！』

「ゴブウウウ!? ど どういうことゴブ!?」

ナ、ナンダッテーツ!?まさかの事態に慌てふためくゴ布林たち。

『コンバットシステム律動不能! 『オンスローター』ニ異常アリ! 『ガッツ』ガ足リナイ! 『ガッツ』ガ足リナイ!!』

まさかのガッツ不足!

絶賛精神錯乱状態に陥っているシルバーゴ布林には、ガッツが不足していた! これはジャステイスロボにとって致命的だ!

ピコン! オンスローターのコックピット画面に、現場指揮官であるレッドゴ布林の慌てた様子の姿が映し出される。

「シルバーゴ布林! シルバーゴ布林! 一体全体 どうしたゴブか!」

「ああああ……あ、頭がツ」

「頭? 頭が痛いゴブか? もしかして 乗り物酔いゴブ——」

「隙ありツ!」

「ゴゴブウン!」

一閃——見習い冒険者の剣撃に、コアをやられてしまったのか、紫電を進らせて、一撃のもとに爆発四散するボルテッカー。

そしてそれを皮切りに、次々とジャステイスロボは打ち倒されてしまう。

全てを思い出した！

*

*

ゴブスレニクスが次に目を覚ましたのは、何の変哲もないゴ布林個室だった。無機質な天井がゴブスレニクスを静かに迎える。

「むっ？ 目覚めたようだな……」

横から女の声があった。身に覚えのない声だ。ゴブスレニクスは僅かに訝しめる。

体を起こし視線を向けると、そこには長髪の女がいた。やはり身に覚えのない女だった。

「……オマエは、誰だ？」

「起きて早々その質問とは……まあ、その様子じゃあ、特別問題はなさそうだな。私の名前は……あー「見習い剣士」だ。『ここ』では、そういうことになっている」

「その見習い剣士サマが、俺になんのか？」

「初対面の人間に対して、随分なご挨拶だな。気絶したオマエをここまで運び、看病してやったのは誰だと思っている？」

「ゴブリン共だ」

間髪入れずゴブスレニクスは答えた。

見習い剣士は僅かに驚きの顔をして、小さな声で意外そうに「まあ、そうなんだが……」つとと言う。

「それで、アンタはどうして『ここ』にいる？」

ゴブリンの個室は、基本的に持ち主以外は立入禁止だ。たとえ看病のためだとしても、人間の女がこの部屋にいるのは有り得ない。何か相当な理由が無い限りは……。

「まあなんだ……こちらにも、少しばかり事情があつてな。今回は特別に許可してもらつた」

それから見習い剣士は神妙な面持ちをして続ける。

「本来なら勇しや……いや、ここでは「見習い冒険者」だつたな。その見習い冒険者から言うのが筋なのだろうが……今は彼女も立て込んでいてな。特にこういった事情の場合、ストレート過ぎる彼女では混乱を招きかねないので……」

「そういうアンタは相当回りくどいようだ。言いたいことがあるなら、さつさと言う方がいい」

ゴブスレニクスのあんまりな言い様に、渋い顔を浮かべる見習い剣士。

ややあつてから、彼女は語り始めた。

「……いいか、落ち着いて聞いて欲しい。オマエは自分のことをゴ布林だと思ってるのかもしれないが、本当は——」

「ゴ布林ではないのだろうか？」

あつさりそう答えるゴブスレニクス。

「驚いたな、気付いていたのか？」

「ああ、正確には『思い出した』だが、アンタたちとの戦いで吹き飛ばされた時、全てを思い出した……」

自分が何者だったのか、その記憶も、その思い出も、そして本当の「名」も、何もかもを思い出した。

「俺はゴ布林を狩る者——ゴ布林スレイヤー」

本当の「名」を取り戻したゴ布林スレイヤーはそう呟くと、そのまま立ち上がり、迷うことなく部屋を出ていこうとする。

そんなゴ布林スレイヤーの背中に、見習い剣士は言葉を投げかける。

「……私たちは、オマエの搜索依頼を受けた冒険者だ。だから、オマエの経歴や事情は多少なりとも知っている。オマエが過去、ゴ布林たちにどんな仕打ちを受けたのか。オマエが今、どんな生業で生計を立てているのか、多少なりともな……」

「……それで？」

足を止め、背中越しにゴブリンスレイヤーが問う。

「気持ちには理解できなくもないが、忠告しておこう。止めておけ。『カレラ』はオマエの悲劇とは無関係だし、何よりも——」

「知ったことか」

ゴブリンスレイヤーが遮って言った。

「そんなこと、知ったことか。俺はゴブリンスレイヤー。ゴブリンを殺す者。たとえどんな『モノ』であろうとも、ゴブリンは許すことはできない。ゴブリンは殺す。何であろうとも……」

「それが、『家族』や『友人』であつてもか？」

「……」

何も言わず出て行くゴブリンスレイヤー。

残された見習い剣士は、そんな彼を見送ると、平静な声で言った。

「……何も言わずじまいか。さて、どうなることやら」

少なくとも、僅かに歩を止めたことを、見習い剣士は見逃さなかった。

*

*

リトルシャイアのレンドロン広場では、今、盛大な「宴」が行われていた。

時刻は夜——星々の煌めきが広場を照らし、月の光が降り注いでいる。外界とは隔絶された、神秘的な雰囲気醸し出されていた。

レンドロン広場中央に設置されているゴルダナル大碑石の前では、巨大な焚き火が燃え上がり、その周囲では、豪勢な食事や飲み物が配られ、参加者たちの空腹を満たしている。

その中心にいるのは、見習い冒険者と、そのお供である見習い魔法使いだ。見習い剣士の姿はここにはないが、なにやら大事な用事があるそうで、ゴ布林たちはあまり気にしていなかった。まあ、そんなこと、よくある話である。

ゴ布林たちと見習い冒険者たちの戦いは、見習い冒険者たちが勝つとこうして宴が執り行われ、ゴ布林たちが勝つとこうして宴が執り行われる決まりになっていた。

つまりどちらが勝つても宴が行われるのだ。

お互いがお互いの健闘を称え、お互いがお互いの勝利を讃える。何時の頃からそうなったのか忘れてしまったが、いつの間にか、そういうことになっていた。

ワイワイ、キャハキャハ、ゴブゴブ、シユココシユココ……かつては独特すぎたゴ布林料理の味付けも、暫く来ないうちに人間好みの味付けになっていて、見習い冒険者たちも上機嫌。宴はかつてないほど盛り上がり、最高潮に達する。

そんな中、闇夜に紛れ、ゆつくりと歩を進める者がいた。ゴブリンスレイヤーだ。

ゴブリンスレイヤーの心の中では、いま、戸惑いと葛藤が渦巻いていた。

ゴ布林たちに恨みはある。消えかけていた怨嗟の炎は、再び彼の中で業火の如く燃え上がり始めていた。ゴ布林死すべし慈悲はない。

だがその反面、カレらと共に過ごし、カレらと共に暮らした思い出も、確かに彼の中で生き続けていた。ほんの僅かな束の間の安息。それはとても儂いものだったが、確かにあったものだ。

両者とも、そう簡単に捨て去れるものではない。

恨み、憎しみ、苦しみ。

安らぎ、いたわり、慈しみ。

感情の天秤が激しく揺れ動き、ゴブリンスレイヤーを惑わせる。こんな思いは初めてだった。どうすればいいのか迷っていた。ゴブリンの事だというのに。

だからこそ、ゴブリンスレイヤーは「カレ」のところへと向かった。他でもない、ゴ布林たちのリーダー、アルデニクスの下へ。

ゴ布林を殺す者が迷いあぐねた挙げ句、ゴ布林の下に向かうとは、なんとという皮肉だろうか。皮肉すぎて、頭が可笑しくなりそうだった。ゴブリンスレイヤーは兜の奥で、自分自身を嘲笑した。

だがそれも仕方のないことだ。困った時に「カレ」に相談するのが、「ここ」のやり方なのだから……。

炎の影から姿を現すゴ布林スレイヤー。そんなゴ布林スレイヤーを、アルデニクスは驚きもせず迎えた。

「シユココオ……シユココオ……」

そんなところで なになににしてる ゴブスレニクス？ 寝ててなくて 大丈夫ゴブか？」

返答せず押し黙るゴ布林スレイヤー。

様子のおかしいゴブスレニクスを見て、アルデニクスは大体のことを察した。

「……ああ そうゴブか……思い出したゴブか」

ゴ布林スレイヤーは頷いて答える。

「ああ」

それから沈黙が暫く続いた。

宴の喧騒が、どこか遠くに聞こえる。

月と星に雲がかかり、暗闇が差す。炎に揺らめく一人のニンゲンと、一匹のゴ布林。両者の影はどこか似ていたが、結局、一度も交わることはなかった。

「……アルデニクス。俺はアンタに話があつて来た」

その声色から、気楽な返答ができる内容ではないことを、アルデニクスは素早く理解した。

だからアルデニクスは真剣なマスクをして、真摯な口調で答えた。

「シュココオ……シュココオ……」

そうゴブか きつときつと 大切なお話ゴブね」

アルデニクスが盛りに盛り上がる宴の中心地に視線を泳がせる。

「ならなら少し 場所を移すゴブか……」

ゴブリンスレイヤーも同じ方向を見て「ああ、そうだな」と応えた。

*

*

アルデニクスとゴブリンスレイヤーはゴブ気のない場所に移動すると、小さな焚き火をつけ、それを境にするようにお互い向き合い座った。

「シュココオ……シュココオ……」

それでこれで ゴブスレニクス お話って ナニナニゴブ？」

長い長い沈黙があつてから、ゴブリンスレイヤーが静かに語りだす。

「俺はゴブリンスレイヤー。ゴブリンを殺す者。俺はゴブリンではない。俺は……人間

だ」

衝撃の告白——そう思われたが、当のアルデニクスはそれを当然のこのように受け入れた。

「驚かないのか？」

「シユココオ……シユココオ……」

実は実は アルデニクス “それ” 知ってたゴブ

オマエさんがニンゲンだつてコト 分かつてたゴブ」

「……なぜ、黙っていた？」

重々しく問い詰めるゴブリンスレイヤー。

「アルデニクス 遠い遠い場所の 遠い遠い世界のゴ布林ゴブ

そこでは ニンゲンいっばいたくさん ニンゲン以外もたくさんいっばい

だから ゴブスレニクスのことも ひと目でわかったゴブ

無用な混乱を避けるためだったゴブが これまでずっと黙つてて ごめんなさいゴ

ブ」

ペコリと頭を下げるアルデニクス。その様子はまるで隙だらけで、ともすれば、この場でマスクごと斬り落とすこともできそうなほどだった。

だが、ゴブリンスレイヤーはそうはしなかった。

それが気の迷いだということは理解していたし、正直な話、この程度の奇襲でこのゴブリンを倒せるとは到底思えなかったからだ。

パキツという薪の焼き切れる音が、暗闇の中で響く。アルデニクスとゴブリンスレイヤーの会話は続いていた。

「アンタは俺を人間だと知っていて、俺を受け入れていたのか？　なぜだ？」

「なげもなにも　オマエさんは記憶を失っていたし

それに　ニンゲンだからといって　見捨てるワケにはいかなかったゴブ」

「情けをかけたつもりか？　ゴブリンのクセに？」

「そう　情けをかけたつもりゴブ　ゴブリンのクセに」

これは上手いこと言った、とゴブゴブ笑うアルデニクス。

まるでゴブリンらしからぬ言い草だ、とゴブリンスレイヤーは思った。だが同時に、実に「カレ」らしい言い草だとも感じていた。

記憶が駆け巡る。リトルシャイアでのゴブリンたちとの思い出。ゴルダナルのゴブリンたちは、ゴブリンスレイヤーの知るどのゴブリンとも違っていた。

知性を持ち、言語を解し、文字を使い、文明を築く――まるで人間のように暮らすゴブリンたち。マスクをしたゴブリンたち。善良なゴブリン。

「オマエたちは、本当にゴブリンなのか？」

核心を突く質問。そう、本来ゴブリンスレイヤーは、それを知るために“ここ”に来たのだった。修道女が語った「善良なるゴブリン」という有り得ない存在を確認するために。

もしほんとうにそんなモノが実在するならば……。

「シユココオ……シユココオ……」

もちろん そちろん ゴブたちは 正真正銘のゴブリンゴブ

生まれてこの方ゴブリンで これから死ぬまでゴブリンゴブ」

あつさり肯定してみるアルデニクス。

そう、どうして否定することができようか。ヒトがヒトであることに誇りを持つように、ゴブリンもまた、自らがゴブリンであることに誇りを持つのだ。何があろうとも、それを否定することはできない。

ゴブリンスレイヤーは大きく息を吐いた。まるで溜め込んだ“迷い”を吐き出すかのように、大きく大きく息を吐いた。

炎を見つめたまま、ゴブリンスレイヤーは言った。

「俺はゴブリンスレイヤーだ……」

ゴブリンスレイヤーはゴブリンが憎かった。

「これまで何千、何万というゴブリンを、この手で葬ってきた……」

ヤツらは姉を殺した。おじを、おばを、村人を串刺しにし、家を焼き払った。ゴブリンスレイヤーの故郷を奪ったのだ。

「ゴブリンを殺すことだけを考えてこれまで生きていた。ゴブリンを殺すことだけが生き甲斐で、ゴブリンを殺すことでしか、人生に意味を見いだせなかった……」

ヤツらにいいように喰い物にされ、陵辱されるサマをずっと見ていた。恐怖と寒さに震えながら、鼻水を垂らしずっと「そこ」で見ていた。物置部屋の隙間から、姉が姉でなくなるのをずっと見ていた。

「それを後悔したことはない。それを疑ったこともない。何時か必ずそうしてやると、他でもない自分自身に誓ったからだ……」

何もできなかった。何もしようとすらしなかった。ただヤツらが飽きて去っていくのを、怯えながら震えて待っていることしかできなかった。

「だから教えてくれ……」

断じて許せるはずがない。許されていいはずがない。ゴブリン共は皆殺しだ。みな須らく絶滅すべき存在だ。

だというのに……。

「俺はオマエたちを殺すべきか？」

ゴブリンを殺す者からの、殺される者への問いかけ。なんと矛盾を孕む、滑稽な質問

だろうか。

それでも問われたアルデニクスは、暫し押し黙り、電子回路に電流が流れるように高速で思考を巡らせた。これがとても重要な問答だと理解したからだ。

アルデニクスは、この世界のゴ布林が、元々どういう性質を持つていたか理解していた。

下品で、不潔で、下劣な、知性の欠片もない原始的で野蠻な生命。概念的に同族であったアルデニクスだからこそ、ここまで通じ合えることができ、ここまで文明化させることができたのだろうか、ただのヒトであれば、ゴ布林の存在は害悪以外の何者でもないだろう。

この世界のゴ布林の有り様は、まるで人類に仇なすためだけに生み出された、邪悪なる「駒」だ。それがアルデニクスは悲しくて、苦しくて、悔しかった。

「シユココオ……シユココオ……」

もし オマエさんが 本気でゴブたちを殺したいなら ゴブはそうするべきだと
思うゴブ」

様々な思いを巡らせ、アルデニクスはそう答えた。否定しようがないのだ。アルデニクスがゴ布林であることを否定できないように、ゴ布林スレイヤーがゴ布林を殺す者だということを、否定することはできない。

「オマエさんの気持ちは分かるゴブ……と 気安く言うことはできないゴブ

オマエさんの過去に何があつて ゴブリンとの間に何があつたのか ゴブには分からないし 分かることもできないゴブ でも 分からないからこそ オマエさんの在り方も 有り様も 否定することはできないゴブ」

でもだからといって、滅びを甘んじて受け入れるつもりは断じてないゴブ、ともアルデニクスは付け加える。リトルシャイアのゴブリンたちは、平和主義者だが無抵抗主義者ではないのだ。やる時はやるのだ。

「ゴブたちは 平穩を享受するためには 時に戦う必要があることを 重々理解しているゴブ」

だからこそ、武器を持ち、武装を固め、兵器を造り、武力を高めてきたのだ。

「平穩を脅かすモノなら たとえそれが『同族』であつても それは変わらないゴブ」

ゴルダナル大森林は、その豊富な資源ゆえに、度々他の勢力から危険に晒されてきた。混沌の軍勢、深淵の亡者ども、ダークエルフ……当然その中に、ゴブリンがいないはずがない。

「分かり合えるゴブリンもいれば 分かり合えぬゴブリンもいたゴブ」

多くの場合、分かり合えぬゴブリンばかりであつた。何かしらの勢力に属するゴブリンは、どうやっても説得することが出来なかつたのだ。捕まえて無理やりマスクを被せ

でも無駄だった。持ち主のないマスクが保存されるばかりである。

「だから オマエさんに “その覚悟” があるならば ゴブたちは受けて立つゴブ」

アルデニクスの言葉に迷いはなかった。それがゴブスレニクスの “やりたい事” であるならば、受け入れる道以外にないのだ。ゴルダナルのゴ布林たちは、いつだってそうやって生きていたのだから。

アルデニクスの言葉に迷いはなかった、だがその中に、多くの躊躇いがあった。だからこそ、最後の最後に小さく、こう付け加える。

「でも できることならば オマエさんとは これからも “家族” でいたいゴブ」

ゴ布林スレイヤーはアルデニクスの言葉を噛みしめる。

ゴ布林スレイヤーはアルデニクスのことを見ず、ずっと揺らめく炎を見つめていた。炎を通してカレを見ようとしていたのだ。焚き火の向こうにいるのは、ゴ布林スレイヤーがこれまで知り得なかった、 “善良なるゴ布林” だった。

こんなコトを言つてのけるゴ布林がこの世に存在するとは、 “ここ” に来るまで考えもしなかった。文明化したゴ布林。言葉を解し、文字を得て、技術を磨く異形のモノ。

有り得ないことではなかった、と今更ながらに思う。ヤツらは馬鹿だが間抜けではない。道具を与え、使い方を学び、技術を教えてやれば、ヤツらは驚くほど吸収する。だ

からこそ、*“その可能性”*は無くはなかった。

もしかすると、心の片隅で、何処かそう願っていた部分があったかもしれない。この世に「善良なるゴ布林」が存在するという、その馬鹿げた可能性を……。

このリトルシャイアのゴ布林たちは、ある意味ではゴ布林スレイヤーが最も危惧していた存在だった。いや、もつと悪い存在なのかもしれない。だが、またある意味では、最も待ち望んでいた存在でもあった。

知性を持ったゴ布林。それも、悪性でなく善性をもった。

これまでゴ布林スレイヤーは、決して自ら進んでゴ布林を狩ってこなかった。もし本当にゴ布林を絶滅させたいのであれば、手当たり次第、無作為にゴ布林を殺して回った方が有意義なはずなのに、彼は決してそうしようとはしてこなかった。それが意識的にしろ無意識的にしろ、*“依頼のないゴ布林の討伐”*を、意図的に避けてきたのである。その可能性を狭めないために。

彼のゴ布林退治に対する姿勢は、常に*“受け身”*であった。彼のゴ布林殺しは、「依頼」があつて初めて成立する。

それが、どんな理由からだったのか自分でもずっと分からなかったが、ここに来て、ようやくわかった気がした。

「俺はゴ布林スレイヤーだ」

噛みしめるように言う。それはまるで、自分自身に向けて言っているようで、一種の確認作業のようなものだった。

「俺はゴ布林を殺す者だ。これまで何千というゴ布林をこの手で殺してきた」

「ゴブたちとて、ゴ布林をその手にかけてきたのは、一度や二度じゃないゴブ」

もしかすると、積み上げてきた死体の数ならば、アルデニクスたちの方が多いかもしれない。いや、もしかなくとも、多いだろう。

「今日も、明日も、明後日も、俺はゴ布林を殺し続けるだろう」

「少なくとも、昨日」はそんなことはなかったし、今日も、そんなことはさせないゴブ」

売り言葉に買い言葉と言わんばかりのアルデニクス。

「……俺はゴ布林を殺す。殺し続ける。いつかこの身が朽ち果てるか、ゴ布林どもを殺し尽くすまで、俺は戦い続ける」

「それならゴブは、オマエさんがゴ布林を殺し尽くす前に、みーんなみーんな文明化させて、みーんなみーんな仲間にしちゃうゴブ、そしたら流石のオマエさんでも、手出しはさせないゴブよ！」

そこでようやくゴ布林スレイヤーは、焚き火越しではなく、正面からアルデニクスを見た。相手はマスクをしていて表情は読めないが、きつと自信たっぷりな顔をしてい

ることだろう。きつと、そうに違いない。

「……まるで『究極の幻想』だな」

呟くようにゴブリンスレイヤー。兜の下の彼は、その途方もない幻想に「笑み」を浮かべていた。

「オマエさんのだって　まるで実現出来そうにもない　『究極の幻想』ゴブ」

でもだからこそ、語る価値のある夢物語だ。人の夢は儂い、と誰かが言ったが、理想を追い求めなくては、ヒトもゴブリンも生きては行けないのだ。理想を語らずして、前には進めない。だからこそ、どんなに馬鹿らしい幻想でも、バカみたいに語る必要がある。

「……俺はゴブリンを殺す。それはこれからも変わらない。俺はずっとゴブリンどもを殺し続けるだろう」

変転し続けるこの世界において、決して変わらないものがあると信じ込んでいた。

「だが、一つだけ約束しよう」

相も変わらず蔓延り、溢れかえる小鬼ども。殺しても殺しても次の日には殺した以上に増えいて、腐肉を貪り、不浄を撒き散らす。どんなに繰り返しても果てがない。

ゴブリンどもは変わらない。でも、それこそがある種の幻想だったのだ。

「オマエたちが、今のような善良なゴブリンである限り」

自分がやっていることが、無駄な足掻きではないのかと思うこともあった。意味の無い挑戦をしているのではないのかと疑うことさえもあった。

「俺は善良なゴブリンは殺さない」

でもそんなことはないと言いつけ、たとえそうであっても良いと信じ込ませ、誰かがやらなくてはいけないコトだと己に課して、これまでずっと戦ってきた。

「オマエたちのようなゴブリンは殺さない」

その日々が無駄だったとは思わない。だが意味があつたとも思えない。ただひたすらに、ゴブリンを殺すことだけを考えて、ゴブリンを殺すことに全霊を懸けてきた。

「だがいつか、俺の幻想が実現するまで、俺はゴブリンどもを殺し続ける」

それはこれからも変わらないだろう。変えようとも思わないだろう。結局の所、ゴブリンスレイヤーは変わらない。変えてはならない。昔誓った祈りをそのままに、ゴブリンども絶滅させるまでは、ゴブリンスレイヤーは変わらない。

たとえ「カレラ」の存在を知ったとしても、たとえ善良なるゴブリンがいたとしても、ゴブリンスレイヤーには何ら影響を及ぼさない。変転し続けるこの四方世界において、それは変わらぬ一つの理だ。

だが……

「それならば一刻も早く、ゴブたちの幻想を實現しなくちゃゴブな オマエさんがゴ

プリンを狩り尽くすその前に　ゴブたちがゴ布林たちを文明化させてみせるゴブ」

だが、それでも……

「そうか」

少しだけ……ほんの少しだけだが……

「なら精々頑張るといい」

肩の荷が軽くなつた……

そんな気がした……

「おうともゴブ！」

だから　オマエさんも　頑張るゴブよ！」

ゴ布林スレイヤーは空を見上げた。

「……ああ」

その小さな眩きは、リトルシャイアの夜空へと消えた。

*

*

次の日の早朝、まだ朝の爆発が鳴るよりも前に、ゴ布林スレイヤーはリトルシャイアを去った。

何も言わず、誰とも会わずに出ていこうとしたが、当然のこのように、ゴ布林たちは総出で彼を見送った。

ゴ布林スレイヤーはゴ布林ではなくヒトであったが、だからといって、彼がゴブスレニクスとして共に暮らしたことが消えるわけではないのだ。

だから、ゴ布林たちはこれまでに無いほどに、盛大にゴ布林スレイヤーを見送った。なにせ彼は、リトルシャイアから巣立っていく、記念すべき最初の「家族」なのだから。

ゴ布林スレイヤーは少し困惑したが、このゴ布林たちはそういうものだど、妙に納得する部分もあった。

恥ずかしげもなく言うのであれば、多くのゴ布林はゴ布林スレイヤーとの別れを惜しんだが、何名かのゴ布林は密かに喜んでいた。その大部分が、独身街道まつしぐらなゴ布林（♂）だったのは、ご愛嬌だろう。でも決して、邪な考えがあつてのことではないということだけは、ここに明記しておこう。決して邪な考えなどないのだ。恋のライバルがいなくなったとか。

ゴ布林たちはゴ布林スレイヤーの門出に際し、多くのご馳走や、数々の便利アイテムなどの手土産を用意したが、その殆どをゴ布林スレイヤーは辞退した。

もう持ちきれない程の“モノ”を既に貰っていたからだ。それは物や形で残るようなものではなかったが、ゴ布林たちの持つ知識や知恵、経験、技術、そして何よりも、ほんのちよっぴりの“友情”を、ゴ布林スレイヤーは決してそれを口にしようとはしなかったが、カレらから貰っていた。

これ以上のモノが必要だろうか？

ゴ布林スレイヤーは、最後にゴ布林たちと一言二言会話を交わすと、それ以上は何も言わず、リトルシャイアを去った。

ゴ布林スレイヤーは振り返ることも、手を振ることもしなかったが、ゴ布林たち

は彼の姿が見えなくなるまで、手を振って見送った。きっと彼なりのケジメの付け方だったのだろう。

「シユココオ……シユココオ……」

行つてしまったゴブか……」

こうしてひよんなことからやって来たゴブスレニクスというゴ布林は、ゴ布林スレイヤーという「名」を取り戻して、ヒトとしてリトルシャイアを去った。少しだけ、ぽっかりと胸に穴が空いたよう、リトルシャイアがちよっぴり寂しい感じがした。「けれども、けれども、悲しんでいる暇はないゴブよ！

ゴブスレニクスに負けないように、ゴブたちも、急ピツチで作業を進めるゴブ！」リトルシャイアの中央にそびえ立つ「城」を眺め、アルデニクスはそう言った。カレらの「計画」が天を動かすのも、そう遠くはないだろう。

*

*

それからゴ布林スレイヤーは「辺境の街」に戻り、幼馴染の牛飼娘と再会した。

再会した彼女は、まるで幽霊を見たような顔してゴ布林スレイヤーを見ると、程なくして目から涙を流しゴ布林スレイヤーに抱きついた。

ゴ布林スレイヤーは「悪かった」だとか「心配かけたな」とか、ありきたりなコトしか言うことができず、ただただ泣きつく彼女のされるがままとなった。

どんなに心配していたか、どんなに寂しい思いをしたか、どんなに眠れぬ夜を過ごしたか、どんなに涙を流したか、どんな思いで彼女がいたのか、ゴ布林スレイヤーは彼女が満足するまでとことん聞いた。

相当な心配をかけた自覚はあつたのだ。自覚はあつたからこそ、彼女が何かを言うたびに、「悪かった」と言うしかなかった。この時ばかりは、ゴ布林スレイヤーも自身の語彙力の無さを呪った。

結局ゴ布林スレイヤーは、泣きじやくる彼女に対し、何処かに行くときは必ず行き先と期間を教えること、長期間になる場合は必ず旅先で手紙を送ること、決して無茶をしないこと、必ず生きて帰って来ること、たまには牧場の手伝いもすること、を約束させられ、更には二週間の謹慎処分を言い渡された後に許された。

ゴ布林スレイヤーはそれを甘んじて受け入れた。それほどの迷惑をかけた自覚があつたからだ。今回ばかりは全面的にゴ布林スレイヤーが悪い。

素直に受け入れてくれたゴ布林スレイヤーに、牛飼娘は微笑んだ。

それから束の間のあいだ——具体的には謹慎中の二週間——ゴ布林スレイヤーは牛飼娘とともに牧場の手伝いに没頭し、暫しの安息を過ごした。

作業をしていると、あの森で過ごした日々のが思い出される。

そんなゴ布林スレイヤーに対し、牛飼娘は、暫くない間に手付きが上手くなったねと密かに思った。

どういうワケか少しばかりの嫉妬心が浮かんできたが、それをゴ布林スレイヤーに話すことはしなかった。こうして無事に彼は帰ってきたのだ。それ以上のことは望むべきではない。少なくとも「今」は。

二週間の謹慎処分を終えて、ゴ布林スレイヤーは再び冒険者稼業に戻っていた。

牛飼娘もその叔父も、このまま牧場の手伝いで生計を立てていかないかと言ったが、ゴ布林スレイヤーにとってそれは考慮するべきことではなかった。

彼にはやるべきことがあるのだ。カレらとの約束を違えぬためにも、ゴ布林スレイヤーゴ布林を殺す者としてやるべきことが。

ゴ布林スレイヤーが久方ぶりに冒険者ギルドに行くと、多くの者は驚いた顔をした。チラホラと小声だが、「死んだと思っていた」だとか「生きていたのか」とかいう声が聞こえる。中には「クソツ、生きていやがったか、賭けに負けちまったじゃねえか」という台詞も聞こえた。

「耳」が良くなりすぎるのも考えものだなとゴ布林スレイヤーは思う。

「生きていたかゴ布林スレイヤー。お互い、悪運だけは強いみたいだな」

馴れ馴れしい態度の男に声をかけられた。顔馴染みの男だ。確か、同時期に冒険者になった男のはずだ。名前は覚えていない。

「ああ、運がいいことにな」

男は、ゴブリンスレイヤーが答えるとは思っていなかったようだ。呆気にとられた後、意外そうな顔を浮かべて、フツと笑った。

「ああ、運がいいことにな」

男はそれだけ言って去って行ったが、どこか、満足気な顔をしていた。

何がそんなに嬉しかったのかと、ゴブリンスレイヤーは訝しんだが、程なくしてそんな考えは頭から消えた。仕事の時間だ。

いつものように受付に行き、ゴブリン退治の依頼はないか問う。対応したのは、やはり顔馴染みの受付嬢だった。

ゴブリンスレイヤーの顔を見ると、受付嬢は口をあぐりと開けて我が目を疑うような顔を見ると、瞳を真っ赤に充血させて、しどろもどろに言葉を発しながら、依頼を何件か紹介してくれた。

「寝不足か？」

ゴブリンスレイヤーにはそうとしか思えなかった。明らかに呂律が回っていないし、目が赤く腫れている。睡眠不足の初期症状だった。

「寝不足はパフォーマンスを低下させる。養生した方がいい」

全くゴブリンスレイヤーらしからぬ助言。現にゴブリンスレイヤー自身も、らしくないと思つた。だからこそ、言われた受付嬢は、もつと意外に思つたに違いない。

まるで心外だと言わんばかりに、口をパクパクさせて硬直している。

そこまでのことだったか、とゴブリンスレイヤーは首を傾げたが、あまり深くは追及しなかつた。だかららしくない事はするもんじやないのだ。

何時までも停止する受付嬢を余所に、ゴブリンスレイヤーは紹介された依頼を全て受け、ギルドを出た。

辺境の街の、先のそのまた先の先にある、辺鄙なところの森に住むゴブリンたちのことは、ゴブリンスレイヤーはギルドには黙っていた。

何よりもそれをカレらは望んでいたし、そうした方がいいとゴブリンスレイヤー自身が判断したからだ。カレらは平穩を望んでいる。カレらが人目を避けて暮らしている限り、干渉するべきではない。

同情……と呼べる感情があるのは否定しきれないだろう。だが、真実のところ、藪をつついて蛇を出すにはいかなんかという冷静な判断があつた。最悪“蛇”ならまだいいだろう。だが、カレらは“蛇”などというレベルでは決してない。

ゴブリンスレイヤーは肩慣らしとばかりに引き受けた依頼を完璧にこなし、鮮やかに

解決してみせた。

驚いたことに、ゴ布林殺しに対する忌避感は全く無かった。ごく当たり前のよう
に、ゴ布林を殺せた。自分でも少し意外だった。だが、やはり自分は根つからの
ゴ布林を殺す者なのだ、再認識することができた。

なるほど「ヤツら」は「カレら」とは違うのだ。もはや別種族と言ってもいいかも
しれない。精神的な部分もそうだが、外見的な部分に関して、「カレら」と「ヤツら」
では一目で分かる差異がある。一抹の不安が拭い去られた瞬間だった。

ゴ布林スレイヤーは手早く仕事を終えた。

一仕事終えて、ゴ布林スレイヤーは思った。思った以上に爽快感がない。そして充
実感もない。ただただ坦々としていた。

どういった心境の変化だろうか、ゴ布林スレイヤーの中にあるゴ布林への憎しみ
は、前と比べて少しばかり薄れてしまっていたようだ。だがしかし、この仕事に対する
意欲は少しも衰えてはいなかった。どういうことか？

ゴ布林スレイヤーは疑問に思ったが、納得できる答えは出せそうにもなかった。た
だ、復讐心ばかりに囚われていた彼の人生に、何か違う「感情」が芽生えつつあるよう
であった。ゴ布林スレイヤーにはそれを言語化するの難しかったが、あえて言うな
ればそれは、「義務感」や「使命感」と呼ばれるものであったのかもしれない。

誰かがやらなくてはいけない仕事を、彼がやるのだ。復讐心からではなく「仕事」として。

予想していたよりも早く仕事が片付いたので、ゴブリンスレイヤーはちようどギルドで小耳に挟んでいた、とある「依頼」の様子を見に行くことにした。断片的な情報ではないが、どうやら、新米ばかりの一派パーティーが受けた「依頼」らしい。

長らくゴブリンたちに囲まれていて、すっかり察しの良くなったゴブリンスレイヤーは、直ぐ様、彼らのその後の展開を、おおよそ察した。

なんてことない、よくある話だ。

新米の冒険者たちが、初めての冒険としてゴブリン退治に赴く、なんてことは。

それがゴブリンによって追い詰められ、全滅してしまう、なんてことも。

まあ、よくある話だ。

だからゴブリンスレイヤーは、件の洞窟へと向かった。

それもまた、よくある話だった。

*

*

洞窟自体はよくあるゴブリンの巣穴で、ゴブリンスレイヤーにしてみれば、なんてこ

とない棲家だった。

暗闇の中を、ゴ布林スレイヤーは松明も持たず進んでいく。その足取りに、幾ばくも迷いはない。

つくづく便利なものだ、とゴ布林スレイヤーは兜の奥で思った。明かりのない暗闇だというに、まるで昼間のように辺りが鮮明に「視える」のだから……。

暗視バイザーとかいったか……その他にも、ゴ布林スレイヤーの「鎧」と「兜」は様々な機能を搭載していた。赤外線スキャンだとか、生命探知機だとか、音波集積装置とかが「ソレ」だ。他にも、多分、ゴ布林スレイヤーですら把握していない機能が多数あるのだろう。血生臭い、鼻が曲がりそうなゴブリンの臭いすらも気にならない。だが、それを正確に知覚することはできている。

先に来ていた新米たちは、それなりに腕に覚えがある者たちだったらしく、まだゴブリンの襲撃はない。

だが暫く歩いていると、生命反応があった。大きい人間サイズのものが二つと、小さなゴ布林サイズの反応が二つだ。程なくして、直視でもそれを確認することができた。

迷いなく、手に持つ短剣を投擲——流星のように放たれたそれは、吸い込まれるようにゴブリンの頭部に直撃し、そのまま一緒にいたもう一匹のゴブリンの心の臓までも貫

いた。

暗闇でも正確無比だというのに、これだけ視界が良好であればさもありなんという結果だ。ゴ布林ンスレイヤーは何の感慨もなく「二つ」と言った。

だが、そんなことわざわざ言う必要はなかったかもしれない。なぜなら彼の視界の隅の方には、ご丁寧にも「2」というカウントが表示されていたからだ。

「駆け出しか」

聞かなくても知ってるだろうに、ゴ布林ンスレイヤーはそう言った。見たところ、「神官」と「魔術師」のようだ。どちらも女性。ゴブリンの巣穴ではあまり歓迎できない面子。ゴ布林ンスレイヤーは彼女たちの様子をチラリと窺う。

神官の方は……まあ、問題なさそうだった。だが、魔術師の方は問題がある。状況からして「毒」にやられているのだろう。

数瞬遅れて、ゴ布林ンスレイヤーの判断を後押しするかのようには、バイタルスキャンが彼女の異常を知らせてきた。思っていた通り、「ゴブリンの毒」にやられているようだ。よくある毒だが、言うまでもなく、ゴ布林さながらに面倒な毒である。

運が良い——誰に言うわけでもなく、ゴ布林ンスレイヤーは呟いた。

「あ、う……か、彼女を……た、助け」

「ああ」

それだけ言って、ゴブリンスレイヤーは鮮やかな手際で彼女に応急処置を施した。

ゴブリンの毒は厄介だ。喰らうと息が詰まり、舌が震え、全身が痙攣し、熱が出て、最期には死に至る。それにどうやら毒はもう全身に廻りきっているようで、傍目には手遅れのように見えた。だがそれは、かつてのゴブリンスレイヤーだったらの話だ。

「飲め」

腰のベルトポーチから、薄気味悪い色をした液体の詰まった小瓶を取り出し、魔術師に強引に飲ませる。

「死ぬほど不味いだろうが、死にたくなければ死ぬ気で飲め」

霞んだ意識の中で、魔術師は言われたとおり最後の死力を振り絞ってソレを飲んだ。

何度も嘔せ返り、この世のものとは思えないほど不味かったが、なんとかソレを飲み干すと、程なくして、動悸や目眩、全身の痙攣が収まり、安堵感からか、あるいは薬の副作用からか、魔術師は意識を失った。

「立てるか？」

ゴブリンスレイヤーは神官の方を見もせず訊いた。別に見ても構わなかったが、彼女の名誉のためにも、まあ、それくらいの配慮は必要だろうという、ゴブリンスレイヤーの心遣いからだった。

最初、女神官は自分が言われたのだと気づかなかったようで、暫し呆然としていたが、

すぐに我に返って言った。

「は、はい!」

それだけ元気に言えれば問題ないだろう、と判断しゴ布林スレイヤーはそのまま先に進もうとする。

「俺はあの横穴から行く。オマエはここで待っている」

「で、でも……」

「死にかけの仲間を放って置くつもりか?」

「そ、それは……」

そう言われてしまえば、何も言い返すことはできない。

それでも、女神官はどうしようもなく怖かった。この暗闇が、この臭いが、この地面の感触が、そして何よりも「ゴ布林」が恐ろしかった。この目の前の男は得体が知れなかったが、少なくとも「ゴ布林」ではない。そばを離れたくなかった。

あつて間もない知り合い以下の同僚と、自らの保身、どちらが大切かは考えるまでもないだろう。こんな窮地に於いては、どんなに清廉潔白な人間でも、保身に走るに違いない。それを非難することは誰にもできない。だがそれをあえて口にするのは、女神官は聖職者ゆえに憚れた。

そんな女神官の複雑な葛藤を読み取ったゴ布林スレイヤーは、あからさまに深々と

ため息をつく。

「魔術師はオマエが持て、足手まといになるな、自分の身は自分で守れ、余計な手出しはするな、それが守れるなら、黙ってついてこい」

らしくないと自分でも思う。だがそれも悪くない、とも思うゴブリンスレイヤーだった。

ゴブリンスレイヤーはそのまま、女神官を待つことなく横穴に踏み込んだ。後ろの方では、慌てた様子で女神官が支度をしている。それを逐一モニタリングしてくる「鎧」の機能が、少しばかり煩わしかった。まるで自分の深層心理を読み取られているようだ……。

横穴を進んだ先には、おそらく元人間であったであろう肉塊が、ゴブリンの死体と共に放置されており、ゴブリンスレイヤーの胸クソをより一層悪くした。

だが反面、安心した部分もあった。罪悪感など塵ほどもないが、やはり殺すなら、これくらい分かりやすい方がいい。

「つ、ぐ、う、ええええ……」

ゴブリンスレイヤーの背後を、おっかなびつくりついてきていたはず女神官の方から、なんとも言えない嗚咽の声と、ピチャピチャという水音がした。ツーンとした刺激臭が辺りに漂う。死体に慣れていなかっただろう。

ゴ布林スレイヤーは後ろで何が起きたのか大体察していたが、おそらく大惨事になっていであろう彼女のことを鑑みて、あえて聞こえなかったことにした。

「……九」

その間にもゴ布林スレイヤーは坦々とゴ布林を処理していた。遭遇したゴ布林は全て、先手かつ初撃での始末だった。ヤツらの殆どは、死んだことさえ認識できなかっただろう。

本来であればヤツらのテリトリーであつたはずの暗闇は、もはや、ゴ布林スレイヤーの一方的な惨殺場と化していた。

そんなゴ布林スレイヤーの足取りは、後ろを行く女神官には気づかなかつただろうが、僅かに早足だった。明らかに急いでいる足取りだった。

ゴ布林スレイヤーの生命探知機は、まだもう「一人」いることを報せていたからだ。急ぐ必要がある。ただし、焦りはしないし、慌てもしない。進む歩は着実で、油断はなく、慢心もまたない。彼はゴ布林スレイヤーなのだから。

そして辿り着いた。

汚らしい小鬼どもは悦楽の笑みを浮かべていたが、どうやら間に合ったようだ。ホブが一、シャーマンが一、その他が六。ヤツらはまだゴ布林スレイヤーの存在すら氣付いていない。お楽しみに夢中なようだった。

「イヤッ！ 止めて！ ヤダ、やだやだ、誰か助け——」

完全なる暗闇で奇襲を受けることなど、「ヤッら」は考えもしていなかったことだろう。初撃でシャーマン、返す刀でホブ、すれ違いざまに二、それから振り返って三、最後に慈悲もなく振り下ろして一。女神官が遅れてやってくる頃には、全てが終わっていた。

「何か被せてやれ」

広間を見渡し、ゴ布林スレイヤーは言った。「三人目」も無事だったが、まあ大方の予想していた通り、異性が見ていい格好はしていなかった。

「え？ あ、はい」

一瞬何を言われたのか理解していなかった女神官だったが、スグに理解し実行に移した。「三人目」は全身打撲痕に擦り傷だらけで、血に塗れていたが、なんとか正気を保っていた。泣きながら「ありがとう」とうわ言のように呟いている。

だがゴ布林スレイヤーはそんなことに微塵も興味はないようだった。彼が興味あるのは「ゴ布林」だけだ。それ以外にない。

ゴ布林スレイヤーがおもむろに歩を進めるのを、女神官は気付いた。

辺りにはゴブリンの斬殺死体が転がっている。あんなに恐怖の対象だったのに、安堵するどころか、見るも無残な光景だと哀れに感じた。気持ちが悪くなり、戻しそうにな

る。それを必死に堪え、彼を見つめる。これ以上何をするつもりなのか。

「……ゴブリンの、子供？」

ゴ布林ンスレイヤーの先にいたのは、そう、ゴ布林の子供だった。甲高い悲鳴をあげ、身を寄せ合って怯えている。

ゴ布林ンスレイヤーが剣を振り上げた。

「待つて下さいー！」

思わずそう叫んでしまった。叫んでから後悔する。止めたとして、どうするというのか。

だがゴ布林ンスレイヤーの動きは止まった。背中越しに女神官に問う。

「なんだ？」

「……子供も、殺すんですか？」

次いで出た台詞はそんな言葉だった。なんてありふれた言葉だろうか。ゴ布林に怯え震えていただけの女神官が言っても、少しも説得力は有りはしない。だが、それでも言わずにはいられなかったのは、彼女の生来の性格ゆえか。

彼女の言葉は、少なくとも、ゴ布林の子供たちの寿命を数秒伸ばすことには成功したようだ。

ゴ布林ンスレイヤーは暫し考え込むと、ややあつてから当然のことのように言った。

「当たり前だ」

もしかすると、正しく導けば、正しく教育すれば、あの森に住むゴブリンのように成長するかもしれない。その可能性は十分にある。あるいは捕獲して、カレらに預ければ、正しく生まれ変わるかもしれない。マスクをした善良なゴ布林に……。

だがそうではないかもしれない。

ならそれだけで、ゴ布林スレイヤーには十分だった。

それに、その「役目」は彼にはない。彼はゴ布林スレイヤー。ゴ布林テイマーでもゴ布林ファーマーでもない。ゴ布林を殺す者だ。彼の役目は、つまるところ、そういうことだった。

「生かしておく理由など一つもない」

だがあまりにも無慈悲過ぎるゴ布林スレイヤーの台詞に、神官はつい言葉を零してしまう。

「……善良なゴ布林が、いたとしても？」

言われてゴ布林スレイヤーは、心底可笑しくなった。マスクの下で笑みを浮かべる。笑顔を作ったのは久しぶりだったかもしれない。そんな当たり前のことを言われるだなんて！

「善良なゴ布林……探せば、いるかもしれない」

振り上げた拳に力を籠める。

ああそうさ。探せばいるだろうさ。現に「カレラ」は確かにいた。

「だが……」

でもだからこそ、違うと分かる。違っていると解っている。

だって「ヤツら」は……

「マスクをしたゴ布林だけが、良いゴ布林だ」

ゴ布林スレイヤーは躊躇なく剣を振り下ろした。

モニターのカウントは「21」になっていた。